

# 盛岡市内遺跡群

— 平成18・19年度発掘調査報告書 —

## 宿田南経塚

(宿田南遺跡)

2010. 3

盛岡市教育委員会





宿田南経塚と周辺遺跡（昭和 51 年撮影：国土画像情報「カラー空中写真」 国土交通省）



慶応年間の天昌寺～夕顔瀬付近（城下及近在図 慶応年間 盛岡市中央公民館蔵より一部拡大）



宿田南経塚遠景（南西より）



経塚全景



経塚主体部全景



経塚主体部土坑断面



経石 157 出土状況



経石 161 出土状況



經石（妙法蓮華經書写）



經石（梵字書写）



経塚盛土断面



経塚主体部土坑



# 序 言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約 30 万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には旧石器時代から江戸時代まで、およそ 780 箇所以上の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建設にともなう調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解く上で、大変貴重な成果をあげております。

本書は、平成 18・19 年度に実施した宿田南経塚の発掘調査の報告書であります。県内初見の多字一石経が出土するなど、貴重な成果が得られています。市民の皆様への地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりますが、事業の実施や調査・報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただいた地権者ならびに多くの市民の皆様、ご指導やご助言くださった文化庁記念物課、岩手県教育委員会生涯学習文化課をはじめ関係機関の皆様へ厚く御礼申し上げます。

平成 22 年 3 月

盛岡市教育委員会  
教育長 八巻 恒雄

# 例 言

- 1 本書は、平成 18・19 年度盛岡遺跡群発掘調査事業として実施した、盛岡市北夕顔瀬町に所在する宿田南経塚の発掘調査報告書である。本経塚は当初、経塚として認識されていなかったが、発掘調査によりその存在が明らかになったため、宿田南遺跡内に存在する経塚として「宿田南経塚」の名称を付けた。
- 2 本遺跡は、平成 18・19 年度に発掘調査を実施し、平成 20・21 年度に整理作業を行った。
- 3 本書の執筆は佐々木亮二が行い、各職員の協力を得て編集した。
- 4 遺構平面位置は、日本測地系 平面直角座標 X 系を座標変換した調査座標で表示した。  
宿田南遺跡  $X - 32,000 = R X \pm 0$  ・  $Y + 25,000 = R Y \pm 0$
- 5 高さは標高値をそのまま使用している。
- 6 遺跡範囲については、過去の調査成果と遺跡の地形、遺物の散布状況を基にして、推定の範囲を表している。

## 7 調査体制 —平成 21 年度—

教育長	八巻恒雄
教育部長	菊地 誠
教育次長	佐藤義見
歴史文化課課長	武藤英富（遺跡の学び館館長兼務）
課長補佐	袖上 寛（文化財・史跡担当）、千田和文（埋蔵文化財担当）
主査	杉浦雄治
文化財主査	室野秀文、菊池幸裕、津嶋知弘
文化財主任	神原雄一郎、権頭裕子、今野公顕、花井正香、佐々木亮二
主任	岡 聡
主事	小野寺幸子
主事補	明地幹子
文化財調査員	鈴木賢治、佐々木紀子、吉田里和、高橋 史、小西治子、渡邊久美子
学芸調査員	相馬容子、佐々木逸人

調査の実施・整理にあたり下記の方々より多大なるご援助と御協力を賜った。ここに御芳名を記して深く謝意を表する（五十音順、敬称略）。

[発掘調査] 泉山紀代子、嘉糠和男、川村久美子、佐藤公一、谷藤貴子、日野杉節子、女鹿麗子

[室内整理] 泉山紀代子、川村久美子、竹花栄子、藤村睦美、村上幸子、村上美香

[地権者・調査協力] 堀江 皓（地権者）、板垣幸榮（北夕顔瀬第二町内会公民館長）、岩手県教育委員会

[御指導・御助言]

井上雅孝（滝沢村教育委員会）、上杉智英（国際仏教学大学院大学）、落合俊典（国際仏教学大学院大学）、定源（国際仏教学大学院大学）、船場昌子（八戸市教育委員会）、松原典明（佛教石造文化財研究所）

- 8 発掘調査にともなう出土遺物および諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

# 目 次

卷頭図版・序 言・例 言・目 次

表目次・挿図目次・写真図版目次

I	遺跡の環境	1
II	調査成果	4
III	総 括	78

## 表 目 次

第1表	宿田南遺跡調査成果一覧	2
第2表	経石計測表	58
第3表	土坑墓一覧	64

## 挿 図 目 次

第1図	宿田南経塚と周辺遺跡	1	第24図	経石 144	25
第2図	宿田南遺跡全体図	3	第25図	経石 156	26
第3図	第9次調査区全体図	5	第26図	経石 162	27
第4図	経塚平面図	6	第27図	経石 111	28
第5図	経塚断面図	7	第28図	経石 153	29
第6図	経塚主体部土坑	7	第29図	経石 157	30
第7図	経塚主体部グリッド配置図	9	第30図	経石 31・181	31
第8図	経塚主体部 経石出土位置図	9	第31図	経石 60	32
第9図	経石 10 (1)	10	第32図	経石 97	33
第10図	経石 10 (2)	11	第33図	経石 43	34
第11図	経石 41	12	第34図	経石 135	35
第12図	経石 95	13	第35図	経石 108	36
第13図	経石 130 (1)	14	第36図	経石 170	37
第14図	経石 130 (2)	15	第37図	経石 101 (1)	38
第15図	経石 142	16	第38図	経石 101 (2)	39
第16図	経石 104 (1)	17	第39図	経石 77・159	40
第17図	経石 104 (2)	18	第40図	経石 6	41
第18図	経石 148	19	第41図	経石 124	42
第19図	経石 62	20	第42図	経石 34	43
第20図	経石 125	21	第43図	経石 1・7・9・22・14・24・30・45・48・49・53・56	44
第21図	経石 13	22	第44図	経石 83・88・89・114・122・127・36・68・91・103・154・167	45
第22図	経石 55	23	第45図	経石 2・4・15・17・38・90	46
第23図	経石 74	24	第46図	経石 105・113・123・132・8・23	47

第 47 図	経石 77・42・85・155・3・16・18……48	第 59 図	土坑墓（1）……………65
第 48 図	経石 46・106・19・47・57・37・66・138……49	第 60 図	土坑墓（2）……………66
第 49 図	経石 110・64・182・40……………50	第 61 図	土坑墓（3）、RG004 溝跡……………67
第 50 図	経石 126・27・92・79……………51	第 62 図	土坑墓・遺構外出土遺物（1）……………69
第 51 図	経石 44・5……………52	第 63 図	土坑墓・遺構外出土遺物（2）……………70
第 52 図	経石 26・29・52・54……………53	第 64 図	土坑墓出土煙管……………71
第 53 図	経石 69・70・81……………54	第 65 図	土坑墓出土遺物……………72
第 54 図	経石 84・128・87・93……………55	第 66 図	土坑墓出土古銭（1）……………73
第 55 図	経石 131・161・171……………56	第 67 図	土坑墓出土古銭（2）……………74
第 56 図	経石 160・168……………57	第 68 図	土坑墓・経塚盛土・遺構外出土古銭……………75
第 57 図	剥離痕のある経石（1）……………62	第 69 図	土坑墓・遺構外出土経石……………76
第 58 図	剥離痕のある経石（2）……………63	第 70 図	包含層出土遺物……………77

## 写真図 版 目 次

第 1 図版	経塚遠景、経塚全景	第 6 図版	1・2・6・8・23 号墓人骨出土状況、RG004 溝跡
第 2 図版	経塚主体部土坑内部、経塚主体部および盛土完掘状況	第 7 図版	剥離痕のある礫、礫 1・2・3 の剥離痕、経塚盛土出土 皇宗通宝
第 3 図版	主体部土坑礫出土状況、礫詰め方状況	第 8 図版	土坑墓出土 陶磁器・かわらけ・煙管・銅鏡ほか・硯・砥石
第 4 図版	主体部土坑礫出土状況、礫積詰め方状況、主体部土坑完掘状況	第 9 図版	土坑墓・遺構外出土古銭
第 5 図版	経石 10・14・34・93・130 出土状況、皇宗通宝出土状況（盛土内部）	第 10 図版	土坑墓・遺構外出土経石、包含層出土遺物

### ※遺物の表現について

- (1) 経石
  - a 剥離痕のある経石の一部を掲載し、縮小率 1/3 とし、剥離痕の部位によって分類し、配列した。
  - b 礫の自然面はドットで示した。
- (2) 土器・陶磁器
  - a 弥生・続縄文土器は縮小率 1/2 とした。
  - b 陶磁器は縮小率 1/3 とし、薄い染付け部分は、網目（スクリーントーン）で表現した。
- (3) 銅製品
  - a 縮小率を 1/2 とし器種ごとにまとめて配列した。
- (4) 挿図中の記号番号は、遺物の出土地点及び出土層位を表している。

(例) G 6 - A 2 0 III a 層      (例) 1 号墓 A 層      →      1 号墓 A 層より出土

↓            ↓            ↓  
 ※ 1   ※ 2            ※ 3

※ 1 大グリッド……遺跡の全体を 50 m メッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東に A・B・C……のアルファベット、北から南には 1・2・3……のアラビア数字を付し、A 6、C 12 など、両方の組み合わせでグリッド名を表した。

※ 2 小グリッド……大グリッドの中をさらに 2 m メッシュで区切り、北西隅を起点として西から東に A～Y のアルファベット、北から南に 1～25 のアラビア数字を付し、グリッド名は両方の組み合わせで表した。

※ 3 遺物の出土層位を示す。

### ※遺構の表現について

各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は一点鎖線で表し、掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

# I. 遺跡の環境

## 1. 地理的環境

**遺跡の位置** 宿田南遺跡は、盛岡市の中心部より北西へ約 3km の盛岡市北夕顔瀬町地内に位置する。現況は宅地で周辺部よりも一段高くなっており、比高差は約 2～3 m である。遺跡の範囲は東西約 150 m、南北約 150 m と推定され、標高は 132～133 m である。

**遺跡の地形** 盛岡市北西部から滝沢村に広がる滝沢台地の南東部は、北上川に沿って南へ舌状に張り出しており、諸葛川、木賊川、巢子川などで開析され、幾筋もの埋没谷が入りこんでいる。宿田南遺跡が立地する段丘は本来、滝沢台地南縁の一部であったものが河道によって侵食され、残丘になったものと考えられる。遺跡西側は 4～5 m と最も比高差があるが、これは雫石川あるいは諸葛川の旧河道が入りこんでいるためである。本遺跡の西側 500 m に位置する、天昌寺の南側も 2～3 m の段丘崖になっており、慶応年間の古絵図を見ると旧河道の形がはっきりとわかる（巻頭図版 2）。江戸期以前は、川に面した周囲を見渡せる小高い段丘だったと考えられる。



第 1 図 宿田南経塚と周辺の遺跡

## 2. 歴史的環境

**周辺の遺跡** 滝沢台地南縁部には宿田遺跡のほかにも多数の遺跡が立地する。台地南縁部では西から大館堤遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大館町遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大新町遺跡（縄文時代草創期～後期・古代）、小屋塚遺跡（縄文時代早期～後期・古代）、前九年 I 遺跡（縄文時代早期～中期・古代）、館坂遺跡（縄文時代草創期～早期）、安倍館遺跡（縄文時代草創期～中期・続縄文・中世）など幅広い時代にわたって遺跡が存続している。滝沢台地南側の一段低い沖積段丘面においては、稲荷町遺跡（古代末～中世・近世）、里館遺跡（中世）など洪積段丘上の遺跡よりも比較的新しい時代の遺跡が立地する。各遺跡は埋没谷や旧河道により画されている。

## 3. これまでの調査

**過去の調査** 昭和 61 年度から 17 年度までに 8 次にわたる調査が実施されている。これまでに確認された主な遺構は溝跡 5 条などでいずれも時期は不明である。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市北夕顔瀬町 8-36	個人住宅建築	33㎡	86.10.27 86.11.01	時期不明溝跡 1、柱穴 20
試掘 2	盛岡市北夕顔瀬町 29-18	個人住宅建築	26㎡	90.11.06	遺構・遺物なし
3	盛岡市北夕顔瀬町 37-2 ほか	個人住宅建築	142㎡	94.08.22 94.08.25	時期不明溝跡 2、柱穴 6
試掘 4	盛岡市北夕顔瀬町 37-2 ほか	アパート建築	113㎡	95.03.27	遺構・遺物なし
試掘 5	盛岡市北夕顔瀬町 29-1	アパート建築	38㎡	95.11.16	遺構・遺物なし
試掘 6	盛岡市北夕顔瀬町 41-1 ほか	アパート建築	64㎡	95.12.27	遺構・遺物なし
7	盛岡市北夕顔瀬町 26-20	個人住宅建築	63㎡	98.05.12 98.05.20	時期不明溝跡 2
試掘 8	盛岡市北夕顔瀬町 38	個人駐車場建築	4 ㎡	05.12.05	土坑 1
9	盛岡市北夕顔瀬町 38	個人駐車場建築	126㎡	06.04.17 06.06.21 07.04.16 07.08.02	経塚 1、近世土坑墓 27、時期不明溝跡 1 経石（多字一石経、一字一石経） かわらけ、寛永通宝、煙管、手鏡 続縄文土器

第 1 表 宿田南遺跡調査成果一覧



第2図 宿田南遺跡全体図

## Ⅱ. 調査成果

### 1. 検出された遺構と遺物

**第9次調査** 第9次調査区は遺跡西端に位置し、第3次調査区の西側に隣接している。調査期間は平成18年4月16日～6月21日と平成19年4月17日～8月2日で、調査面積は126㎡である。

2ヵ年にわたる調査の結果、礫石経塚1基、近世土坑墓27基、近世以前の溝跡1条、弥生～古墳時代の遺物包含層を検出した。

**礫石経塚** 経塚からは約38,000点の経石が出土している。そのうち判読および墨痕の認められる経石は186点である。経石の種類は、経文が両面に隙間なく書写された多字一石経と、片面と両面あるいは三面書写の梵字である。

**土坑墓** 土坑墓からは陶磁器・かわらけ・煙管・鏡・寛永通宝などの副葬品のほかに、漢字一文字を書写した一字一石経が出土している。

**遺物包含層** 経塚盛土直下より、弥生～古墳時代の遺物を含む黒色土層を確認した。

#### (1). 経塚

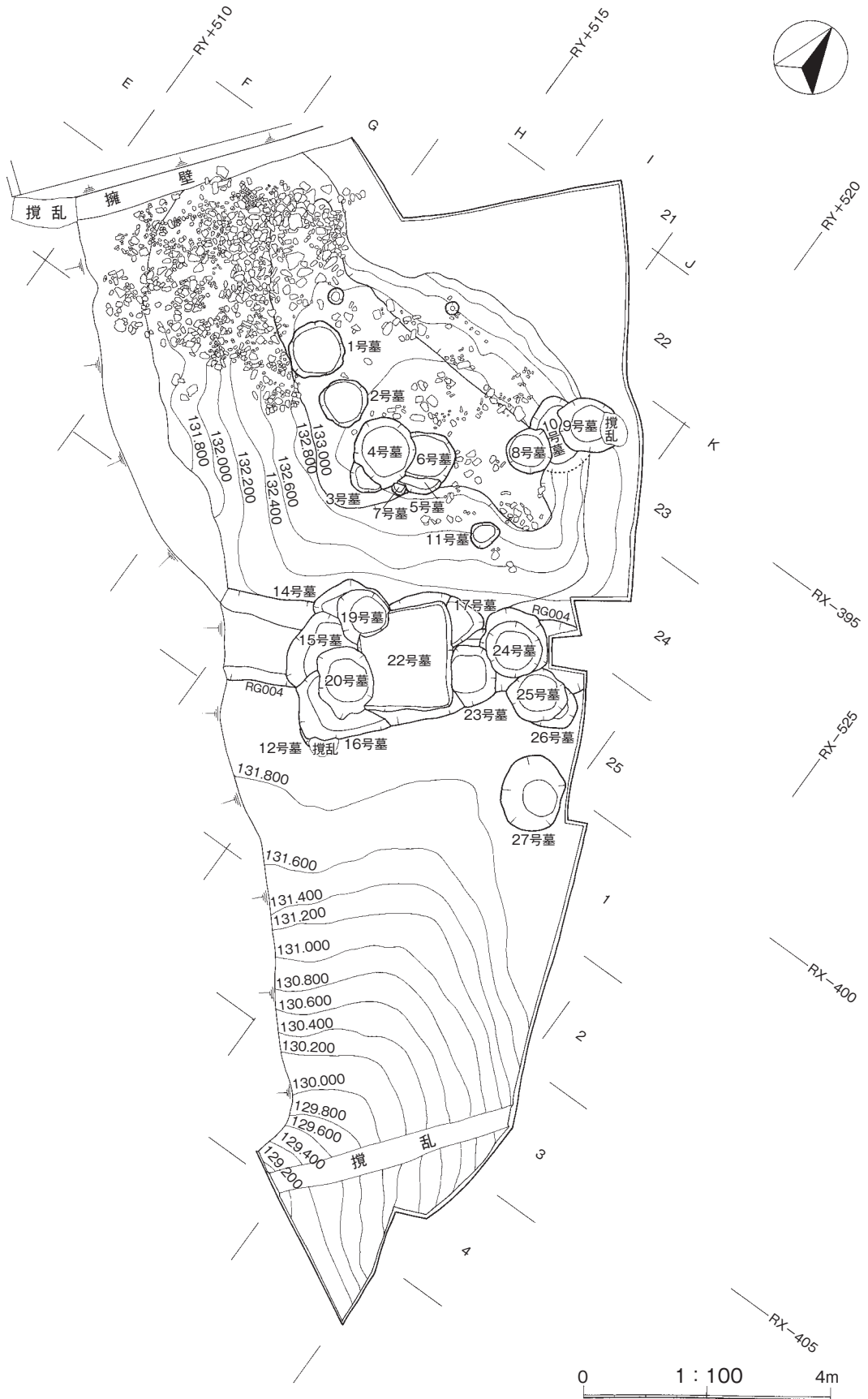
経塚は、盛土によるマウンドと経石を納めた主体部土坑の二つから構成されている。主体部土坑が経塚の中心と捉えると、現況の形は北～南西側の盛土および土坑の一部が削平されており、原形は留めていないと考えられる。また、マウンド上には近世墓が掘り込まれている。

**規模** 現況の平面形は、不整三角形を呈し、主体部土坑は北西側の頂点部分に位置する。残存しているマウンドの規模は裾部分で北東―南西が6.3 m、北西―南東が7.4 mをはかる。盛土の層厚は0.40～0.45 m、暗褐色土を主体とし、混合土（黄褐色地山層）の割合によって3層に細分される。A2層、A3層上面は硬く締まっており版築されている可能性がある。盛土中の遺物は、A3層上面から出土した皇宗通宝1点のみである（第68図70、第5図版）。

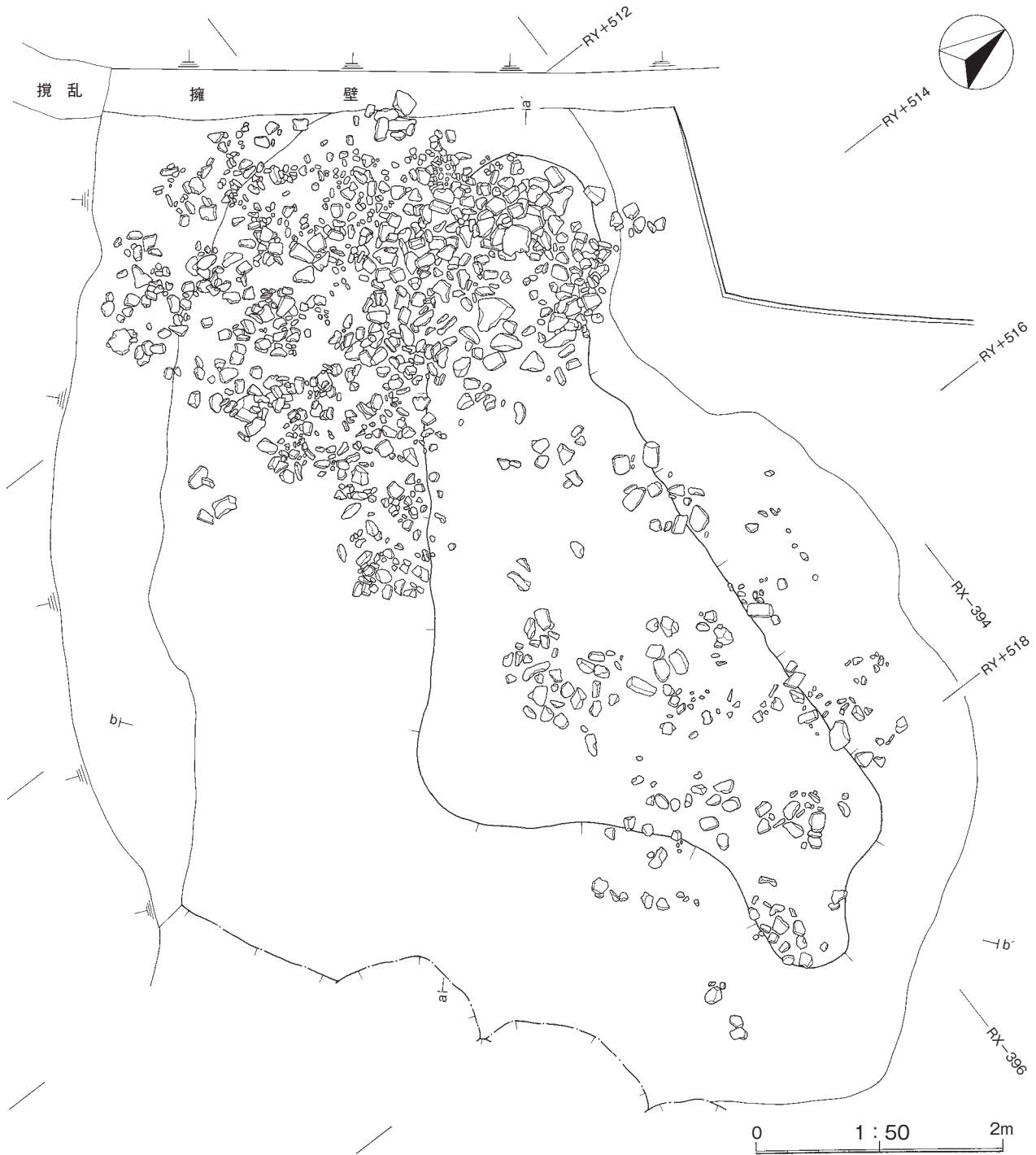
**主体部土坑** 主体部土坑は北西側から東側にかけて、宅地および道路の切り土により削平されている。盛土によりマウンドを築いた後に、土坑を掘り込んでいる。規模は南北3.32 m、東西2.60 m以上、深さ0.9～1.0 mの方形を呈していると考えられる。土坑内部はほとんど経石によって占められているが、礫の隙間には埋経後に雨水等により流れ込んだと考えられるしまりのない黒褐色土（A層）が堆積している。底面には黄褐色土を含むしまりのある黒褐色土層が薄く堆積している（B層）。これは、土坑を掘り込む際にこぼれ落ちた旧表土が、作業中に踏み固められたものとする。底面の東および南側には周溝が巡らされている。所謂、堅穴住居跡等の周溝と異なり、深さ3～5 cm程度と極めて浅いが、判読できる経石が出土していることから、意図的に掘り込まれたものと考えられる。

土坑底面中央には深さ0.10～0.15 m、幅0.6～0.8 mをはかる段差が掘り込まれている。西側が削平されているため原形は明らかでないが、溝状であったと考えられる。埋土は土坑底面と同じB層が堆積している。



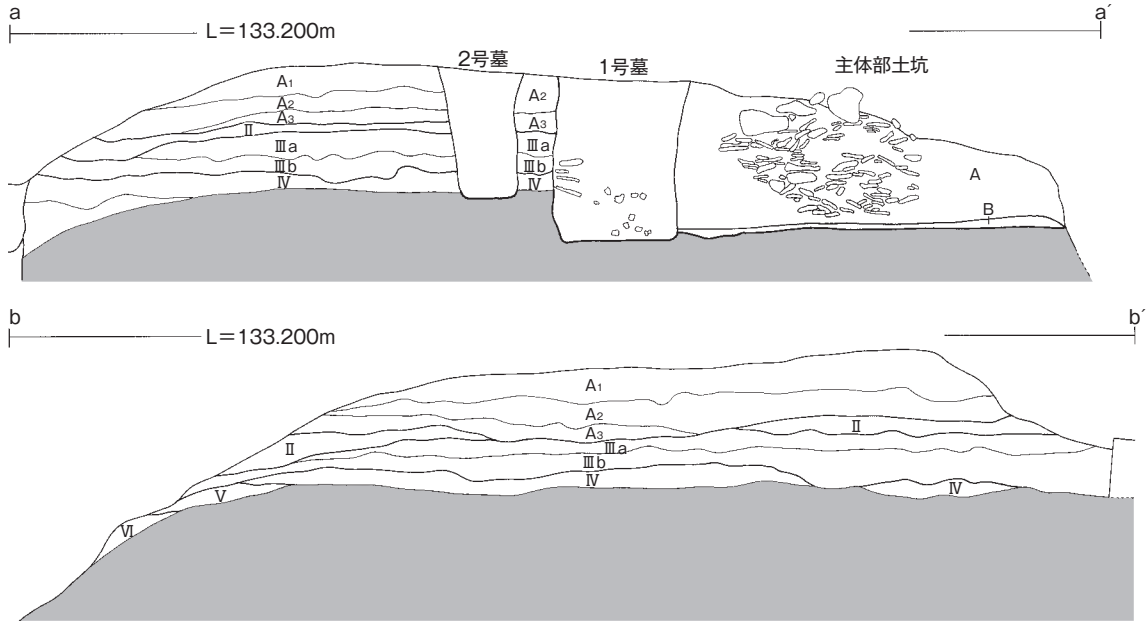


第3図 第9次調査区全体図

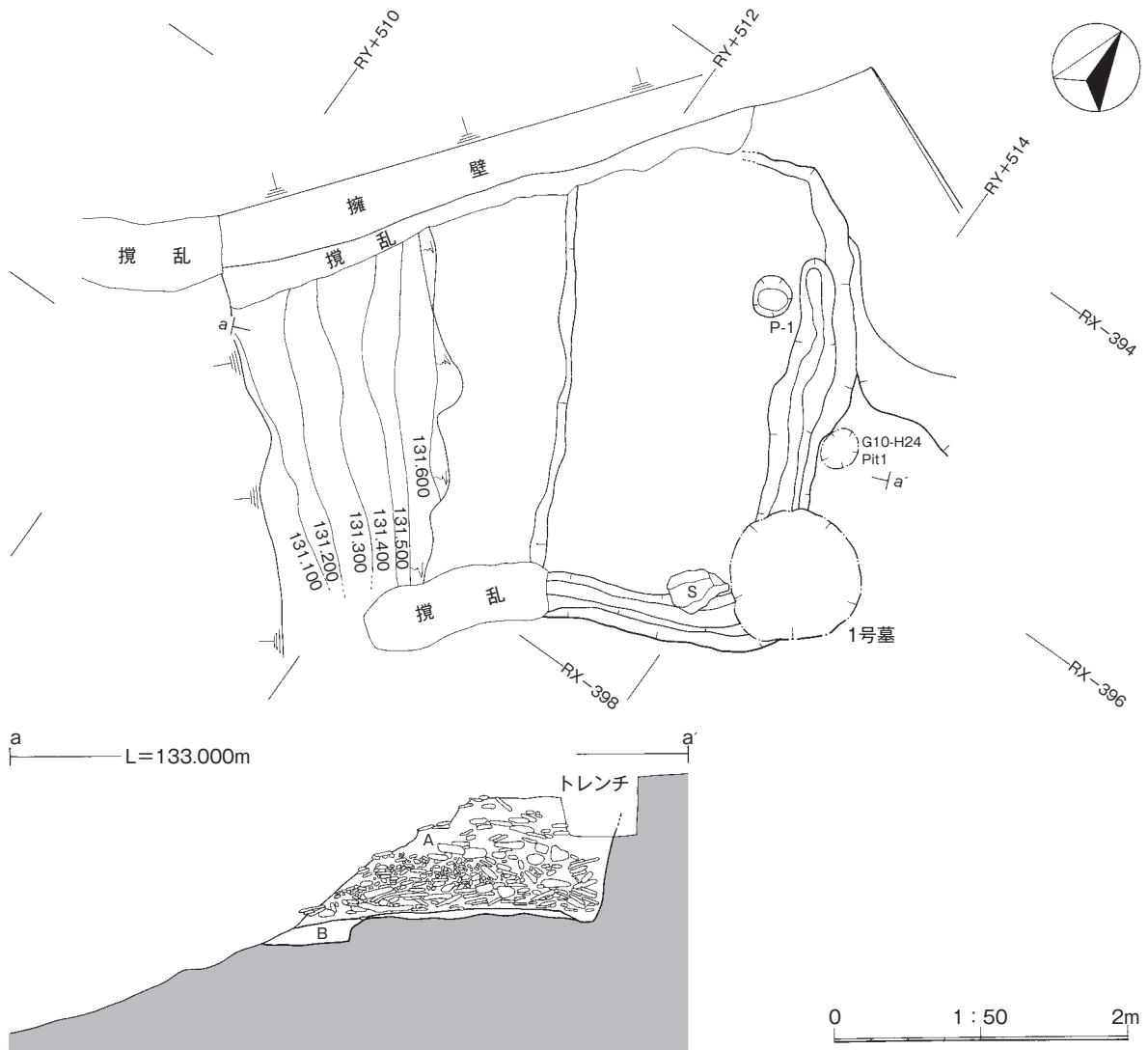


第4図 経塚平面図

**礫の詰め方** 経石は規則性を持って埋納されている。床面付近 ( $L = -1.1 \sim -0.9$  m) は扁平な礫を敷き詰め、隙間に小礫を充填している。中間層 ( $L = -0.9 \sim -0.6$  m) は、小礫をマウンド状に積み上げ、その周りに扁平な礫を詰めている。最上層 ( $L = -0.6 \sim -0.3$  m) は扁平な礫を詰めている。壁際の礫は壁に沿って縦置きされているものもあるが、多くの礫は底面に対して水平に置かれている。扁平な礫が、東隣の礫に若干重なるように置かれていることから、経石は土坑の東側から順次並べられたと考えられる。



第5図 経塚断面図



第6図 経塚主体部土坑

## (2). 経石

土坑内部より出土した経石の総数は38,252点を数える。その中で文字が判読できる、または、墨書痕が認められる経石は186点である(第2表)。経石を取り上げる際には、土坑の壁の向きに合わせて、2mグリッドを1×1mに四分割にした任意グリッド(A①～D④)を設定し、基準点を設けた(第7図)。経石は1点ずつ両面の墨痕を確認しながら取り上げた。その際、墨痕の確認できた経石は、出土位置が分かるように基準点からのXY座標および基準標高値(L=133.000m)からの深さを記入した。現場段階で見落として洗浄時に墨痕が確認できた経石は任意グリッドと深さのみを記入した。墨痕のある経石は出土したグリッド毎に番号を付けた。取上げ時の座標と標高値を基に、経典および梵字の種類が判明した経石の空間分布図を作成した(第8図)。

経石は大きく分けると、経典が書写されたもの、梵字(種子)が書写されたもの、梵字(金剛界五仏)が書写された3種類に分類される。そのうち、経典または梵字の種類が判明した105点を図示した(第9～56図)。挿図は以下の要領で作成した。

**挿図作成要領** 文字は肉眼および赤外線写真を活用し、判読した。図に掲載した写真はすべて赤外線撮影によるものである。経典の特定にあたっては、大蔵経テキストデータベース研究会製作の「大正新脩大蔵経テキストデータベース」を活用した。

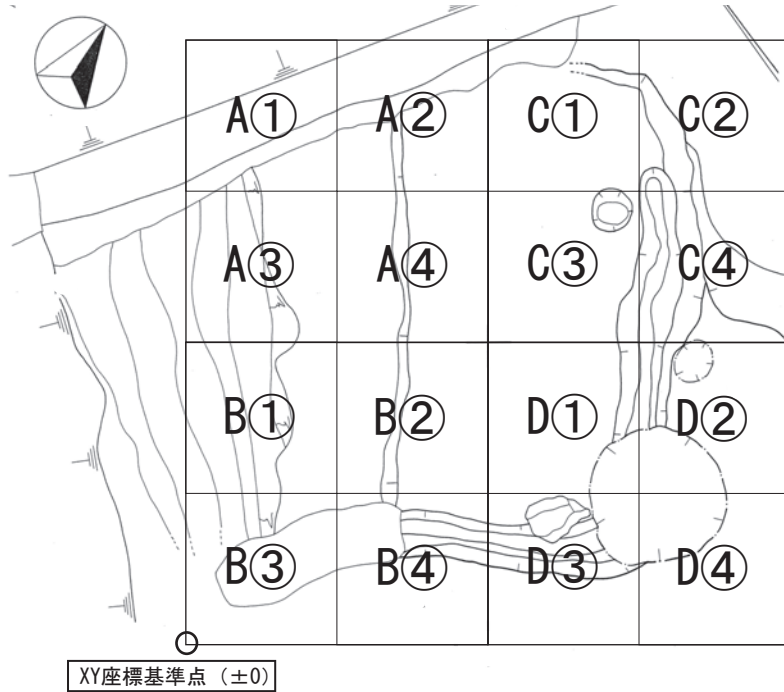
経石は基本的に原寸で掲載し、特に大きいものだけに縮小率を記した。釈文は判読できた字のみを掲載し、判読できないが字数がわかる部分は「□□□」で示し、字数が推定できない部分については、□で示した。文字の推定できる部分は、□で囲った。経典に掲載されているが、経石文中では欠落している脱字は○で囲い、逆に経典に掲載されていないが、経石文中にある衍字は( )で示した。経石は妙法蓮華経、金剛般若波羅蜜経(以後、金剛経と呼称)、梵字(種子)、梵字(金剛界五仏)の順に掲載した。

**経石の分布** 主体部土坑の半分以上が削平されているため、経石の分布については部分的な報告とならざるを得ないが、礫の並べ方と同様に書写内容によって置く場所に一定の規則性が見られるようである。

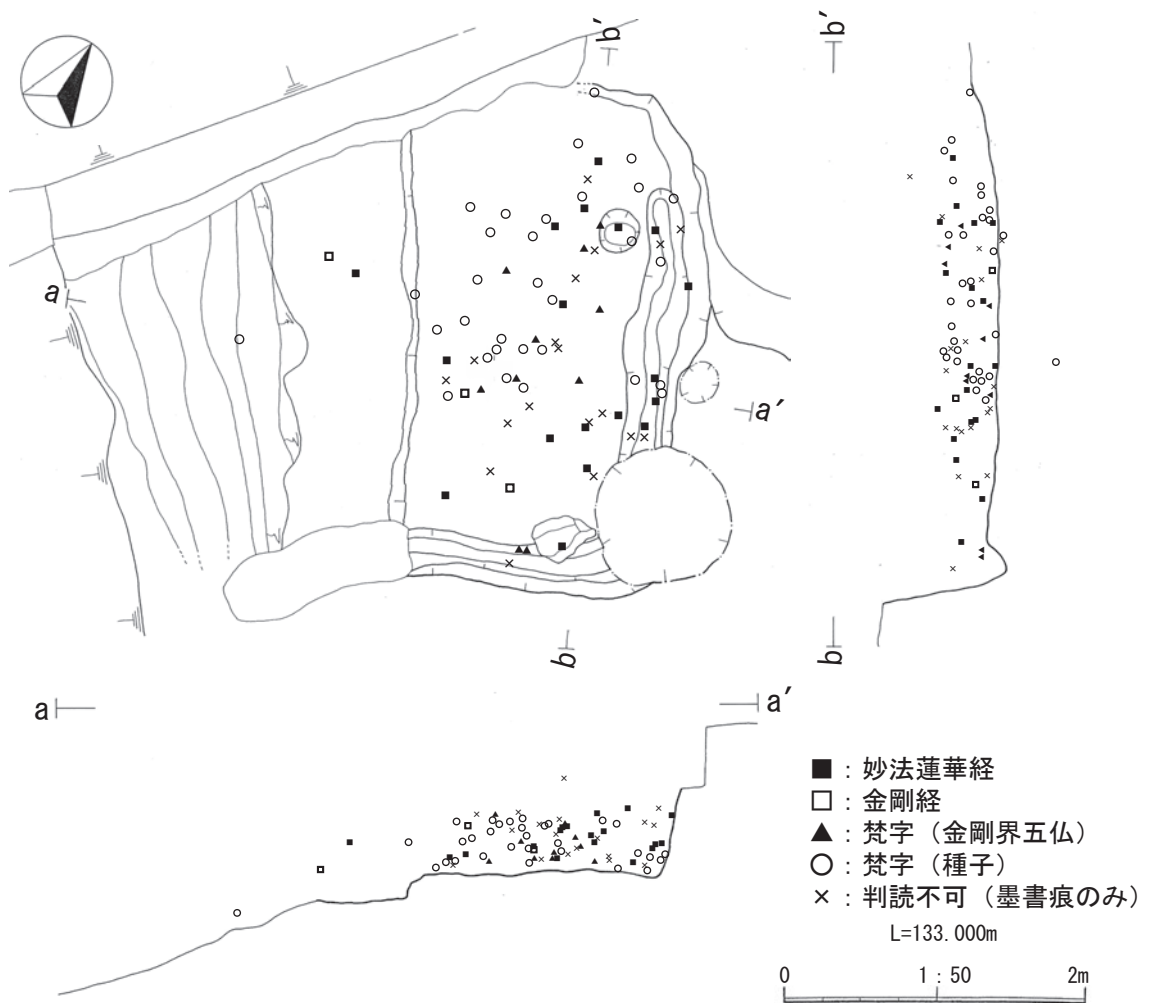
判読できた経石の大半は中間層(L=-0.9～0.6m)以下から出土している。最上層(L=-0.6～0.3m)からも出土しているが、ほとんどは墨痕のみで判読できる経石は少ない。これは最上層に経典を書写した経石を納めなかったわけではなく、土坑内に浸入した雨水の影響により、経文が消失する割合が多かったものと推測する。

平面分布をみると、梵字が書写された経石は土坑中央部に比較的多く集中しており、壁面近くに分布しているものもあるが、その数は少ない。断面図においては、前述した小礫の詰め方と同様にマウンド状に近い分布を示している。

経典の書写された経石は平面・断面ともに、梵字の経石を取り囲む様に分布している。これもやはり、前述した扁平な礫の詰め方と同じ分布である。また、判読できなかった経石の大半は扁平な礫で、数行にわたって墨痕が残っている。本来は経典が書写されていたと考えられ、それを裏付けるように経典書写の経石と同様の分布をしている。

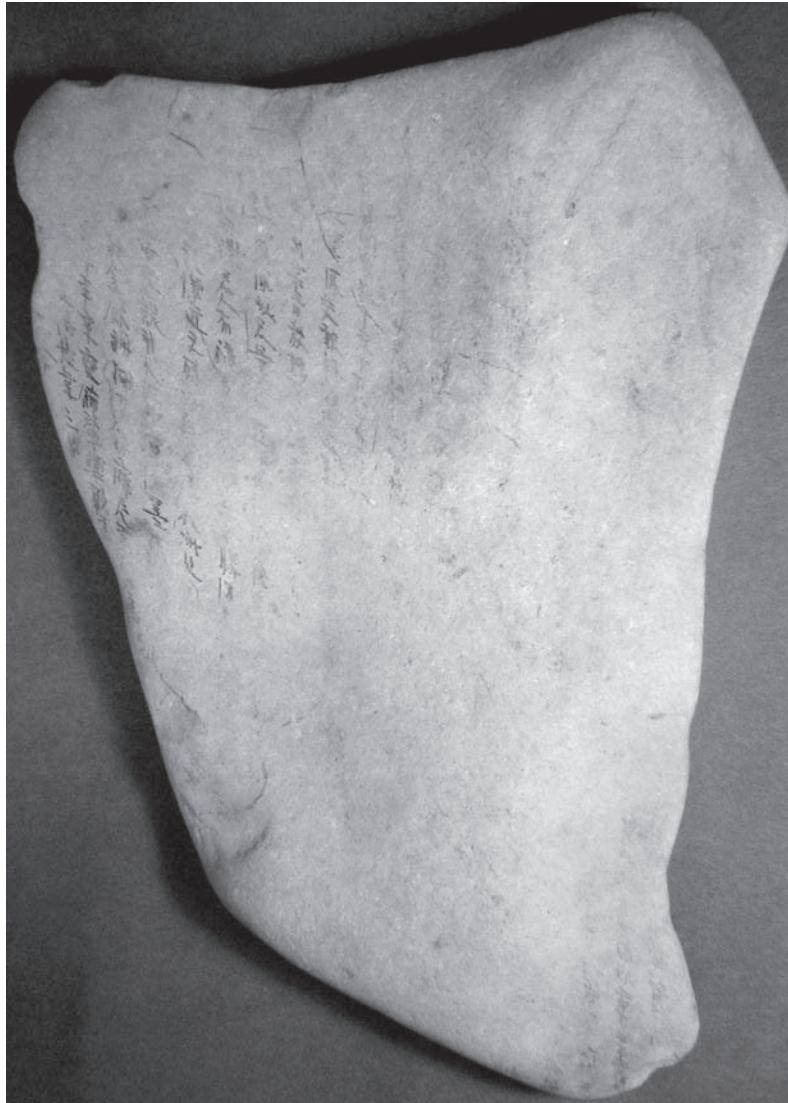


第7図 経塚主体部 グリッド配置図

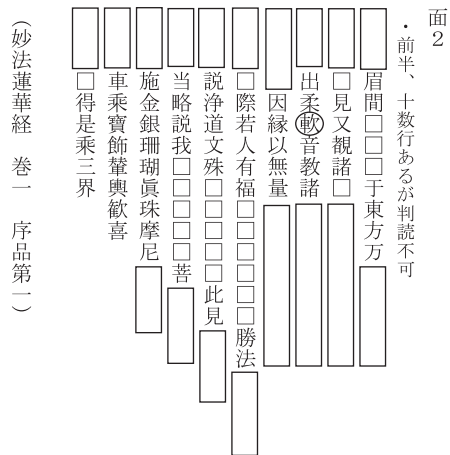


第8図 経塚主体部 経石出土状況





經石10 面2 (S=2/3)



第10図 經石10 (2)



經石41 面1

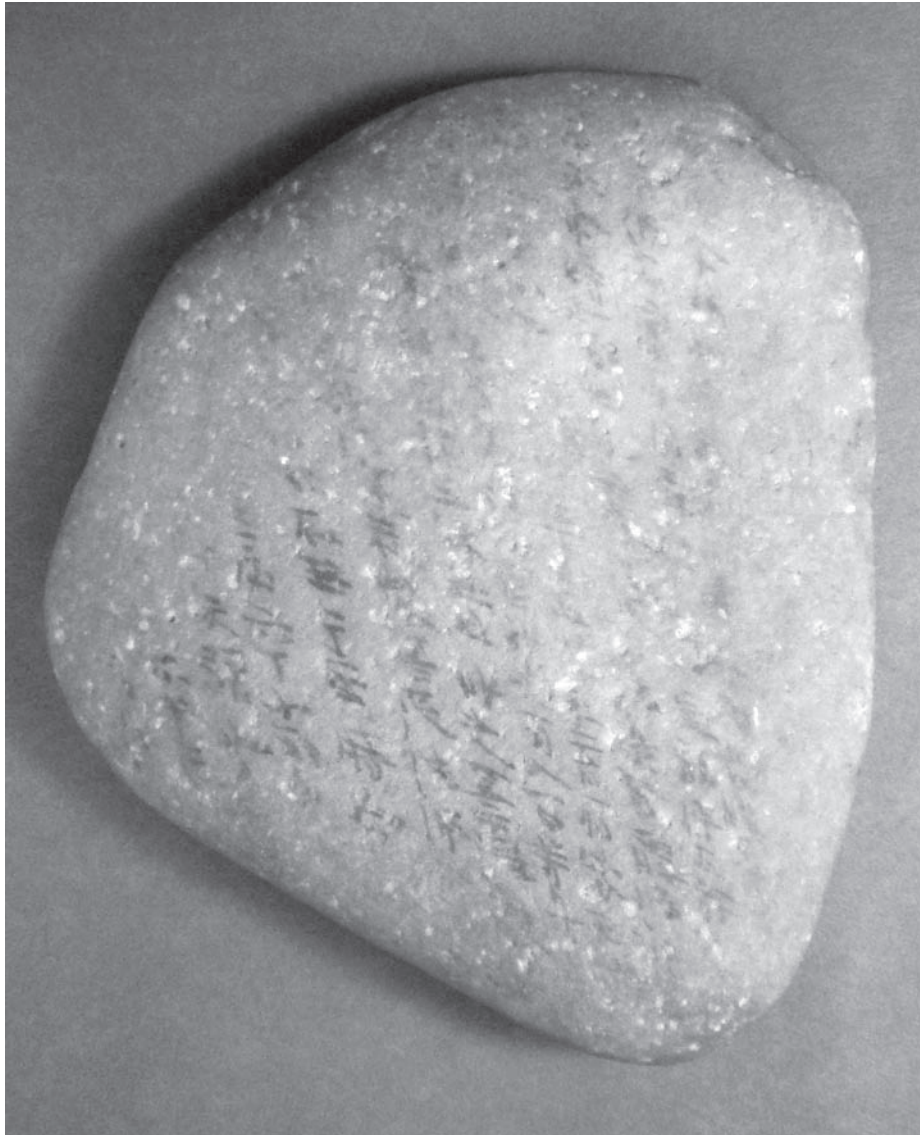
面1

或有諸比丘在於  
 行施忍辱等  
 定身心寂不動以求無  
 各於其國土說法求仙道爾時  
 其心皆歡喜各自相問是事何  
 讚妙光菩薩汝為世間眼一切所  
 汝能證知世尊既讚歎令妙光  
 起於此座所說上妙法是

(妙法蓮華經 卷一 序品第二)

第 11 図 經石 4 1





經石95 面1

面1

爾時

諸仏土弥

樂欲聽法

未曾有欲

有八百弟子

從三昧起因妙光菩薩

華教菩薩法仏

不起于座時會

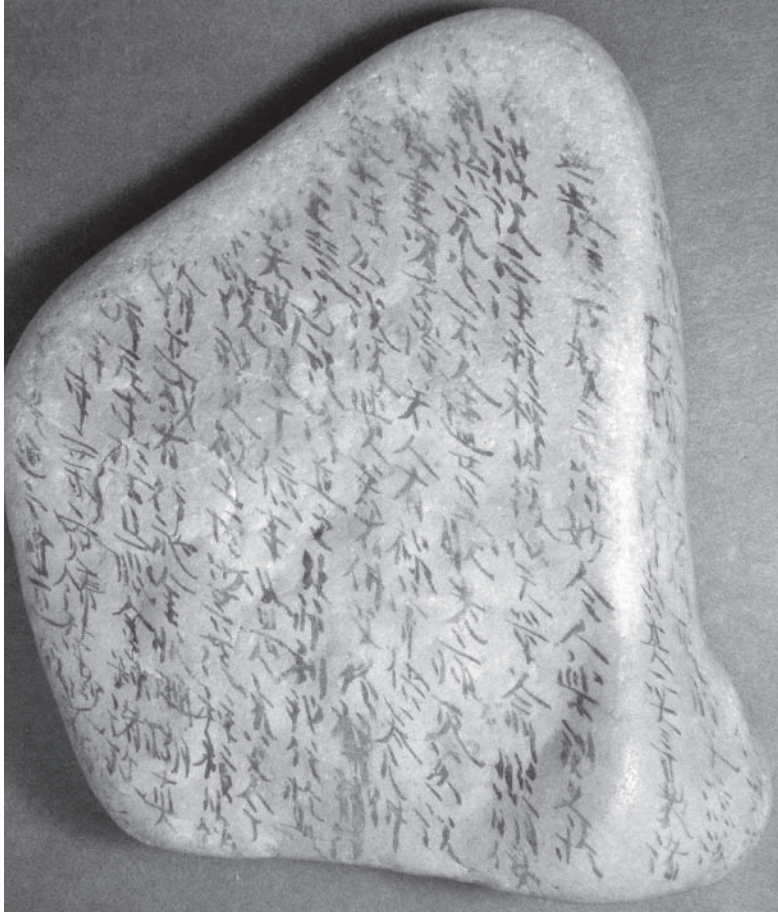
一処六十小劫

說謂如

衆中無

(妙法蓮華經 卷一 序品第二)

第12図 經石95



經石130 面2



經石130 面1

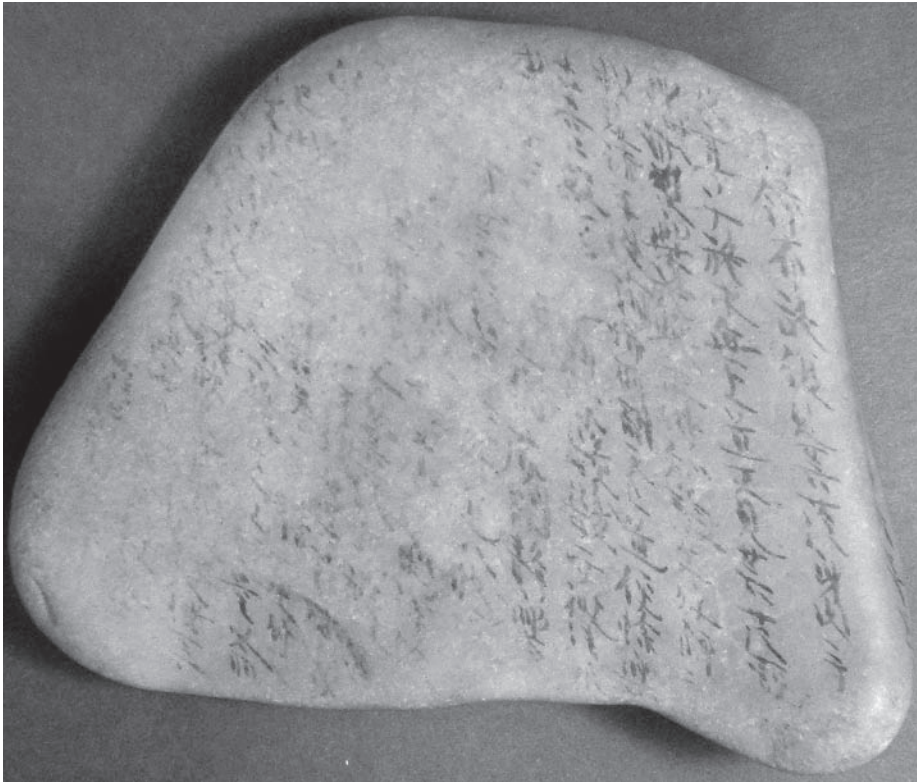
面1  
惡業緣  
受報好醜於此悉見又觀諸仏聖主師子演說  
經典微妙第一其聲清淨出柔軟音教諸

面2

菩薩無數億方梵音深妙令人樂聞各於  
世界講說正法種種因緣以無量喻照明仏  
法開悟衆生若人遭苦厭老病死為說  
涅槃盡諸苦際若人有福會供養仏  
志求勝法為說緣覺若有仏子修種種行  
求無上慧為說淨道文殊師利我住於此見  
聞若斯及千億事如是衆多今  
当略說我見彼土恆沙菩薩種種因緣  
而求仏道或有行施金銀珊瑚眞  
珠摩尼碼磧金剛諸珍  
奴婢車乘寶飾輦輿歡喜  
布施廻向仏道願得是乘

(面1・面2ともに妙法蓮華經 卷一 序品第二)

第13図 經石130 (1)



經石130 面5



經石130 面3



經石130 面4

面3  
    諸仏所

面4  
 駟馬寶車欄楯華蓋

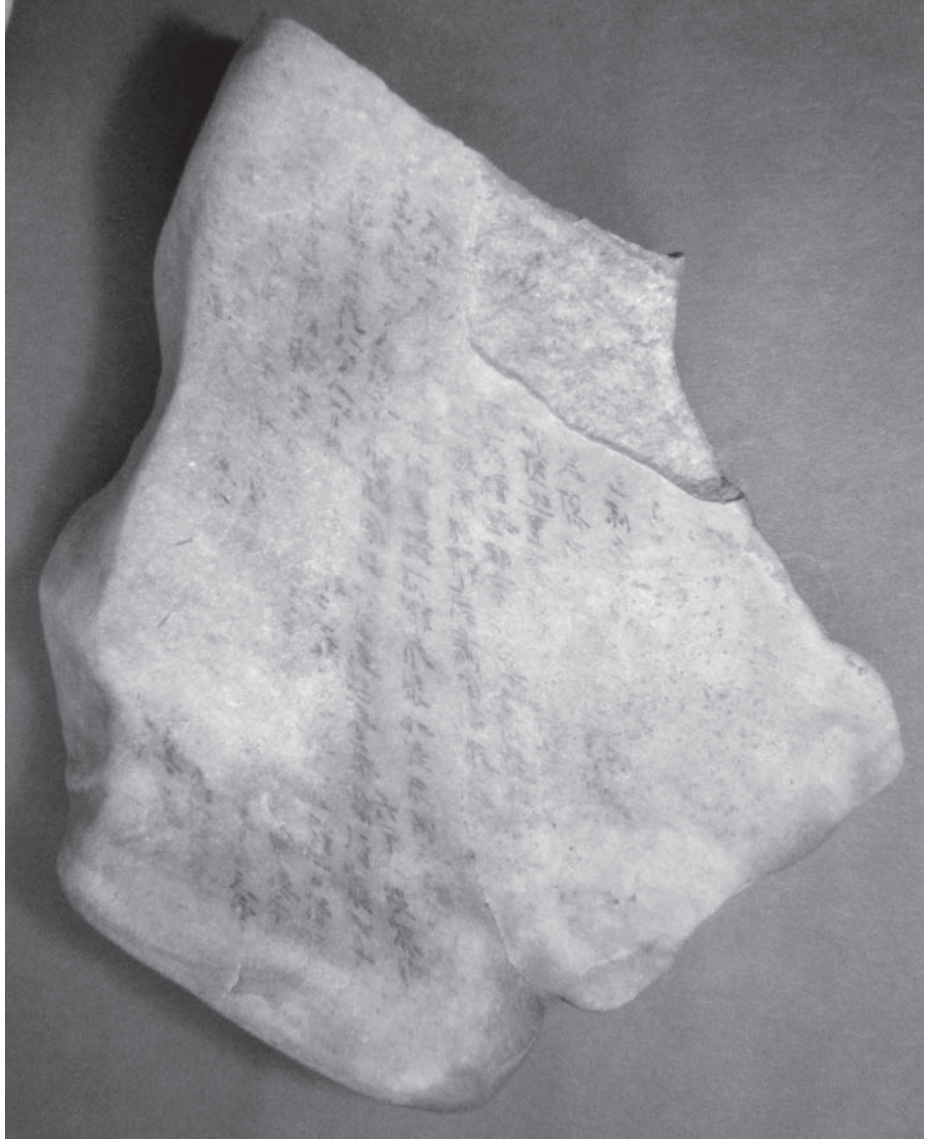
面5  
 軒飾布施復見菩薩身肉手   
 及妻子施求無上道又見菩薩頭目  
 身體欣樂施與求仏智慧文殊師利  
 我見諸王往詣仏所問無上道便捨樂  
 土宮殿臣妾剃除鬚髮而被法服  
 或見菩薩而作比丘獨処閑靜樂誦

又見菩薩安禪

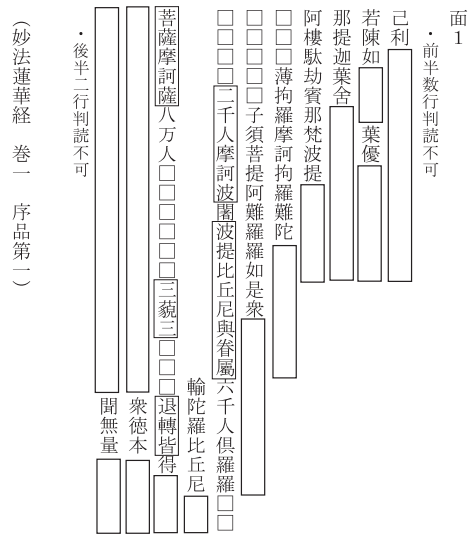
又    定慧具足以無量喻  
    講法欣     化諸菩

(面3・4・5ともに妙法蓮華經 卷一 序品第一)

第14図 經石130 (2)



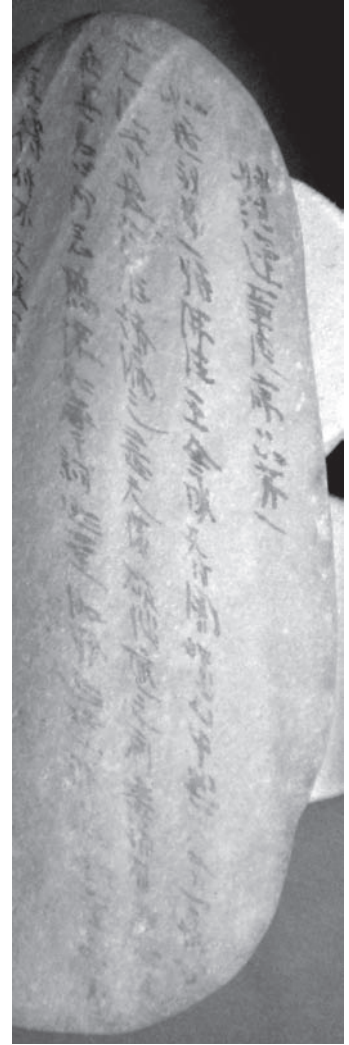
經石142 面1 (S=2/3)



第 15 圖 經石 1 4 2



經石104 面2



經石104 面1

面1  
 妙法蓮華經序品第一  
 如是我聞一時住王舍城耆闍崛山中與大比丘眾萬二  
 千人俱皆是阿羅漢諸漏已盡無復煩惱逮得已利足諸有結心得自  
 在其名曰阿若橋陳如摩訶迦葉優樓頻螺迦葉伽耶迦葉

(妙法蓮華經 卷一 序品第一)

面2  
 速得佻不文殊師利言有娑竭羅龍王女年始八歲智慧  
 利根善知衆生諸根行業得陀羅尼諸仏所說甚  
 深祕藏悉能受持深入禪定了達諸法於刹  
 那頃發菩提心得不退轉辯才  
 無礙慈念衆生猶如赤子  
 功德具足心念  
 口演微妙  
 廣大

(妙法蓮華經 卷五 提婆多達品第十二)

第16圖 經石104 (1)



經石104 面5



經石104 面3



經石104 面4

面3  
慈□□讓志意和雅

面4  
能至菩提智積菩薩

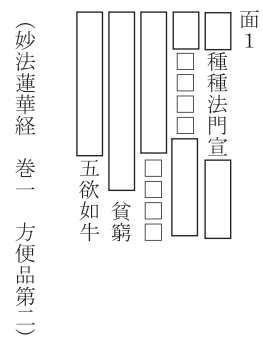
面5  
言我見釈迦如来於無量劫難行苦  
行積功累德求菩提道未曾止息觀三  
千大千世界乃至  
是菩薩捨身命□衆生故然後乃得成菩  
提道不信此女於  
時龍王女忽現於前  
以偈讚曰深

(面3・4・5ともに妙法蓮華經 卷五 提婆多達品第十二)

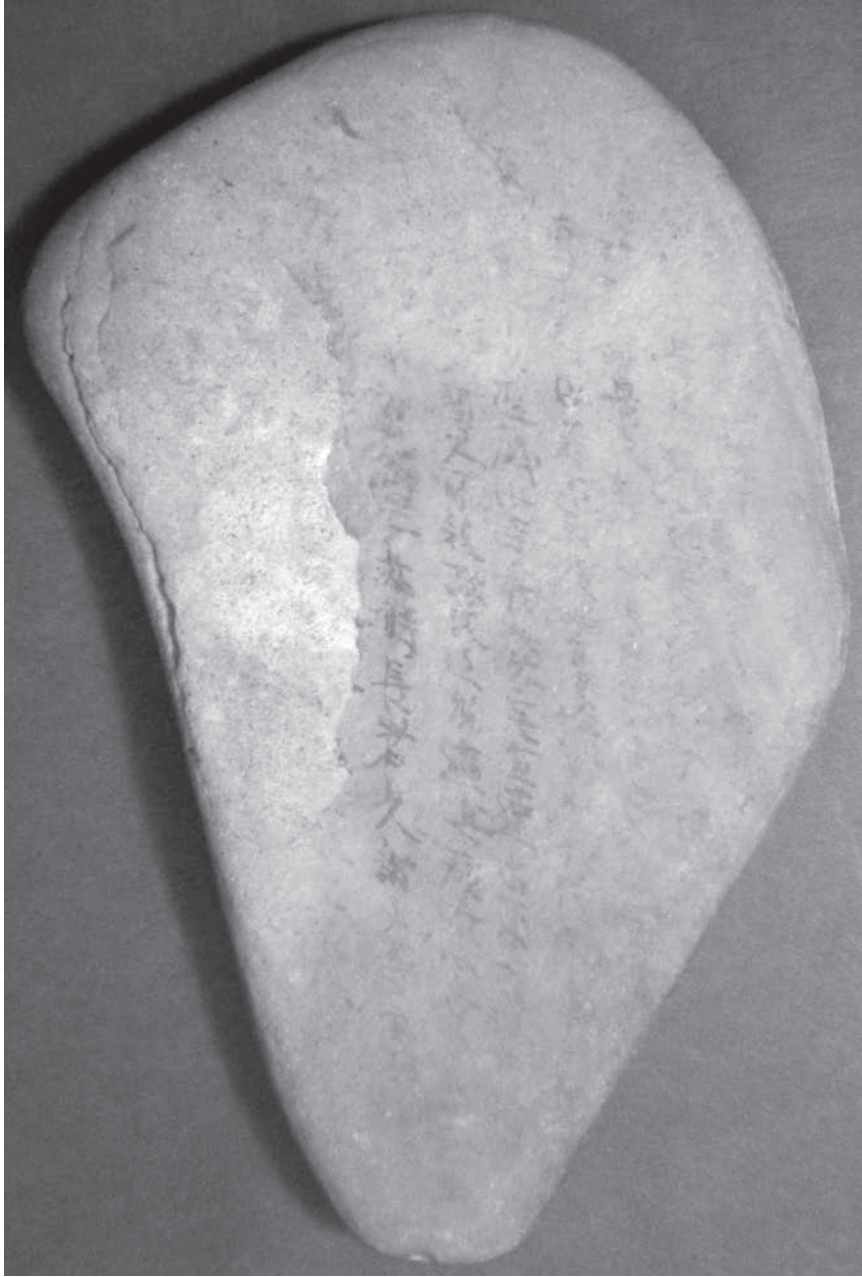
第17図 經石104 (2)



經石148 面1



第18圖 經石148



經石62 面1

面1

・前半三行あるが判読不可

汝若不取後必憂悔

遊戯汝等於此火宅宜速出来

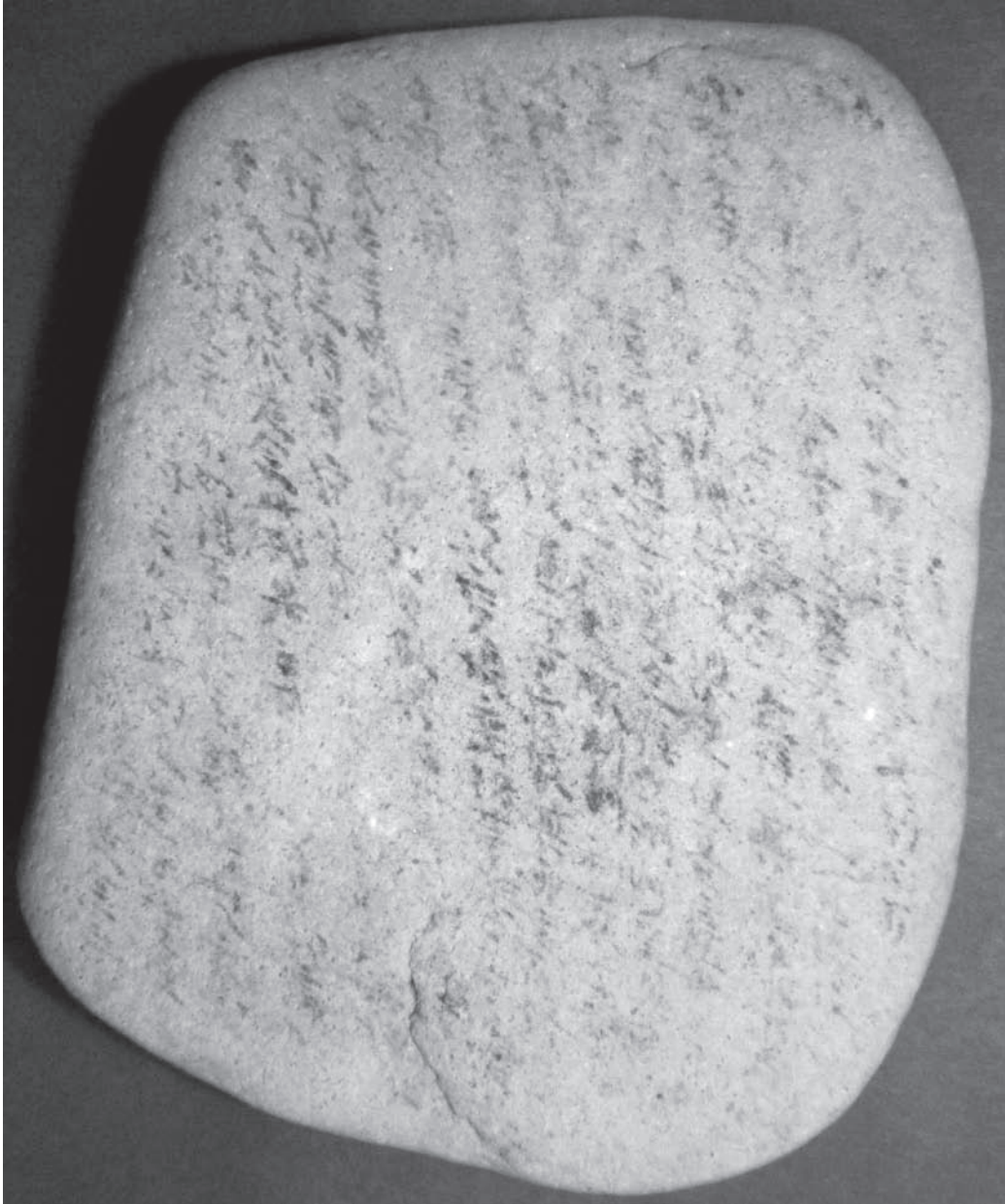
聞父所說珍玩之物適其願故心各

出火宅是時長者見諸子等安

(妙法蓮華經 卷二 譬喻品第三)

第19図 經石62



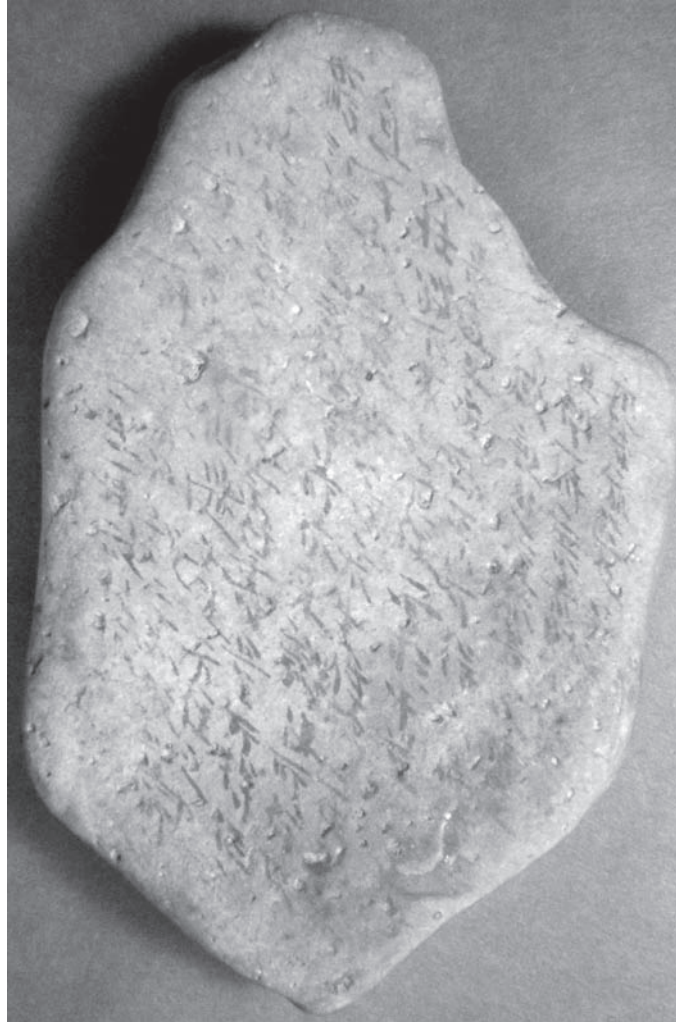


經石125 面1

面1  
 ・前半7行あるが判読不可  
 價直千万莊嚴其身  
 以寶帳垂諸華  
 衆名華羅列寶物出  
 飾威德特尊窮子見父  
 至此竊作是念此或是王  
 之處不如往至

(妙法蓮華經 卷二 信解品第四)

第20図 經石125

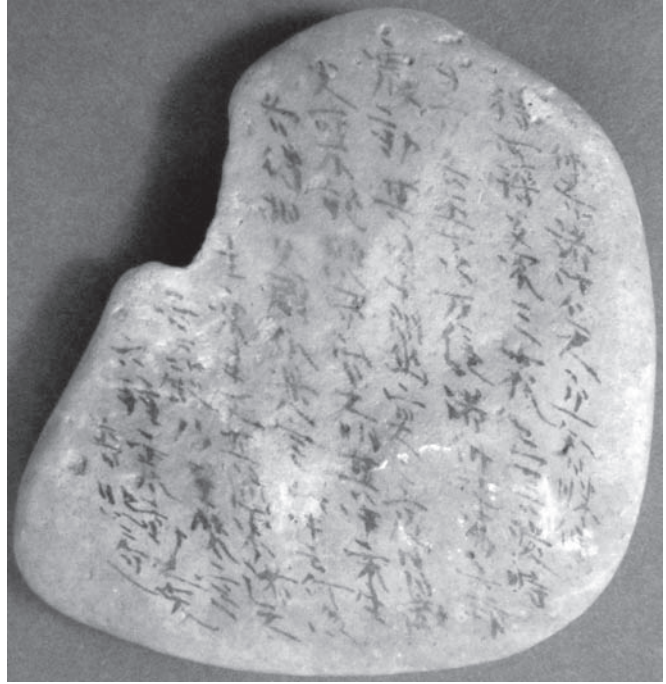


經石13 面1

面1  
 忘去心度若□□  
 但聞一仏乘者則□□□  
 □欲親近便作是念仏道  
 長遠久受勤苦乃可得成仏知是  
 心怯弱下劣以方便<sup>①</sup>而於中道為止  
 息故說二涅槃若衆生住於二地如來  
 爾時即便為說汝等所作未辦汝所住地近  
 於仏慧當觀察壽量所得涅槃  
 □□□□但是如來方便之力  
 □□一□□□說三如彼導師  
 □止息故化

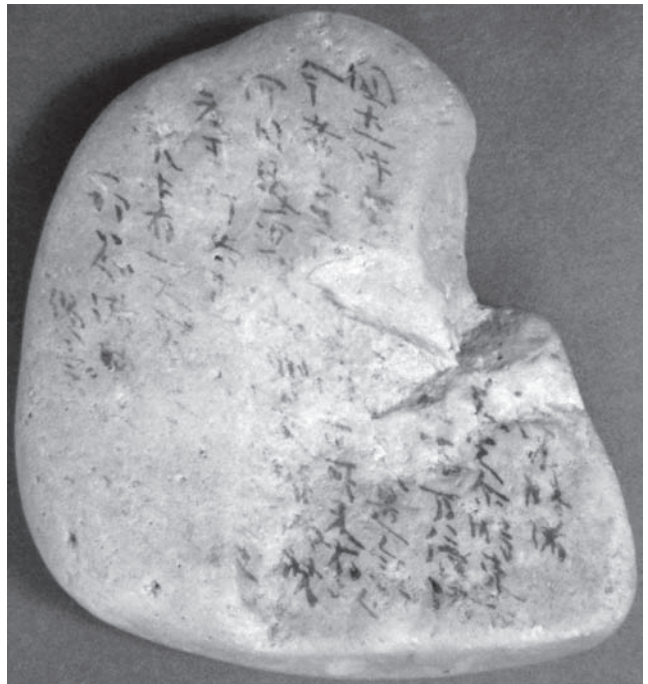
(妙法蓮華經 卷三 化城喻品第七)

第21 図 經石13



經石55 面1

面1  
 仏告諸比丘大通智勝仏  
 得阿耨多羅三藐三菩提時  
 十方各五百万億諸仏世界六種  
 震動其國中問幽冥之処日月威  
 光所不能照而皆大明其中衆生  
 各得相見咸作是言此中云何忽  
 生衆生又其国界諸天  
 宮殿乃至梵宮  
 六種震動大光  
 普照遍



經石55 面2

面2  
 □□□勝諸  
 天光爾時東  
 □□□万億諸  
 国土中梵□□□是念  
 今者宮□□□昔所未有以  
 何因緣而現□相是時諸梵  
 天王即各□□□彼  
 衆中有一大梵  
 一切為諸□□□  
 偈言

(面1・2ともに妙法蓮華經 卷三 化城喻品第七)

第22図 經石55



經石74 面1

(妙法蓮華經 卷三 化城喻品第七)  
 囉倍於  
 万億諸國土中  
 普照遍  
 勝諸  
 宮殿  
 言此中  
 照而皆  
 動其  
 面1

第23図 經石74



經石144 面1 (S=2/3)

面1

・前半二行判読不可

□無有仏三惡道□□諸天□□

□今仏出於世為衆生作眼世

於一切為衆生之父哀愍饒

慶今得值世尊爾時諸梵天王偈讚仏已各作是言

□□尊哀愍一切轉於法輪度脫衆生時諸梵

大歡喜 大聖轉法輪顯示諸法相度苦惱衆生令得

許□又諸比丘南方五百萬億國土諸大梵王各自見宮

□□照曜昔所未有歡喜踊躍生希有心即各相詣共議此事

宮殿有此□□時彼衆中有一大梵天王名曰妙法為諸

言我等諸宮殿□□囉此非無因緣是相宜求之

曾見是相為大德天在為仏出世間爾時五百万億

與宮殿俱各以衣盛諸天華共詣北方推尋是相見大通

揚菩提樹下坐師子座諸天龍王乾闥婆緊

伽人非 及見十六王子請仏

百千

彌山并以供

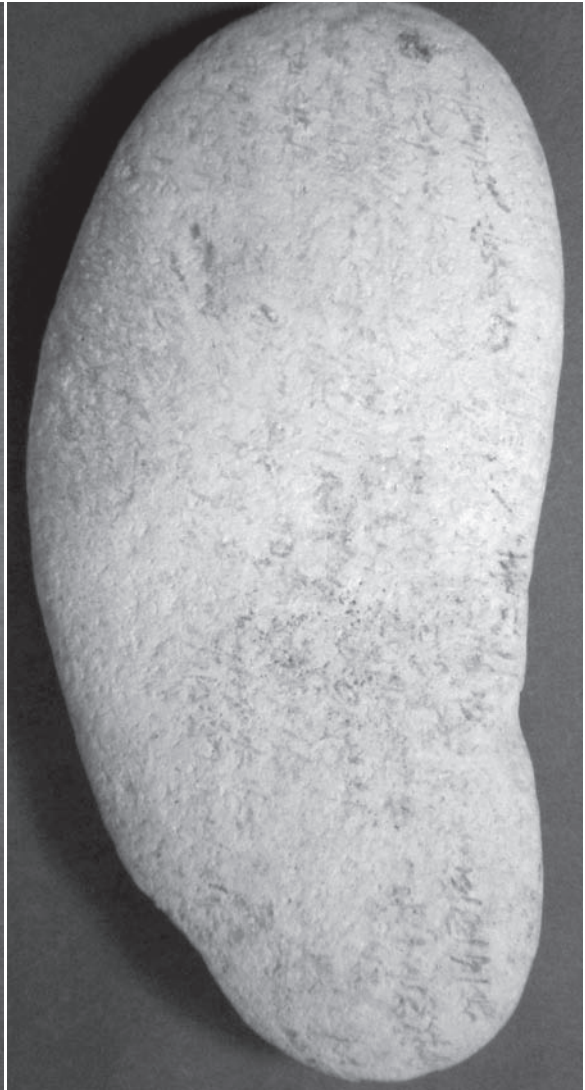
・一行判読不可

(妙法蓮華經 卷三 化城喻品第七)

第24圖 經石144



經石156 面2



經石156 面1

面2  
 二仏一名阿弥陀二名度一切  
 世間苦惱西北方二仏一名多  
 摩羅跋梅檀香神  
 (面1・2ともに妙法蓮華經 卷三 化城喻品第七)

面1  
 十六菩薩常樂  
 薩所化六百万億  
 所生與菩薩俱 值四百万億  
 諸仏世尊 十六沙弥今  
 皆得 三藐三  
 ・後半四行判読不可

第25図 經石156

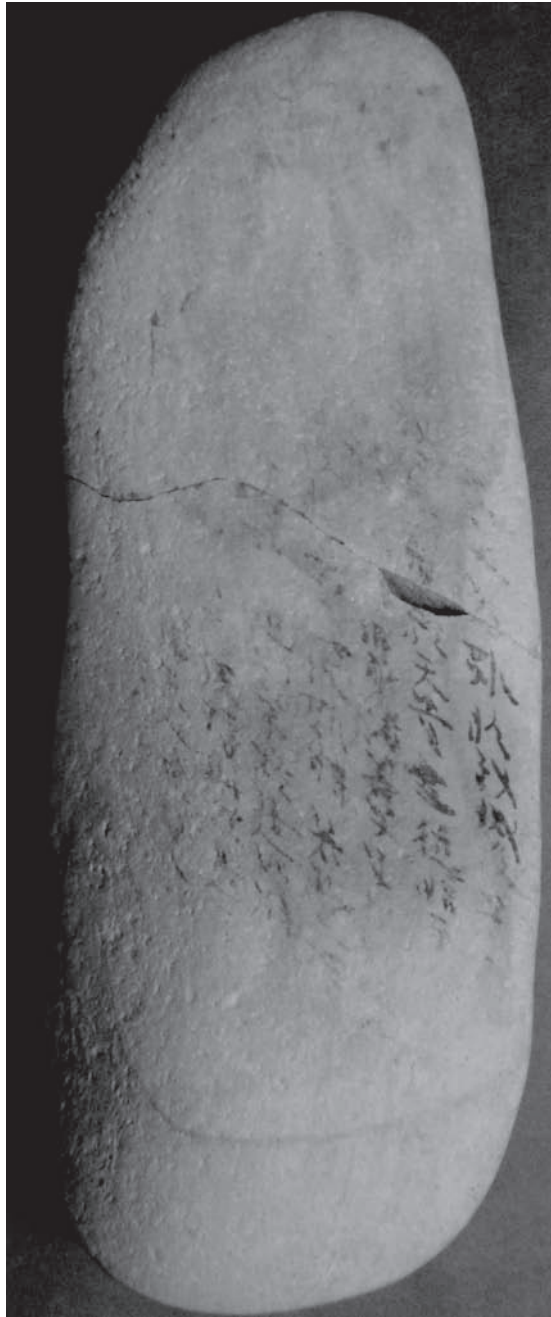


經石162 面1

面1  
 尊欲重宣此義  
 現前不得成仏道  
 諸天擊天鼓  
 成仏道  
 大通智勝仏十劫坐道場  
 養彼仏  
 過十□□已乃得  
 眷□千万億  
 ・後半數行あるが判読不可

(妙法蓮華經 卷三 化城喻品第七)

第26圖 經石162



經石111 面1

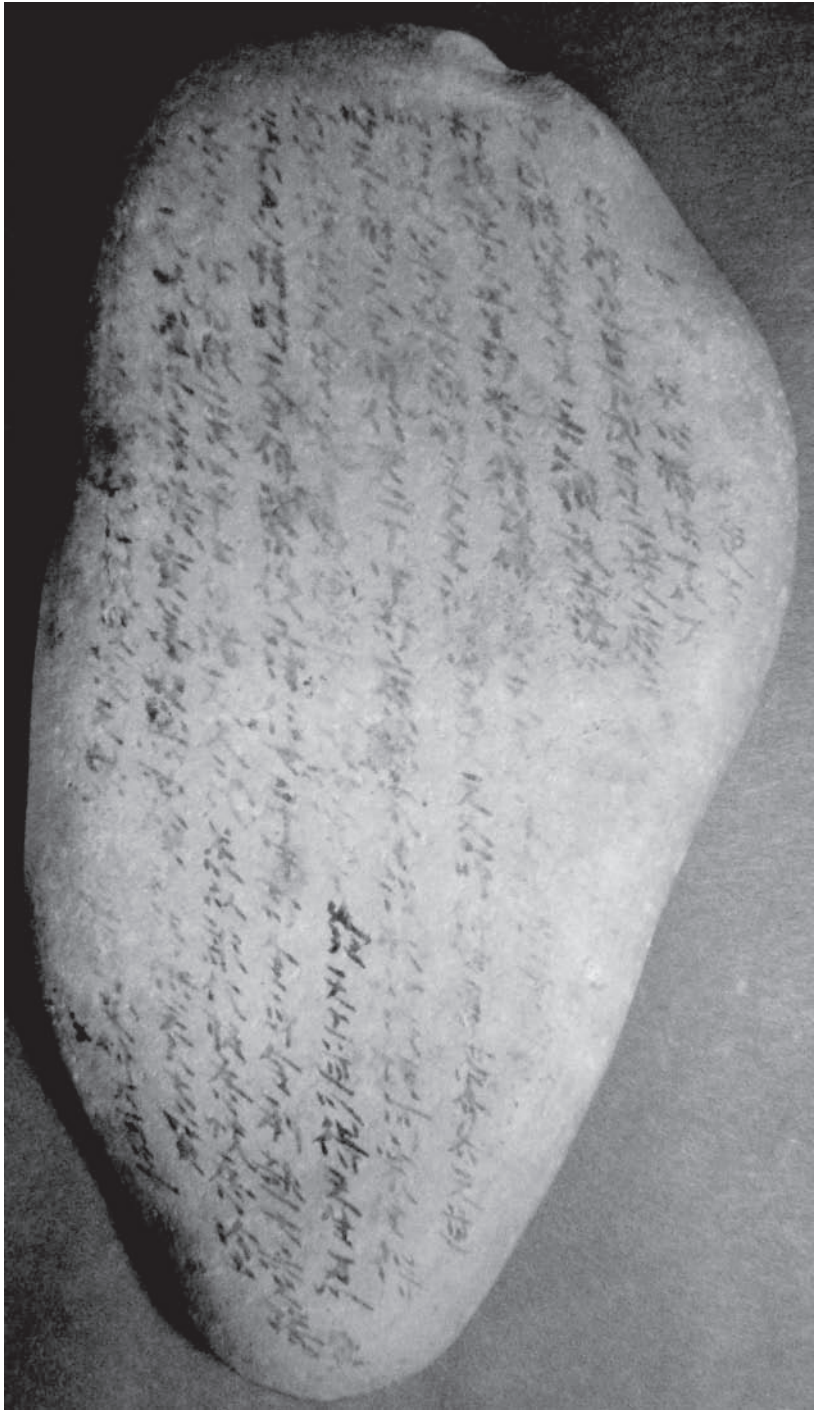
面1

為難於我滅後	於無量土從始至	此經難持若	是則勇猛是則	世讀持此經是	諸天人世間之

(妙法蓮華經 卷四 見寶塔品第十二)

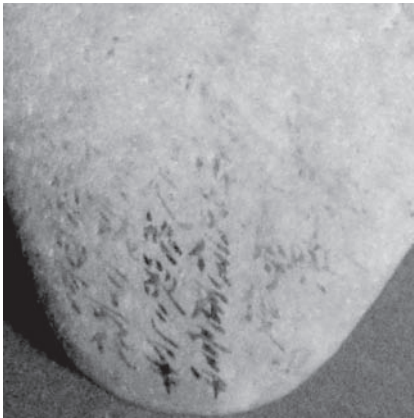
第 27 圖 經石 1 1 1





經石153 面1

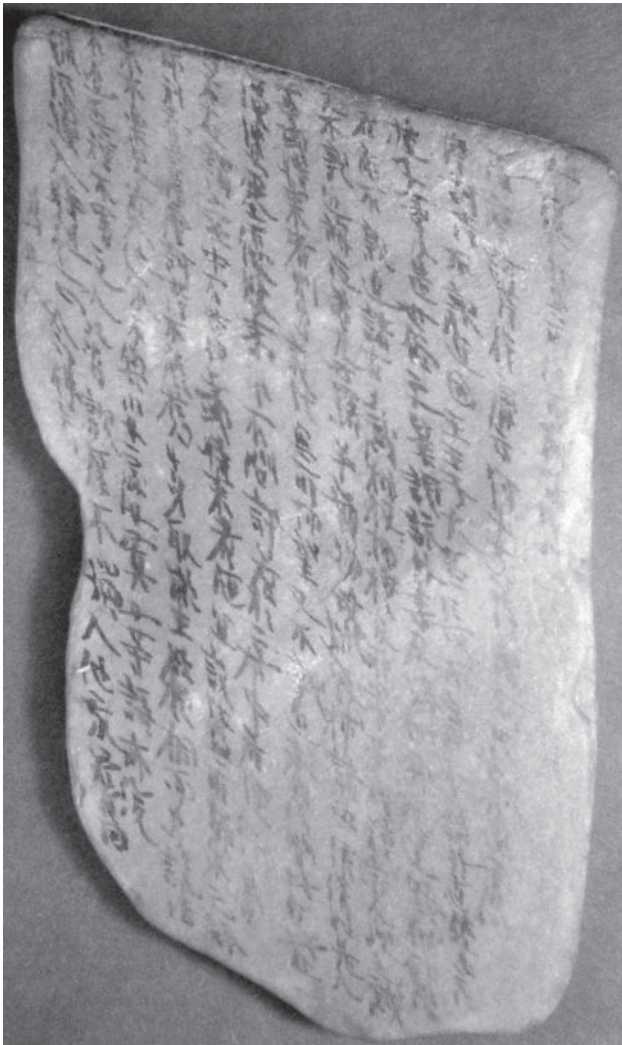
面1  
 色十力  
 四無所畏四攝法十八不  
 共神通道力成等正覺廣□□□  
 皆因提婆達多善知識故告諸四□□□□□□□□□□  
 却後過無量劫當得成仏  
 明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊世界名天道  
 時天王(時天王) 仏住世二十中劫廣為衆生說於妙法恆河沙衆生得  
 阿羅漢果無量衆生發緣覺心恆河沙衆生發無上道心得無生忍  
 至不退轉時天王仏(般)槃後正法住世二十中劫全身舍利起七寶塔  
 高六十由旬縱廣四十由旬諸天人悉以雜華末香燒香塗  
 香衣服瓔珞幢幡寶蓋伎樂歌頌禮拜供養七宝  
 妙塔無量衆生得阿羅漢果無量衆生悟辟支仏不可思



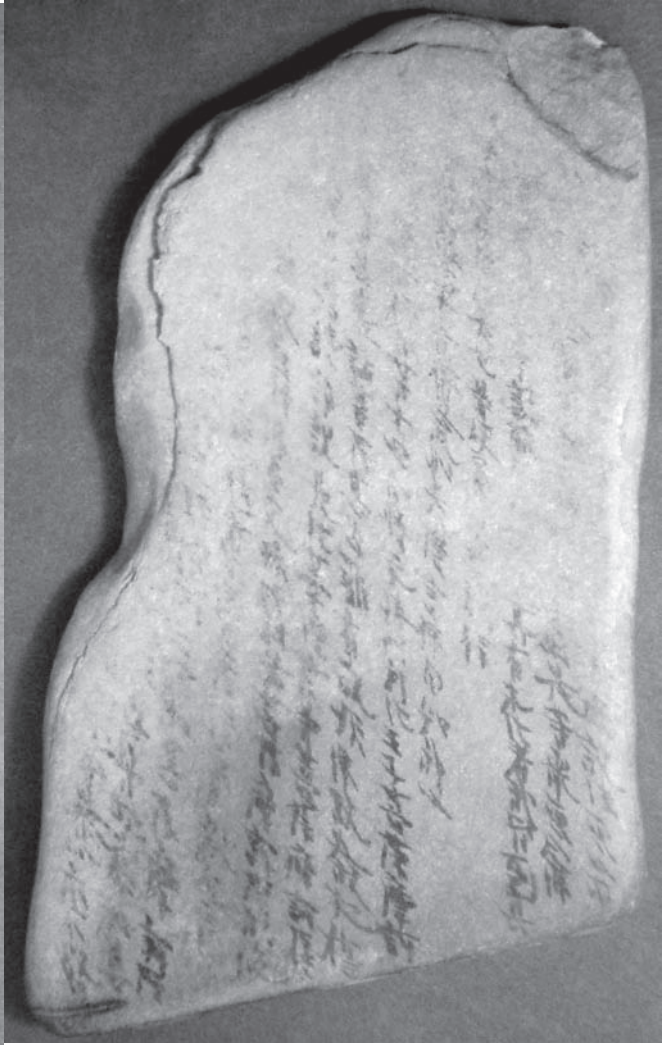
經石153 面2

面2  
 可與  
 輪俱  
 出住虛空中  
 足修敬已畢  
 龍宮所化  
 非口所宣  
 (面1・2とも妙法蓮華經 卷五 提婆達多品第十二)

第28図 經石153



經石157 面2



經石157 面1

面1

所說法惡口而  
如是等衆惡念仏  
我皆到其

是世尊使処衆無所畏我

諸衆十方仏発如誓言仏自知我心

行品第十四爾時文殊師利法王子菩薩摩訶

世尊是諸菩薩甚為難有敬順仏故発大誓

說是法華經世尊菩薩摩訶薩

仏告文殊師利若菩薩摩訶薩於後

菩薩摩訶薩

□ 忍辱地柔和善

□ 卒暴心亦不驚

(妙法蓮華經 卷五 勸持品第十三~安樂行品第十四)

面2

又復於法無所行而

薩摩訶薩行処云何名菩薩摩訶薩親近処(菩薩)

摩訶薩不親近國王王子大臣官長不親近諸外道梵志尼

捷子等及造世俗文筆讚詠外書及路伽耶陀逆路伽耶陀

者亦不親近諸有兇戲相撲及那羅等種種變現之戲

又不親近旃陀羅及畜猪羊鷄狗豕獺捕諸惡律儀如是人

等或時來者則為說法無所怖望又不親近求聲聞比丘比丘

尼優婆塞優婆夷亦不問訊若於房中若經行処

若在講堂中不共住止或時來者隨宜說法無所怖求文殊

師利又菩薩摩訶薩不応於女(身)取能生欲想相而為說法

亦不樂見若入他家不與小女処女寡女等(共)語亦復

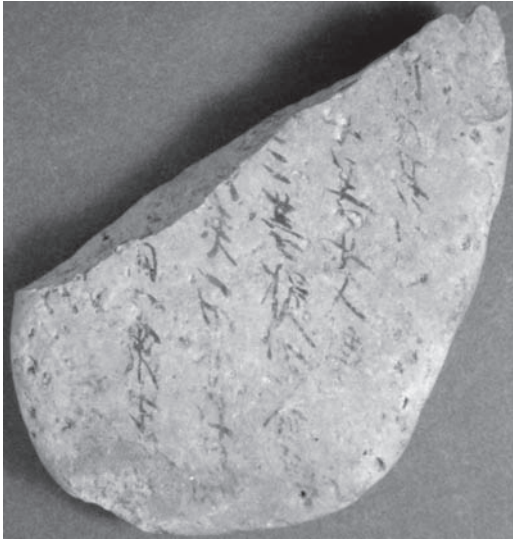
不近五種不男之人以為親厚不獨入他家若有因

緣須獨入時但一心念仏若

為女人

(妙法蓮華經 卷五 安樂行品第十四)

第29圖 經石157



經石181 面1



經石31 面1

面1

□	不及其□
□	子善女人□
□	三菩提退者□
□	義而□□□

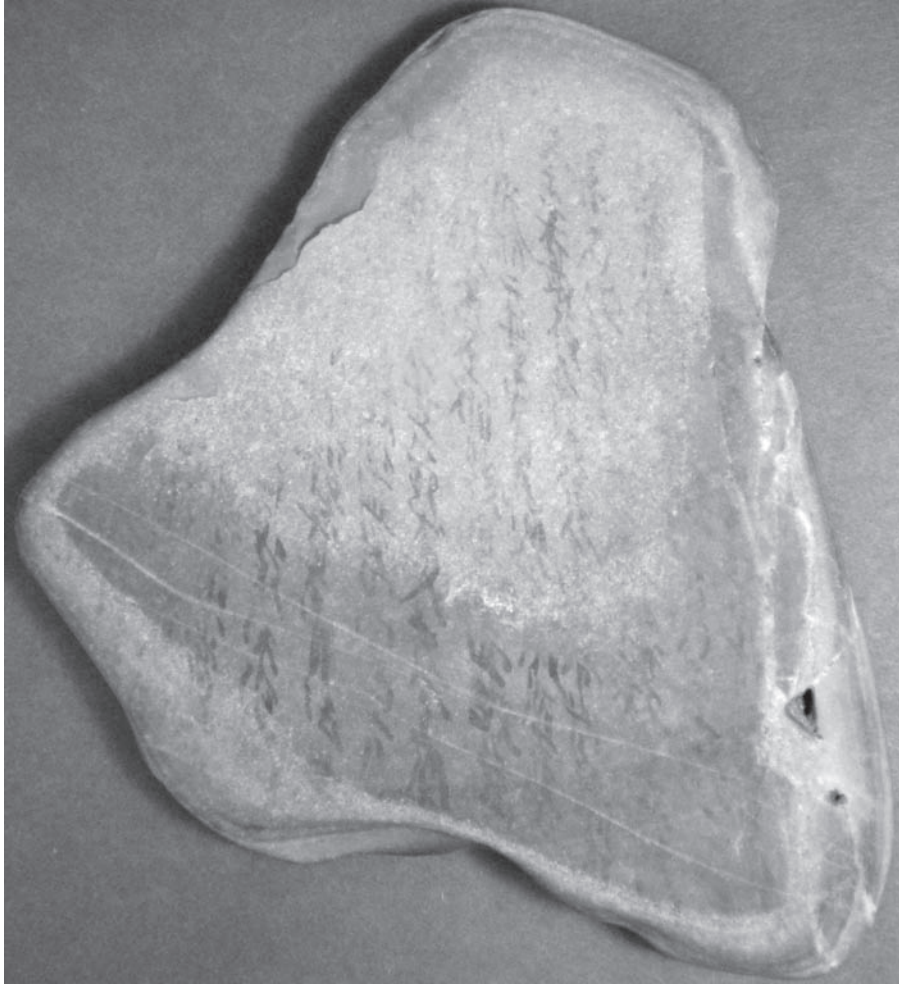
(妙法蓮華經 卷六 分別功德品第十七)

面1

□	修習何仏道
□	如是諸菩薩
□	神通大智力
□	踊出世尊
□	乃不識
□	從地出願說其因緣今此
□	是諸菩薩等
□	無量德世尊
□	唯願決衆
□	諸寶樹

(妙法蓮華經 卷五 從地涌出品第十五)

第30圖 經石31・181



經石60 面1

面1

・前半三行判読不可

至于

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

分別之如有

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

□□□

面黻齒

其死不久我今忘

□□□得於道果即為方

□□□涅槃真実法□□

□□□如水沫泡□

□□□忘当

(妙法蓮華經 卷六 隨喜功德品第十八)

第31図 經石60

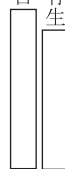


經石97 面1

面  
1

・前半行判読不可

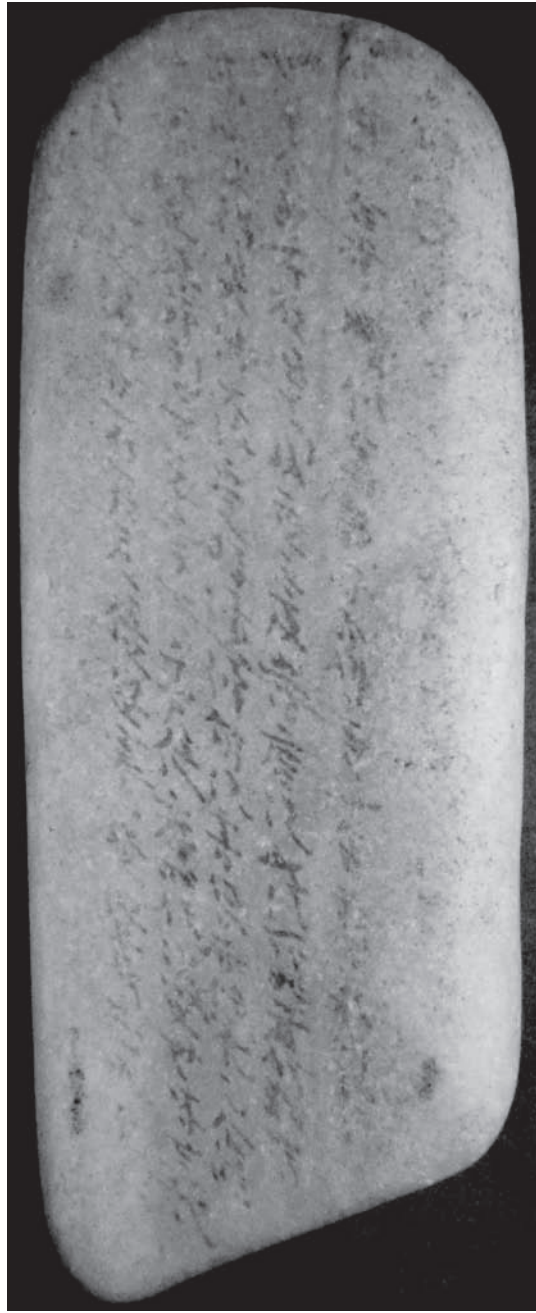
四衆之中有生  
從何所來自



・後半數行判読不可

(妙法蓮華經 卷七 常不輕菩薩品第二十)

第 32 図 經石 9 7



經石43 面1

面1

・前半一行判読不可

合掌瞻仰尊顏而白仏言世尊我等於仏滅後  
世尊分身所在国土滅度之處當広説此經所以者何我等  
亦自欲得是眞淨大法受持讀誦解說書寫而供養之爾時  
世尊於文殊師利等無量百千万億舊住娑婆世界菩薩  
摩訶薩及諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷

(妙法蓮華經 卷七 如来神力品第二十二)



經石135 面1

面1  
 釈迦牟尼仏令十方来

□□□□還本土而作是言

□□□□十方無量分身諸仏坐寶樹下師子座上者

□□□□及多寶仏并上行等無辺阿僧祇菩薩大衆舍

利弗等聲聞四衆及一切世間天人阿修羅等聞仏所説皆大歡喜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三爾時宿王<sup>華</sup>善<sup>薩</sup>日<sup>白</sup>言

世尊藥王菩薩云何遊於娑婆世界世尊是藥王菩

薩有若干百千万億那由他難行苦行善哉世尊

願少解說諸天龍<sup>神</sup>夜叉乾闥婆阿修羅迦樓

羅緊那羅摩睺羅伽人非人等又他国土諸来

菩薩及此聲聞衆聞皆歡喜爾時仏告宿王<sup>華</sup>

菩薩乃往過去無量恆河沙劫有仏  
 ↑一行抜け

號日月淨明德

(妙法蓮華經 卷七 囑累品第二十二)

(妙法蓮華經 卷七 藥王菩薩本事品第二十三)

面2

・墨痕のみ。判読不可

第34図 經石135



經石108 面1

面1  
 ・前半、四行判読不可

問	問	問	問	問	問	問	問
忍不衆	志	見不善心不攝五情不世尊衆生能	不久滅度	聽法不問訊多寶			

(妙法蓮華經 卷七 妙音菩薩品第二十四)

第35圖 經石108





經石170 面1

面1  
 . 前半三行判誑不可  
 乃至夢中亦復莫惱  
 不順我呪惱亂說法者頭  
 父母罪亦如壓油殃斗  
 此法師者當獲如是殃諸羅刹女  
 尊我等亦當身自擁護受持□□  
 修行是經者令得安穩離□□□□  
 衆毒藥佞告諸羅刹  
 □□等但能擁

(妙法蓮華經 卷八 陀羅尼品第二十六)

第36圖 經石170



經石101 面1 (S=2/3)

面1

是十羅

俱詣仏所同聲白仏

法華經者除其衰

仏前而説呪曰伊提履

履

莫惱於法師

若餓鬼若那若吉遮

若羅若馱若鳥摩勒伽若阿跋摩羅若夜叉吉遮若人吉

病若一日若二日若三日若四日乃至七日若常熱病若男形

若女形若童男形若童女形乃至夢中亦復莫惱即於仏前而説偈言

若不順我呪惱亂説法者頭破作七分如阿梨樹枝如殺父母罪亦如

壓油殃斗秤欺誑人調達破僧罪犯此法師者當獲如是殃諸羅刹女

説此偈已白仏言世尊我等亦當身自擁護受持讀誦修行是

經者令

穩離諸衰患消眾毒業

羅刹女善哉善哉(善父父)汝等但

擁護受持法華名者福不可量

何況擁護具足受持供養經卷

華香瓔珞香塗香燒香

蓋伎樂燃種種燈酥燈油燈

燈蘇摩那華油燈華油

師迦華油燈優華油燈

如是等百千種供養

者臯帝汝等及

眷屬心當

・面2に続く

(妙法蓮華經 卷八 陀羅尼品第二十六)

第 37 図 經石 1 0 1



經石101 面2 (S=2/3)

面2

□□□是法師

說是陀羅尼品時六万人

□□□法忍妙法蓮華經莊嚴□□□

□□十七爾時

無量無邊不

□□□世過

・中間、十數行判誑不可

□□□者何此依於一切天人

□□□說法華經宜心□□□告子言汝父

□□□門法汝等

(妙法蓮華經 卷八 陀羅尼品第二十六)  
 (妙法蓮華經 卷八 莊嚴王本事品第二十七)

第38圖 經石101



經石159 面1

面1

受持

得其福報若有

是行終無所

無眼若

(妙法蓮華經 卷八 普賢菩薩勸發品第二十八)



經石77 面1

面1

於一切世間天

我是弟子言我今亦

可於是二子從空中下到其母所

堪任發阿耨多

三菩提

作仏事願母見聽於彼仏

所出家修道爾時二子

・後半、二行判讀不可

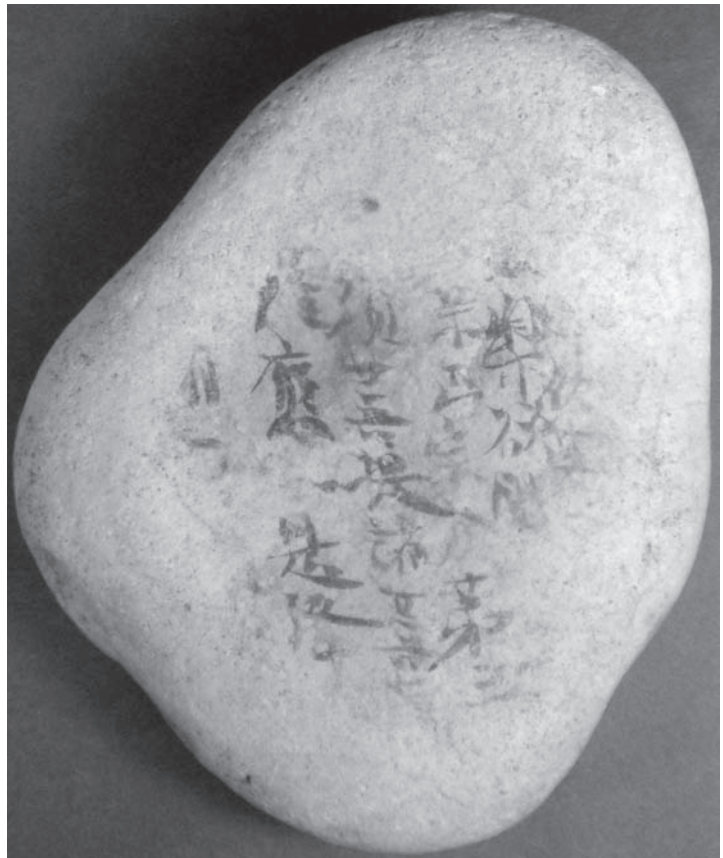
(妙法蓮華經 卷八 妙莊嚴王本事品第二十七)

第39圖 經石77・159



経石6 面1

面1  
 何降  
 善哉善哉

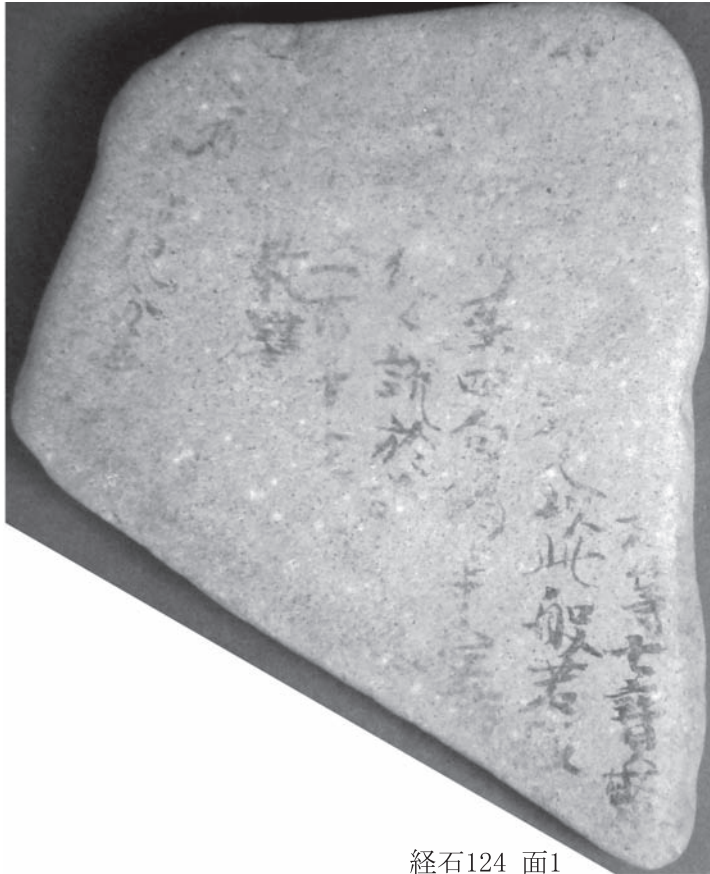


経石6 面2

面2  
 伏其  
 樂欲聞  
 乘正宗  
 第三  
 須菩提諸善  
 薩應  
 是降  
 有二  
 有

(面1・2ともに金剛經)

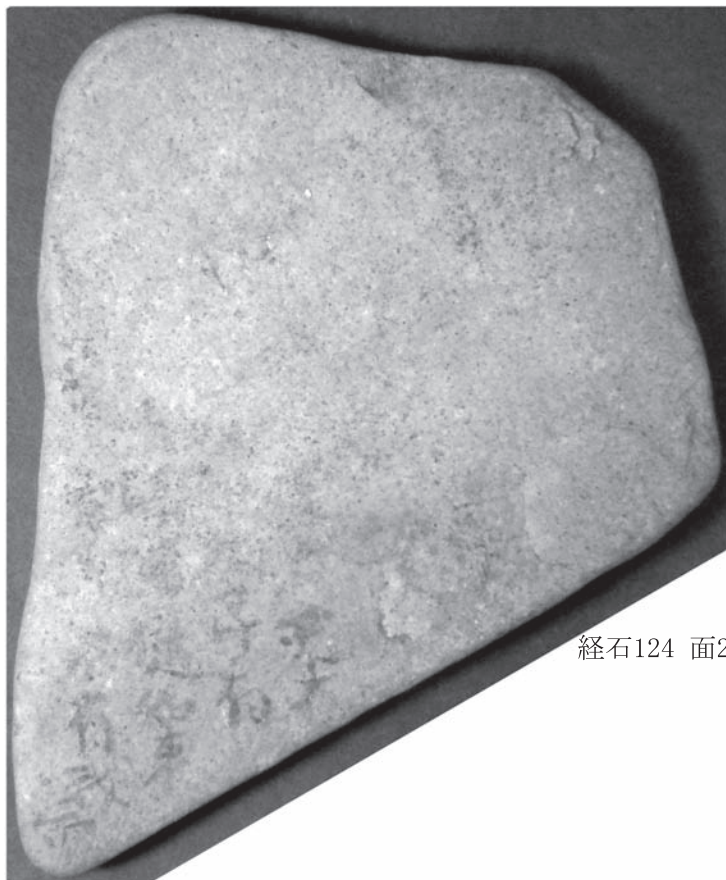
第40図 経石6



經石124 面1

面1

是等七寶聚
若人以此般若波
乃至四句偈等受持
他人說於
一百千萬
數譬
化分第



經石124 面2

面2

・前半數行判読不可

者
有
提如來
有我而

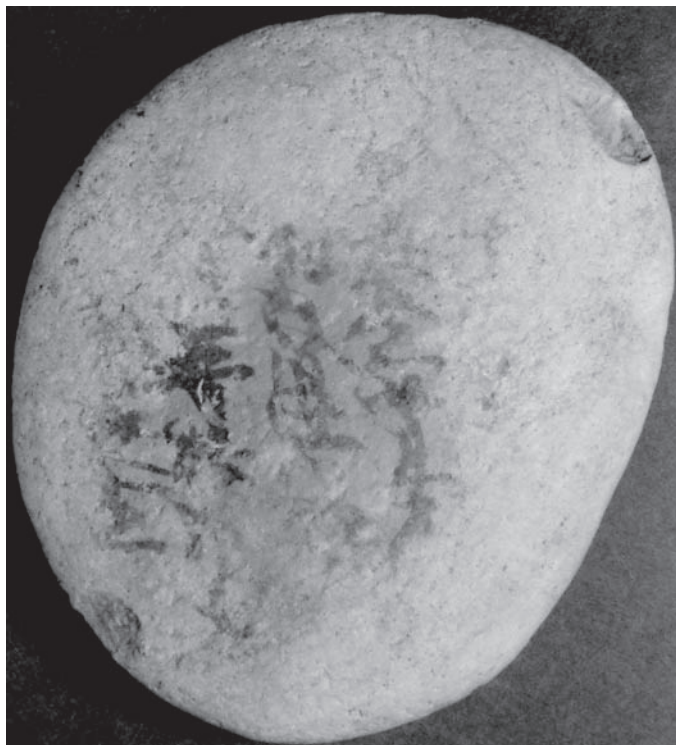
(面1・2ともに金剛經)

第41図 經石124



經石34 面1

面1  
 ・一行判読不可  
世尊而說偈言  
以色見我以音聲  
是人



經石34 面2

面2  
念如來  
相敬得  
菩提  
是念

(面1・2とも)金剛經

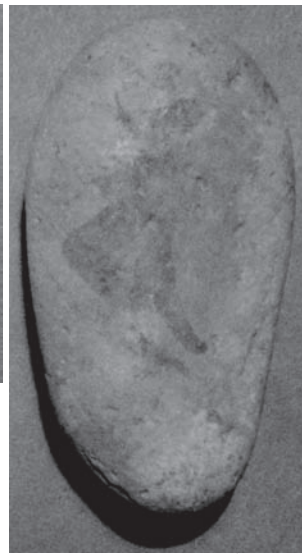
第42図 經石124



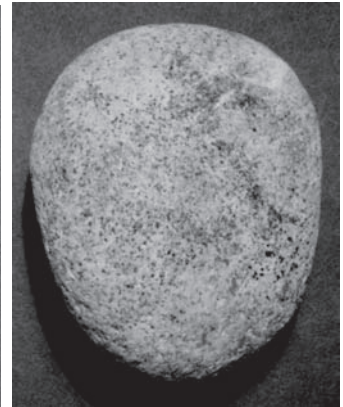
経石22



経石9



経石7



経石1



経石45



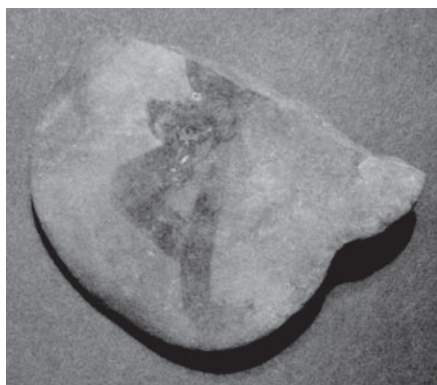
経石30



経石24



経石14



経石56



経石53



経石49

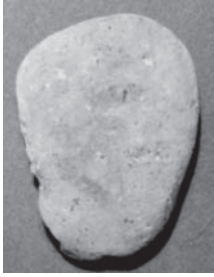


経石48

・すべての経石に  が書写されている。

第43図 経石1・7・9・22・14・24・30・45・48・49・53・56

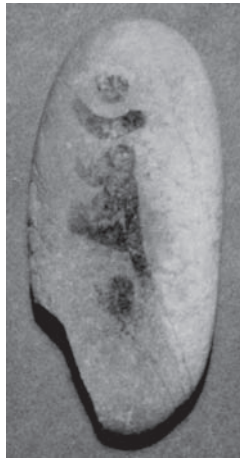




経石114



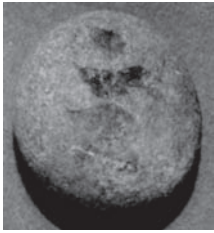
経石89



経石88



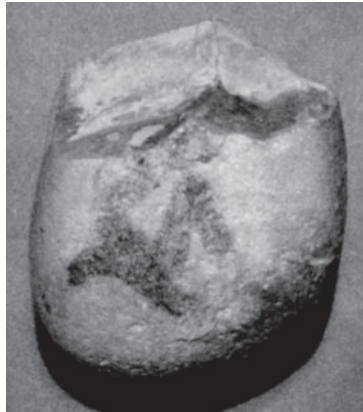
経石83



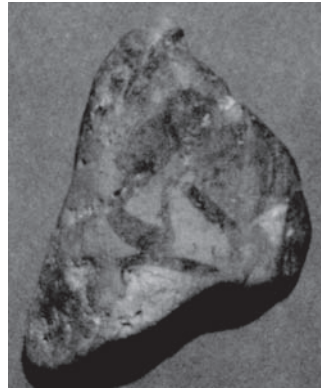
経石127



経石91



経石68



経石36



経石122



経石167



経石154



経石103

・36・127はが書写されている。

・83・114はが書写されている。

第44図 経石83・88・89・114・122・127・36・68・91・103・154・167



面2  
[ 𐤒 ]



面1  
[ 𐤒 ] 經石4



面2  
[ 𐤒 ]



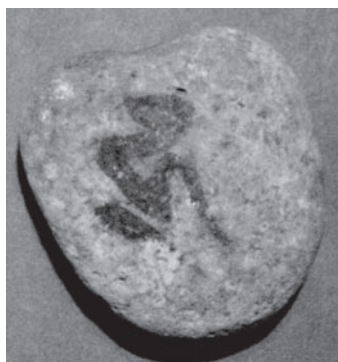
面1  
[ 𐤒 ] 經石2



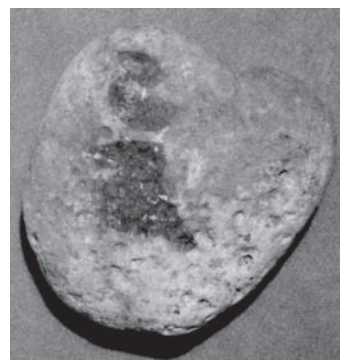
面2  
[ 𐤒 ]



面1  
[ 𐤒 ] 經石17



面2  
[ 𐤒 ]



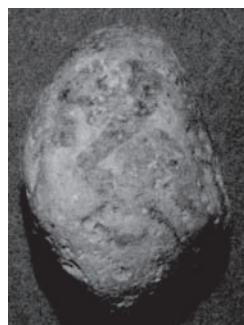
面1  
[ 𐤒 ] 經石15



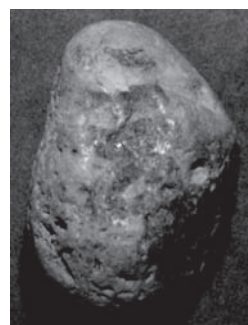
面2  
[ 𐤒 ]



面1  
[ 𐤒 ] 經石90



面2  
[ 𐤒 ]



面1  
[ 𐤒 ] 經石38

第 45 図 經石 2 · 4 · 15 · 17 · 38 · 90



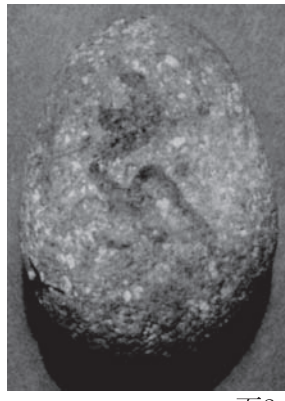
「カ」

面2



「カ」

経石113  
面1



「カ」

面2



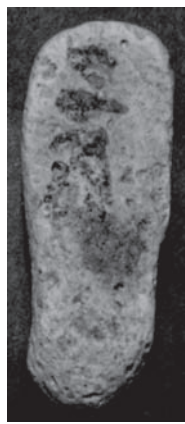
「カ」

経石105  
面1



「カ」

面2



「カ」

経石132  
面1



「カ」

面2



「カ」

経石123  
面1



「カ」

面2



「カ」

経石23  
面1



「カ」

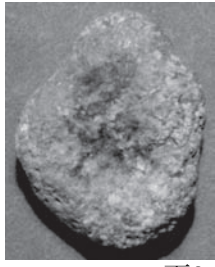
面2



「カ」

経石8  
面1

第46図 経石105・113・123・132・8・2



面2  
[カ]



経石73  
面1  
[カ]



面2  
[カ]



経石42  
面1  
[カ]



面2  
[カ]



経石155  
面1  
[カ]



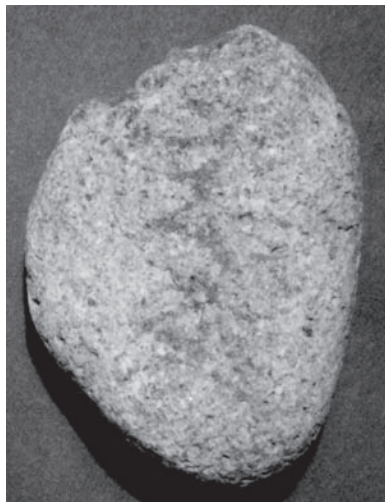
面2  
[カ]



経石85  
面1  
[カ]



経石18  
[カ]

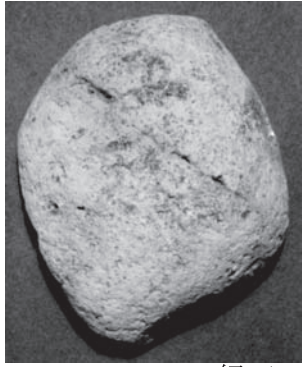


経石16  
[カ]



経石3  
[カ]

第47図 経石42・73・85・155・3・16・1



経石19  
面1

・面2墨痕のみ  
「カ」



経石106

「カ」



経石46

「カ」



面2

「カ」



経石37  
面1

「カ」



経石57  
面1

・面2墨痕のみ  
「カ」



経石47  
面1

・面2墨痕のみ  
「カ」



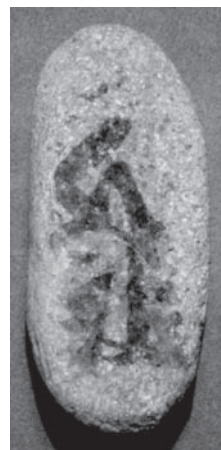
面2

「カ」



経石138  
面1

「カ」



面2

「カ」

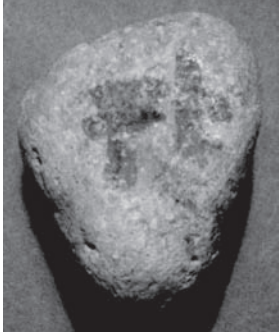


経石66  
面1

「カ」

第48図 経石46・106・19・47・57・37・66・138

「𠄎」



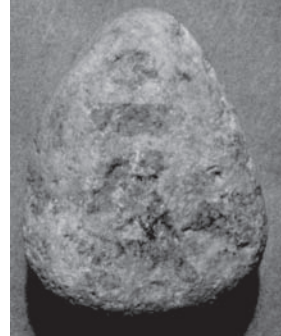
経石110 面3

「𠄎」



経石110 面2

「𠄎」



経石110 面1

「𠄎」



経石40 面1



「𠄎」 経石64 面2



「𠄎」 経石64 面1

「𠄎」



経石40 面2



「𠄎」 経石182 面2



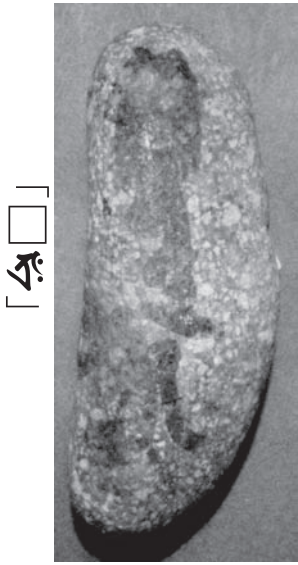
「𠄎」 経石182 面1

・判読不可



経石40 面3

第49図 経石110・64・182・40



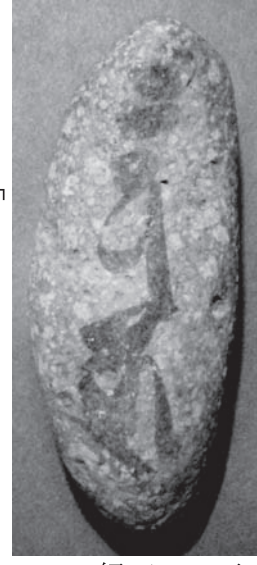
「𠄎」

経石126 面3



「𠄎」

経石126 面2



「𠄎・𠄎」

経石126 面1



経石92 面1

・面2墨痕のみ  
「𠄎・𠄎」



経石27 面1

・面2墨痕のみ  
「𠄎・𠄎」



経石79 面1

・面2墨痕のみ  
「𠄎・𠄎カ」

第50図 経石126・27・92・79

・面2判読不可

「」



経石44 面1

「南无大日如来」



経石5 面2

「カ」



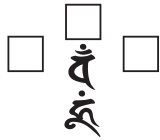
経石5 面1

第51図 経石44・5

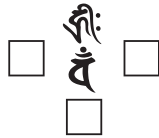




経石29 面2



経石29 面1



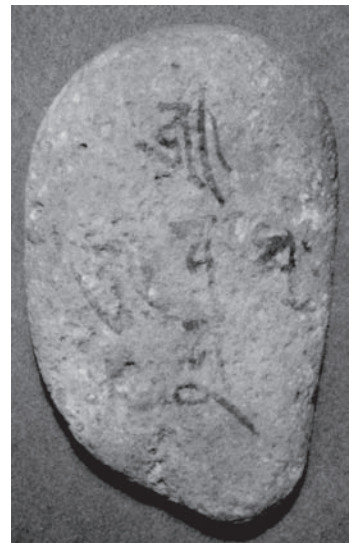
経石26 面1



経石54 面1



経石52 面2

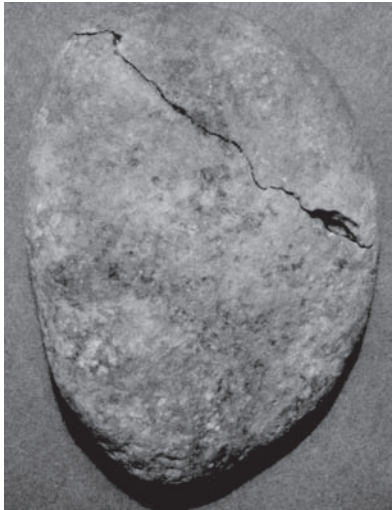


経石52 面1



第52図 経石26・29・52・54

□  
 □<sup>シ</sup>  
 □



経石69 面2

シ  
 □<sup>シ</sup>  
 丹



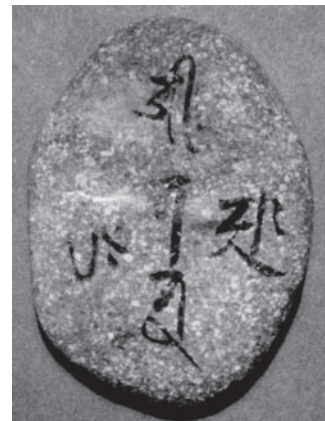
経石69 面1

シ  
 □<sup>シ</sup>  
 □



経石70 面2

シ  
 □<sup>シ</sup>  
 丹



経石70 面1

□<sup>シ</sup>  
 □<sup>シ</sup>  
 □



経石81 面2

シ  
 □<sup>シ</sup>  
 丹



経石81 面1

第 53 図 経石 69・70・81

□ 𠄎 □  
□ 𠄎 □

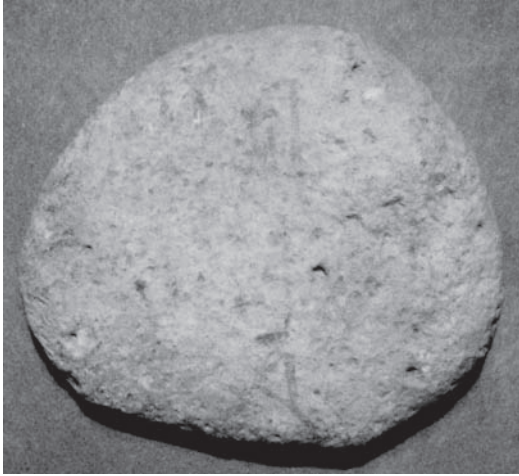


經石128 面2

□ 𠄎 𠄎  
□ 𠄎 𠄎

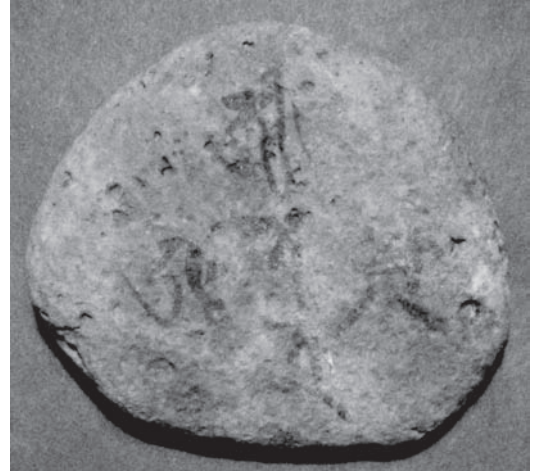


經石84 面1



經石87 面2

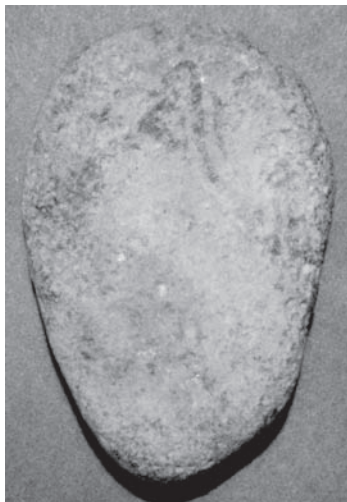
□ 𠄎 □  
□ 𠄎 □



經石87 面1

𠄎 𠄎 𠄎  
𠄎 𠄎 𠄎

□ 𠄎 □  
□ 𠄎 □  
□ 𠄎 □



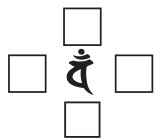
經石93 面2

𠄎 𠄎 𠄎  
𠄎 𠄎 𠄎



經石93 面1

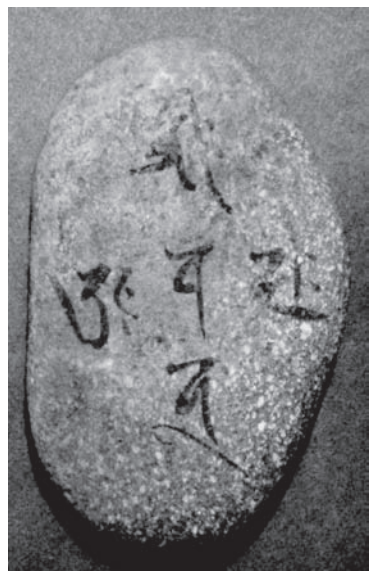
第54圖 經石84・87・93・128



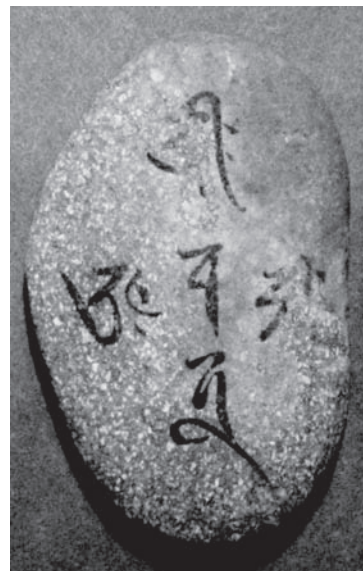
経石131 面2



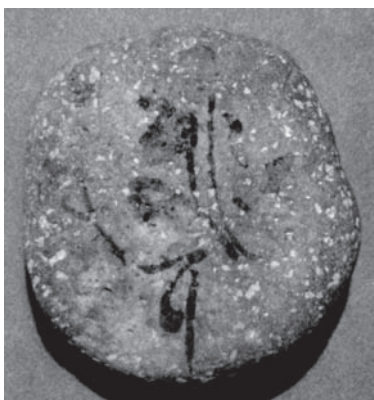
経石131 面1



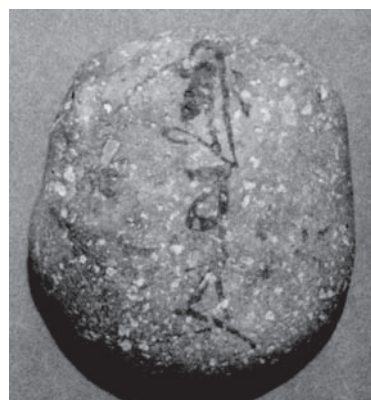
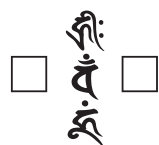
経石161 面2



経石161 面1

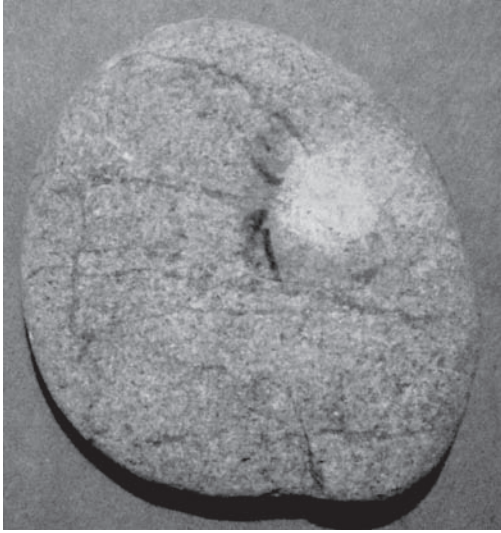


経石171 面2



経石171 面1

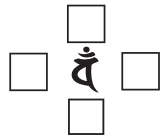
第55図 経石131・161・171



經石168 面



經石160 面1



第 56 図 經石 1 6 0 ・ 1 6 8

No.	平面位置	基準点からの座標		深さ (m)	法量 (cm)			重量 (g)	書写面	打欠の種類	経文または梵字の種類
		X (m)	Y (m)		長軸	短軸	厚さ				
1	A ②			床面	4.7	3.9	1.7	31	1		『ㄎ』バン
2	A ②	3.03	1.84	1.04	4.3	2.8	2	32	2		面1『ㄎ』バン 面2『ㄎ』ウーン
3	A ②			0.9~1	7.1	3.5	1.8	51	1		『ㄎㄎ』バン・ウーン
4	A ③	2.16	0.29	1.36	4.5	3.8	1.7	33	2		面1『ㄎ』バン 面2『ㄎ』ウーン
5	A ③			1.1~1.2	11.6	3.8	1.5	97	2		面1『ㄎㄎㄎㄎㄎ』 面2『南无大日如来』
6	A ③	2.69	0.92	1.06	11.1	9.4	2.3	338	2		金剛経
7	A ③			1~1.1	6.8	3.5	1.7	52	1		『ㄎ』バン
8	A ④			床面	6.1	3.5	2	58	2		面1『ㄎ』バン 面2 不明
9	A ④	1.23	1.65	1.09	4.3	2	1.8	24	1		『ㄎ』バン
10	A ④	2.02	1.7	1.03	20.3	14.4	2.2	840	2	A2	序品第一
11	A ④			1~1.05	10.7	7.2	1.8	181	2		判読不可
12	A ④			1~1.05	13.1	9.8	1.9	417	1		判読不可
13	A ④	2.58	1.1	0.9	13.5	8.8	2.2	372	1		化城喻品第七
14	A ④	2.45	1.49	0.89	4	2.5	1.3	13	1		『ㄎ』バン
15	A ④	2.55	1.87	0.89	3.7	3.6	1.5	31	2		面1『ㄎ』バン 面2『ㄎ』ウーン
16	A ④	2.87	1.97	0.87	6	4.4	2.1	55	1		『ㄎㄎ』バン・ウーン
17	A ④	2.04	1.96	0.82	4.3	3.4	1.6	36	2		面1『ㄎ』バン 面2『ㄎ』ウーン
18	A ④			0.8~0.9	6.9	3.5	2.1	68	1		『ㄎㄎ』バン・ウーンか?
19	A ④			0.8~0.9	4.6	3.3	1.6	21	2		面1『ㄎ』バンか? 面2 不明
20	A ④			0.8~0.9	8	5.3	1.7	77	1		判読不可
21	A ④			0.8~0.85	8.9	5	2	118	1		判読不可
22	A ④			0.8~0.85	5.1	3.8	1.9	53	1		『ㄎ』バン
23	A ④			0.8~0.85	4.3	2.9	2.1	37	2		『ㄎㄎ』バン・ウーンか?
24	A ④	2.27	1.79	0.76	3.8	4.2	1.3	25	1		『ㄎ』バン
25	A ④	2.01	1.88	0.73	6.1	1.7	2.6	34	2		判読不可
26	A ④			0.7~0.8	5.7	3.7	1.8	54	1		金剛界五仏
27	A ④			0.7~0.8	5.9	4.4	2.1	63	2		面1『ㄎㄎ』バン・ウーン 面2 不明
28	B ②	1.91	1.72	1.07	8.4	12.5	2.1	260	2		判読不可
29	B ②	1.82	1.91	1.04	6.8	5.2	1.5	71	1		金剛界五仏
30	B ②	1.77	1.7	1.04	5.5	4.8	2.3	53	1		『ㄎ』バン
31	B ②	1.12	1.7	0.98	10.3	6.8	1.5	167	2		従地涌出品第十五
32	B ②	1.3	1.97	0.82	14.6	5.7	2.2	345	1		判読不可
33	B ②			0.8~1	12.1	6.4	1.4	218	1		判読不可
34	B ②	1.78	1.8	0.79	10	8.3	2.3	227	2	A2a2	金剛経
35	C ①			床直	8.4	6	1.2	108	2		判読不可
36	C ①	3.12	2.56	0.98	4.8	3.3	1.8	31	1		『ㄎ』ウーン
37	C ①	3.77	2.63	0.93	5.5	3.4	2.5	57	2		面1『ㄎ』バン 面2『ㄎ』キリーク
38	C ①			0.8~0.9	3.8	2.7	2.3	23	1		面1『ㄎ』バン 面2『ㄎ』ウーン
39	C ①			0.8~0.9	18.2	10.9	3.1	977	1		判読不可
40	C ①			0.8~0.85	5	3.3	3.2	45	3		面1『ㄎ』バン 面2『ㄎ』アク 面3 不明
41	C ①	3.01	2.6	0.8	15.4	10.1	2.2	667	1		序品第一
42	C ①	3.16	2.98	0.78	3.9	2.8	1.8	28	2		面1『ㄎ』バン 面2 不明
43	C ①	3.33	2.67	0.78	17	6.3	1.5	356	1		如来神力品第二十一
44	C ①	3.45	2.55	0.77	8.3	5.9	1.5	89	1	B1	『ㄎㄎㄎㄎㄎ』バン・?・ウーン・タラーク・?
45	C ①	3.37	2.91	0.75	6.2	2.2	1.2	21	1		『ㄎ』バン
46	C ①			0.7~0.8	4.2	3.4	1.7	29	1		『ㄎㄎ』バン・ウーンか?
47	C ①			0.7~0.8	4.4	2.3	1.8	18	2		面1『ㄎ』バン 面2 不明
48	C ①			0.7~0.8	4.3	2.8	1	13	1		『ㄎ』バン
49	C ①			0.7~0.8	3.8	2.9	0.8	14	1		『ㄎ』バン
50	C ①			0.7~0.8	17.4	9.7	3.1	692	1		判読不可
51	C ①	3.22	2.63	0.5	10.2	6.7	1.5	189	1		判読不可
52	C ①			-	6.5	4	1.5	49	2		金剛界五仏
53	C ①			-	4.3	1.9	1.1	8	1		『ㄎ』バン
54	C ①			-	5.1	4.2	1.1	42	2		金剛界五仏
55	C ①			-	8.9	8.7	1.7	195	2		化城喻品第七
56	C ②	3.1	3.19	0.98	3.8	4.8	1.4	25	1		『ㄎ』バン
57	C ②			0.9~1	4.5	3.3	1	14	2		面1『ㄎ』バン 面2 不明
58	C ②			0.7~0.8	7.9	5.7	1.8	108	2		判読不可
59	C ②			0.6~0.7	6.2	7.6	1.9	91	2		判読不可
60	C ②			-	11.5	10.6	1.3	290	2		随喜功德品第十八
61	C ②			-	12.5	9.7	3.3	647	1		判読不可
62	C ②			-	16.3	10	1.7	385	1		譬喻品第三

第2表 経石計測一覧1

No	平面位置	基準点からの座標		深さ (m)	法量 (cm)			重量 (g)	書写面	打欠の種類	経文または梵字の種類
		X (m)	Y (m)		長軸	短軸	厚さ				
63	C②			-	14.1	12.4	1.4	414	2		判読不可
64	C②			-	5.8	3.7	1.9	58	2		面1『ㇿ』バン・ウーン 面2『ㇿ』キリーク
65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
66	C③	2.8	2.92	1.13	5.3	2.4	1.6	27	2		面1『ㇿ』バン 面2『ㇿ』ウーン・アク
67	C③			1.05~1.1	17.1	8.2	3.5	644	1		判読不可
68	C③	2.96	2.36	1.03	4.8	3.9	2.7	54	1		『ㇿ』ウーン
69	C③	2.35	2.68	1.03	6.2	4.5	1.9	68	2		金剛界五仏
70	C③	2.16	2.26	1	5.1	3.7	1.4	31	2		金剛界五仏
71	C③			1~1.05	16.8	11.5	2.4	902	1		判読不可
72	C③			1~1.05	3.8	4.3	1.8	39	1		判読不可
73	C③	2.99	2.07	0.99	3.2	2.4	1	12	2		面1『ㇿ』バン 面2『ㇿ』ウーンか?
74	C③	2.38	2.47	0.99	16.3	7.2	2.6	385	1	A1	化城喻品第七
75	C③	2.56	2.55	0.97	12.5	8.6	2	339	1		判読不可
76	C③	2.73	2.67	0.96	15.3	12	3.5	1150	1		判読不可
77	C③	2.92	2.39	0.93	16.3	9.2	3	761	2		莊嚴王本事品第二十七
78	C③			0.9~1	13	10.4	5.1	1040	1		判読不可
79	C③	2.52	2.27	0.86	4.9	3.3	2.1	51	2		面1『ㇿ』バン・ウーンか? 面2 不明
80	C③	2.13	2.45	0.86	10.2	10.6	1.6	359	1		判読不可
81	C③	2.9	2.69	0.86	6.6	3.9	1.5	44	2		金剛界五仏
82	C③			0.85~0.9	10.3	9	2	226	2		判読不可
83	C③	2.08	2.18	0.81	4.9	4.7	1.5	32	1		『ㇿ』バン
84	C③			0.8~0.9	5.7	4.3	1.6	48	1		金剛界五仏
85	C③			0.8~0.9	3.5	2.5	1.5	16	2		面1『ㇿ』バン 面2 不明
86	C③	2.1	2.46	0.78	5.8	1.9	1.3	27	1		判読不可
87	C③	2.75	2.58	0.77	6.2	5.4	1.5	69	1		金剛界五仏
88	C③	2.15	2.04	0.77	5.5	2.5	1.1	17	1		『ㇿ』バン
89	C③	2.41	2.39	0.77	3.7	2.8	1.9	25	1		『ㇿ』バンか?
90	C③	2.84	2.25	0.76	4.6	4.5	1.4	41	2		面1『ㇿ』バン 面2『ㇿ』ウーン
91	C③	2.1	2.01	0.75	5.9	2.6	2	40	1		『ㇿ』ウーンか?
92	C③	2.07	2.27	0.74	6	4.8	1.2	50	2		面1『ㇿ』バン・ウーン 面2 不明
93	C③	2.65	2.12	0.73	6	4	1.1	35	2		金剛界五仏
94	C③			0.7~0.8	7.2	8.8	1.9	164	1		判読不可
95	C③	2.9	2.82	0.7	12.3	10.5	2.5	396	1		序品第一
96	C③			0.6~0.7	22.6	13	4.3	1930	1		判読不可
97	C③			0.6~0.7	14.8	10.3	2.5	507	1		常不輕菩薩品第二十
98	C③			0.6~0.7	14.8	8.1	3.2	576	1		判読不可
99	C③			0.5~0.6	12.5	8.3	1.6	225	1		判読不可
100	C③			0.4~0.5	11.9	9	2.8	407	1		判読不可
101	C③			-	12.3	17.1	1	1000	2	B1	陀羅尼品第二十六~妙莊嚴王本事品第二十七
102	C④	2.77	3.13	1.1	15.5	8.8	1.9	472	1	B1	判読不可
103	C④	2.69	3.11	1.08	4.3	2.5	1.5	22	1		『ㇿ』ウーン
104	C④	2.88	3.06	1.04	14.2	9.7	3.4	546	2		序品第一 提婆達多品第十二
105	C④			0.9~1	4.8	3.3	2.4	51	2		面1『ㇿ』ウーン 面2 不明
106	C④			0.9~1	5.4	4.1	1.2	36	1		『ㇿ』バン・ウーン
107	C④			0.8~0.9	3.8	2.8	1.8	28	1		判読不可
108	C④	2.52	3.28	0.73	11.1	7.8	1.8	203	2		妙音菩薩品第二十四
109	C④	2.88	3.26	0.69	17.6	12.6	2.1	703	1		判読不可
110	C④			0.6~0.7	3.8	3	2.2	33	3		面1『ㇿ』バン 面2『ㇿ』ウーン 面3『ㇿ』アク
111	C④			埋土下層	18.5	6.9	4	607	1		見寶塔品第十一
112	C④			埋土下層	18.8	10.4	1.9	529	1		判読不可
113	C④			埋土	5	3.8	1.6	27	2	A1	面1『ㇿ』バン 面2『ㇿ』ウーン
114	D①			床直上	3.2	2.3	0.8	7	1		『ㇿ』バン
115	D①			床直上	12.1	6.9	2.6	328	1		判読不可
116	D①	1.72	2.26	1.05	0.7	4.1	0.9	31	1		判読不可
117	D①			1.05~1.1	14.4	9.7	1.3	391	1		判読不可
118	D①	1.67	2.73	1.04	21.6	9.2	2	166	1		判読不可
119	D①	1.24	2.65	1.01	13.6	11	3.8	900	1		判読不可
120	D①			1~底面	15.8	13.8	2.5	745	1		判読不可
121	D①			1~1.1	13.9	10.7	1.8	503	1		判読不可
122	D①			1~1.05	3.6	2	1.6	15	1		『ㇿ』バン
123	D①	1.89	2.93	0.97	5.8	4.3	1.6	69	2		面1『ㇿ』バン 面2『ㇿ』ウーン
124	D①	1.18	2.12	0.95	12	9.4	1.3	224	2	A1	金剛經

第2表 経石計測一覧2

No.	平面位置	基準点からの座標		深さ (m)	法量 (cm)			重量 (g)	書写面	打欠の種類	経文または梵字の種類
		X (m)	Y (m)		長軸	短軸	厚さ				
125	D ①	1.57	3	0.94	15.2	12.3	2	609	1		信解品第四
126	D ①	1.83	2.2	0.93	6.7	2.5	2.2	53	3		面1『ㄨ』バン・ウーン 面2『ㄨ』アケ 面3『ㄨ』不明とケラーク
127	D ①	1.88	2.09	0.93	2.1	2.5	1.7	15	1		『ㄨ』バン
128	D ①	1.87	2.58	0.92	4.9	3.6	1.6	48	1		金剛界五仏
129	D ①	1.58	2.62	0.92	17.6	10.8	2.9	740	1		判読不可
130	D ①	1.58	2.62	0.91	11.5	8.7	1.8	296	4		序品第一
131	D ①	1.88	2.13	0.9	6	4.2	1.4	53	2		金剛界五仏
132	D ①			0.9~1	5.2	1.9	1	22	2		面1『ㄨ』バン 面2『ㄨ』ウーン
133	D ①			0.9~1	13.3	10.3	2.1	451	1		判読不可
134	D ①	1.5	3	0.82	12.6	10.7	2.3	405	2		判読不可
135	D ①	1.32	2.62	0.82	15.1	11.6	2.7	551	2	B1	囑累品第二十二~薬王菩薩本事品第二十三
136	D ①	1.52	2.93	0.8	13.8	11.8	3.7	561	2		判読不可
137	D ①			0.8~1	7.1	3.9	3	97	1		判読不可
138	D ①			0.8~1	5.5	3.5	1.8	41	2		面1『ㄨ』バン・ウーン 面2『ㄨ』アケ
139	D ①			0.8~1	13.7	8.3	1.3	301	2		判読不可
140	D ①			0.8~1	12.5	8.1	1.5	182	2		判読不可
141	D ①			0.8~1	12.4	8	2	268	1		判読不可
142	D ①	1.5	2.38	0.78	22	17	3.8	1610	1		序品第一
143	D ①	1.6	2.1	0.72	19.6	13.6	8	2600	1	B1	判読不可
144	D ①	1.63	2.83	0.68	22.2	12.7	3.6	1540	1		化城喻品第七
145	D ①			0.6~0.8	24.2	14.5	7.3	3400	1		判読不可
146	D ①			0.6~0.8	12.7	10.5	2.3	350	1		判読不可
147	D ①			0.6~0.8	14.7	7.3	1.4	238	1		判読不可
148	D ①			0.4~0.6	11.7	10.7	2	474	2		方便品第二
149	D ①			0.4~0.6	16.9	14.4	3	1760	1		判読不可
150	D ①			0.4~0.6	13.2	8.6	1.5	207	1		判読不可
151	D ①			0.4~0.6	14.2	10.2	2.1	587	1		判読不可
152	D ①			0.4~0.6	4.5	8.7	1.4	78	1		判読不可
153	D ①			0.4~0.6	18.2	9.5	2.1	537	2	A1a1	提婆達多品第十二
154	D ②	1.84	3.11	1.03	4.9	3.5	1.6	31	1		『ㄨ』ウーン
155	D ②	1.84	3.12	0.98	6.4	3.4	1.2	28	1		面1『ㄨ』バン 面2『ㄨ』ウーンか?
156	D ②	1.91	3.07	0.91	14.4	6.7	2.5	313	2		化城喻品第七
157	D ②	1.77	3.09	0.9	13	8.2	1.2	205	2	A1	勸持品第十三~安樂行品第十四
158	D ②			0.8~1	11.4	3	1.9	124	1		判読不可
159	D ②			埋土下層	6.9	4.3	0.8	28	1		普賢菩薩勸発品第二十八
160	D ③	0.77	2.18	0.99	6	4.9	1.7	81	1		金剛界五仏
161	D ③	0.76	2.25	0.97	6.6	4.1	1.3	55	2		金剛界五仏
162	D ③	0.81	2.47	0.85	13.1	11.2	1.7	422	1		化城喻品第七
163	D ③	0.68	2.1	0.8	14.8	14.4	2.7	269	1		判読不可
164	D ③			0.8~1	11.8	5	1.7	132	2		判読不可
165	D ③			0.8~1	12.5	10.7	2.1	442	1		判読不可
166	D ③			埋土下層	6.1	4.5	0.5	14	1		判読不可
167	D ③			埋土下層	6.1	3.7	1.6	53	1		『ㄨ』ウーン?
168	D ③			埋土下層	6.6	5.8	1.4	75	1		金剛界五仏?
169	D ③			埋土上層	12.9	11	1.5	313	1		判読不可
170	D ③			埋土上層	17.2	10	3.8	954	1		陀羅尼品第二十六
171	D ③			埋土上層	4.6	4.2	1.6	41	2		金剛界五仏
172	D ③			盛土上層	8.6	8.9	1.3	201	1		判読不可
173	D ③			埋土	17.6	11.8	2.5	826	1		判読不可
174				埋土	12.8	9.2	1.6	241	1		判読不可
175				埋土	11.7	7.8	2	211	1	A1	判読不可
176				埋土	15.7	8.5	5.3	999	1		判読不可
177				埋土	12	12	2	381	1		判読不可
178				埋土	15.8	10.5	3.7	725	1		判読不可
179				埋土	13.6	11.6	1.8	449	1		判読不可
180	A ③			1.3~1.5	4.7	3.5	1.5	36	1		判読不可
181				I a層	6	6	1.6	80	2	A1B1a1	分別功德品第十七
182				表採	4.8	4.3	2	57	2		面1『ㄨ』バン・ウーン 面2『ㄨ』キリーク
183				—	11.2	7	2.2	301	2		判読不可
184				—	8.4	8.2	1.6	191	1		判読不可
185				—	18.1	10.9	2	747	1		判読不可
186				—	6.3	3.7	0.9	40	1		判読不可
187				—	5.3	2.9	1.1	24	1		判読不可

第2表 経石計測一覧3



剥離痕のある経石（第57・58図） 出土した経石のなかで、1,007点の経石に人為的に打ち欠いたと考えられる剥離痕が認められた。これらの剥離は無造作に打ち欠いているわけではなく、大きく4つのパターンに分類できる。

A：片面の長軸方向の端部を剥離する（両面の場合は表面がA、裏面がa）

B：片面の短軸方向の側面を剥離する（両面の場合は表面がB、裏面がb）

AB：片面の長短両軸方向を剥離する

C：片面の中央を剥離する

例えば、長軸の両面にそれぞれ1つずつ剥離痕が認められる場合は「A1a1」となる。第57・58図には、これらの代表的なパターンで剥離された経石を掲載した。

1は長軸片面に1つ剥離痕がある（A1）。2は長軸片面に2つ剥離痕がある（A2）。3・4は長軸両面に1つずつ剥離痕がある（A1a1）。5は長軸片面に2つ、短軸に1つ剥離痕がある（A2B1）。6は長軸片面に1つ、中央に1つ剥離痕がある（A1C1）。7は長軸片面と短軸裏面に1つずつ剥離痕がある（A1b1）。8は短軸片面に1つ剥離痕がある（B1）。9は短軸片面に2つ剥離痕がある（B2）。10は短軸両面に剥離痕がある（B1b1）。11は短軸片面に3つと中央に1つ剥離痕がある（B3C1）。12は長軸両面と短軸片面に1つずつ剥離痕がある（A1a1B1）。13は長軸片面1つ短軸両面に剥離痕がある（A1B2b3）。14は長軸両面と短軸片面に剥離痕がある（A1a1b3）。15は長軸片面と短軸両面に剥離痕がある（A1B1b3）。16は長軸両面、短軸両面に1つずつ剥離痕がある（A1a1B1b1）。

剥離部位の比率 1,007点の剥離痕のある経石の打ち欠き部位による内訳は次の通りである（両面含む）。

A：430点（42.7%）

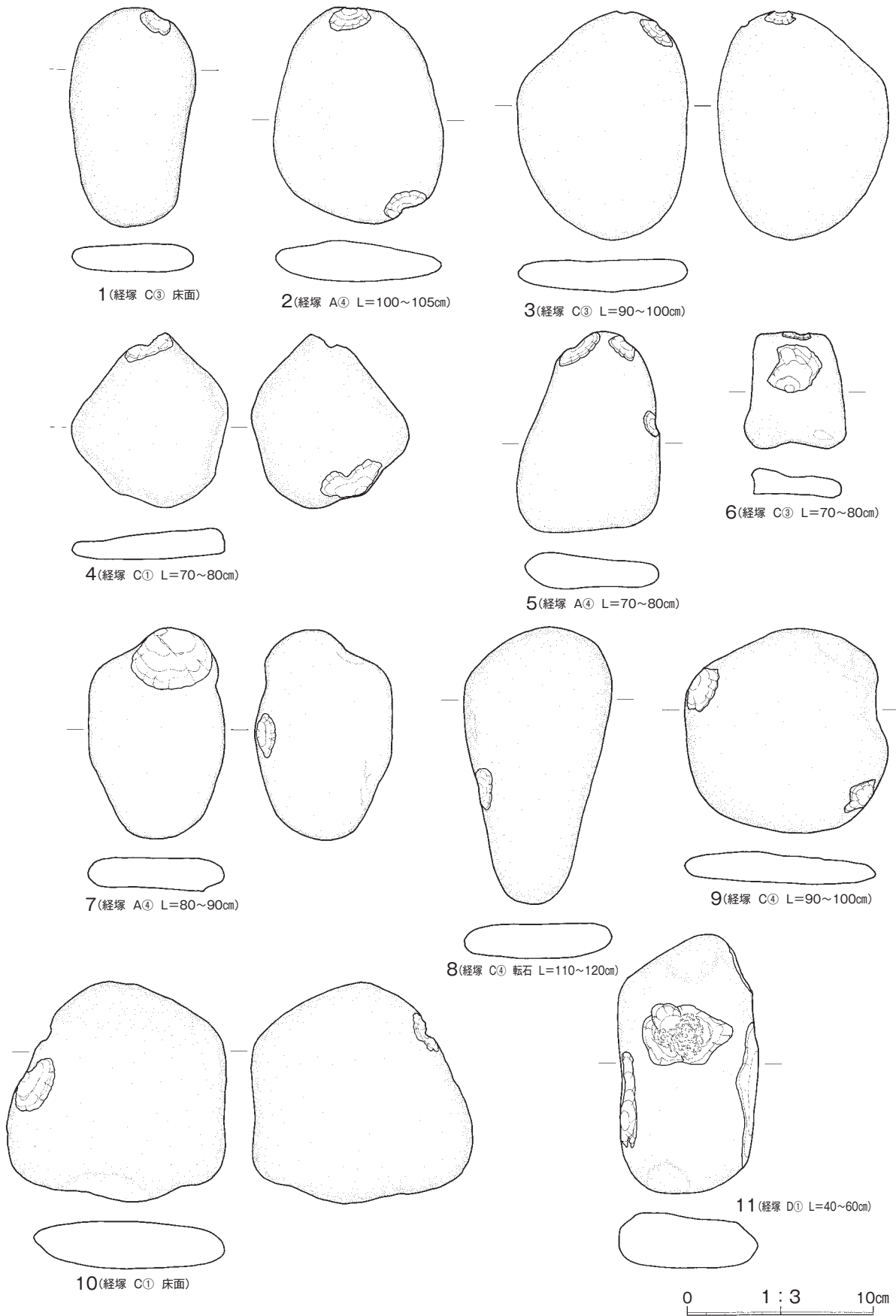
B：381点（37.8%）

AB：188点（18.7%）

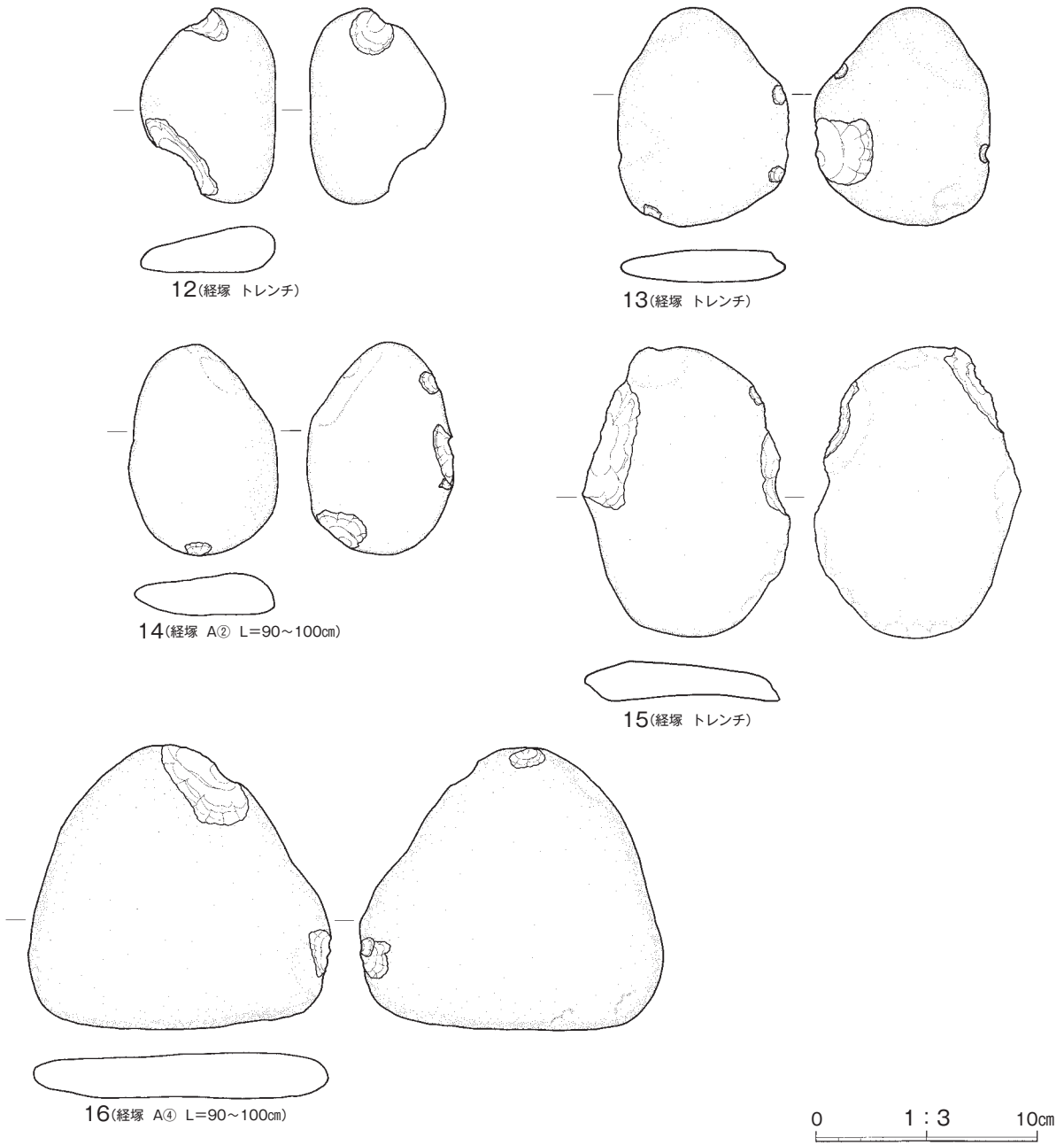
C：8点（0.8%）

若干の偏りはあるが、長軸と短軸それぞれを打ち欠く経石の比率は、ほぼ近い数値である。両軸を打ち欠く経石がその半分ほどの比率となっている。面の中央を打ち欠く経石は極めて少ない。

剥離痕のある経石は、調査時に点取りではなく任意グリッドのみで取り上げたため、XY座標による正確な出土位置は不明である。しかし、これは偶然に剥離したものではなく、埋経の際に何らかの仏教的儀礼に拠って行われた行為の所産と考えられる。



第 57 図 剥離痕のある経石 (1)



第 58 図 剥離痕のある経石 (2)

### (3). 近世の土坑墓・溝跡

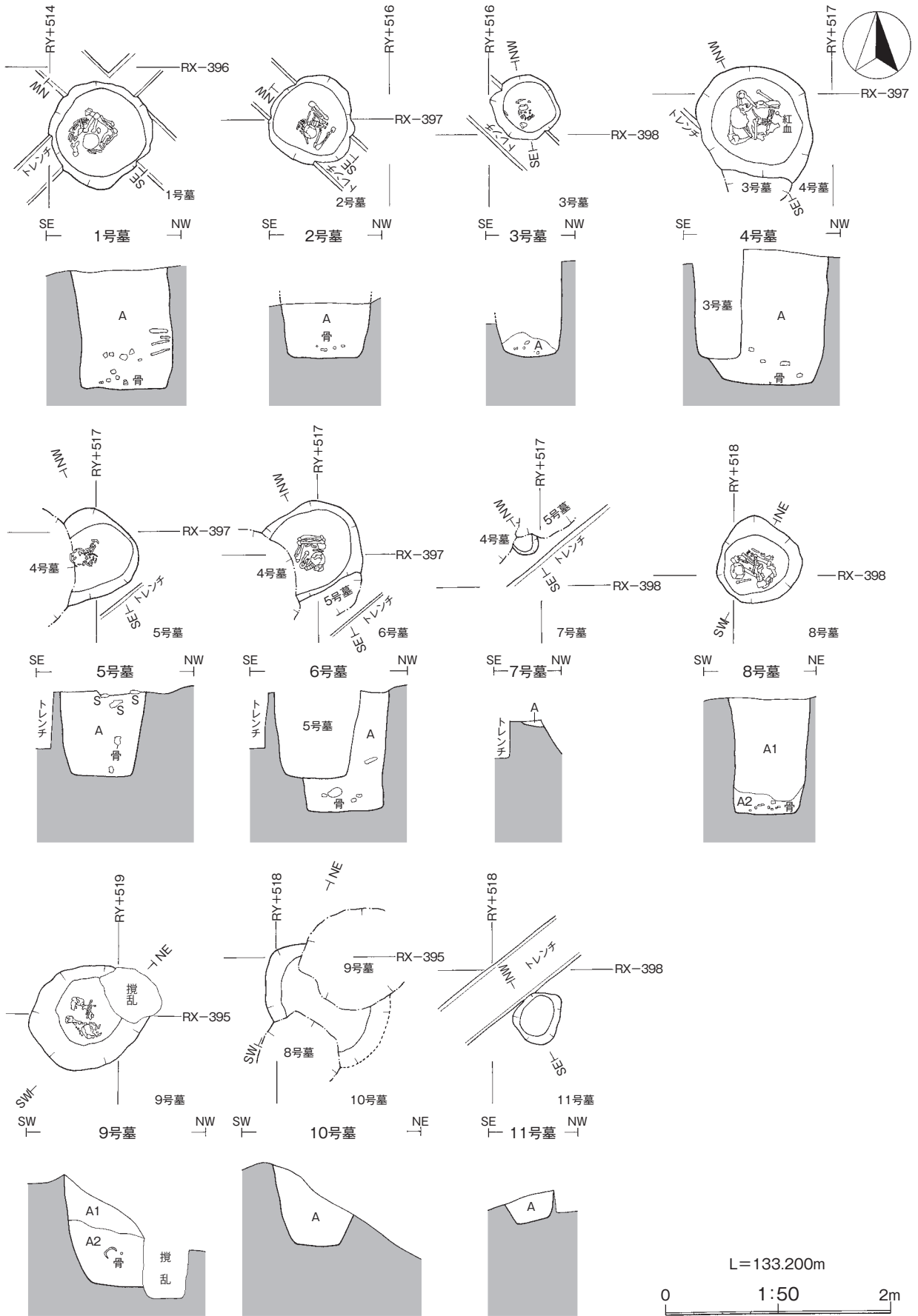
土坑墓 近世の土坑墓は27基確認されている。いずれも人為堆積で暗褐色土を主体に黄褐色土が混入するしまりのない層である。

墓番号	位置	平面形	規模			重複関係	出土遺物
			上端 (m)	下端 (m)	深さ (m)		
1	G10-H24	不整円形	0.92	0.78	1.08	-	経石、砥石、ガラス板、
2	G10-H24	不整円形	0.8	0.52	0.5	-	経石、寛永通寶
3	G10-I24	不整円形	0.58	0.43	0.86	4号墓を切る	
4	G10-I24	不整円形	1.17	0.8	1.22	6号墓を切る	紅皿、猪口、キセル、ガラス板、寛永通寶
5	G10-I24	不整円形	0.8	0.53	0.77	4、6、7号墓を切る	鉄銭、寛永通寶
6	G10-I24	不整円形	0.94	0.71	1.08	4、5号墓に切られる	経石、キセル、ガラス板、寛永通寶
7	G10-I24	不整円形	0.23	0.18	0.06	4、5号墓に切られる	寛永通寶
8	G10-J23	不整円形	0.73	0.55	1.06	10号墓を切る	経石、鉄銭、キセル、寛永通寶、永樂通寶
9	G10-J23	不整円形	1	0.53	0.98	10号墓を切る	経石、かわらけ、鉄銭、キセル、寛永通寶
10	G10-J23	不整円形	1.25以上	0.92	0.73	8、9号墓に切られる	経石
11	G10-J24	不整円形	0.42	0.28	0.33	-	経石
12	G11-I1	不整楕円形	長軸 1.1 短軸 0.6	長軸 1.0 短軸 0.55	0.19	16号墓を切る	
13	G11-I1	不整円形	0.8	0.52	0.53	15号墓を切る	簪、小坏
14	G10-I25	不整楕円形	長軸 1.2 短軸 0.62	長軸 0.9 短軸 0.6	0.68	19号墓を切る	
15	G11-I1	不整円形	1.44	1.03	0.91	20、22、23号墓を切る	碗
16	G11-J1	長方形	長軸 1.76 短軸 1.31	長軸 1.18 短軸 0.9	0.95	15、20号墓を切る	
17	G10-J25	不整円形	0.84	0.56	1.04	21、23号墓を切る	
18	G10-J25	不整円形	0.8以上	0.53以上	0.58	17号墓を切る	
19	G10-I25	不整円形	0.85	0.56	1.72	15、22号墓を切る	碗
20	G11-I1	不整円形	1.2	0.58	1.53	23号墓を切る	紅皿、キセル
21	G10-J25	長方形	長軸 1.37 短軸 1.12	長軸 1.07 短軸 0.88	1.05	22号墓を切る	硯、貝殻、炭化物、寛永通寶
22	G10-J25	長方形	長軸 1.39 短軸 1.18	長軸 1.10 短軸 0.96	0.76	23号墓を切る	かわらけ、キセル、寛永通寶
23	G10-J25	不整円形	1.02	0.62	0.76	21号墓を切る	鏡、キセル、小壺、猪口、碗、数珠玉、寛永通寶
24	G10-J25	不整円形	1.14	0.54	1.23	26号墓を切る	鏡、キセル
25	G10-K25	不整円形	1	0.63	0.97	27号墓に切られる	キセル
26	G10-K25	不整円形	0.75	0.41	0.37	26号墓を切る	寛永通寶
27	G11-K1	不整楕円形	長軸 1.22 短軸 0.57	長軸 1.00 短軸 0.57	0.88	-	

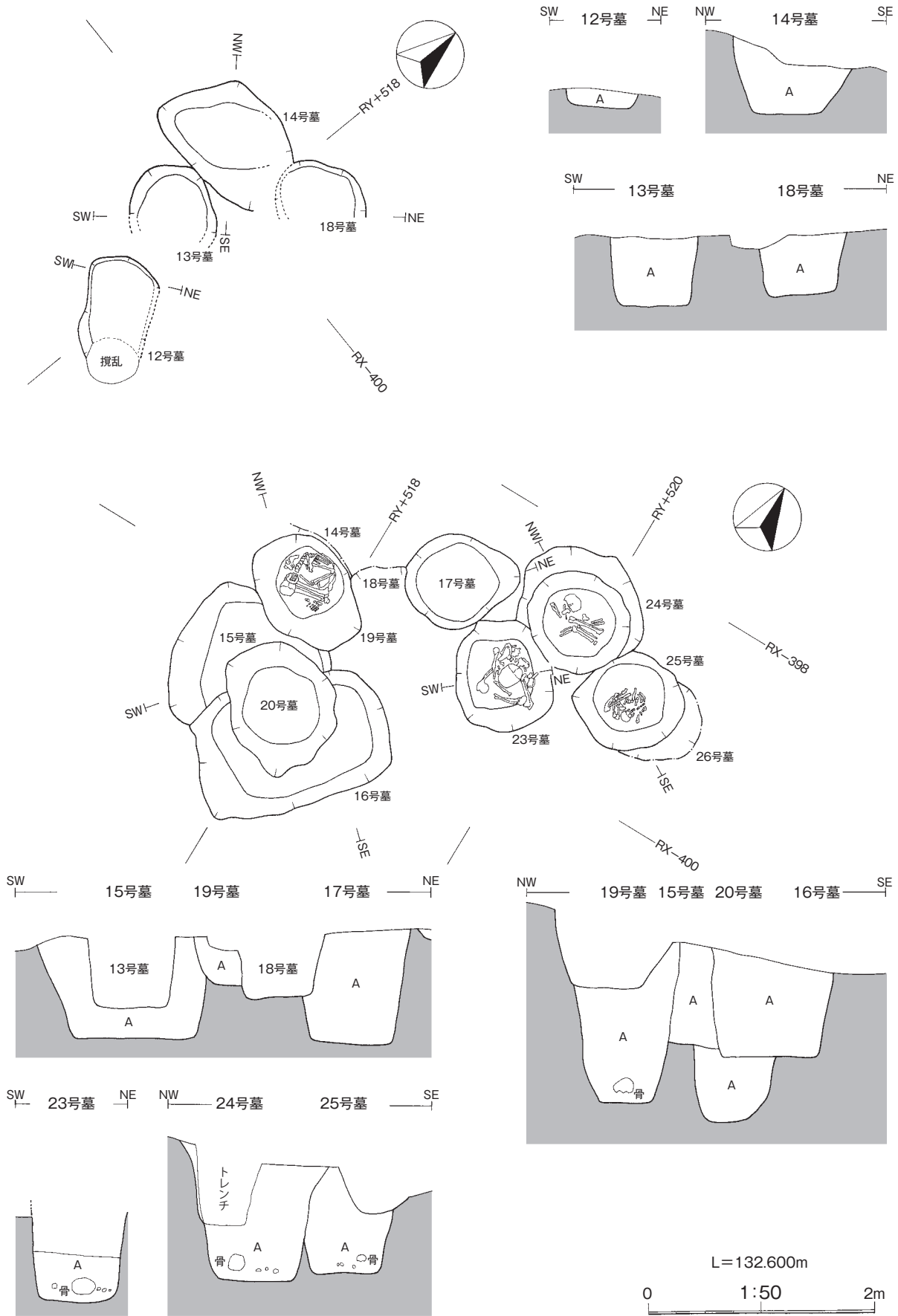
第3表 土坑墓計測一覧

#### RG004 溝跡 (第61図)

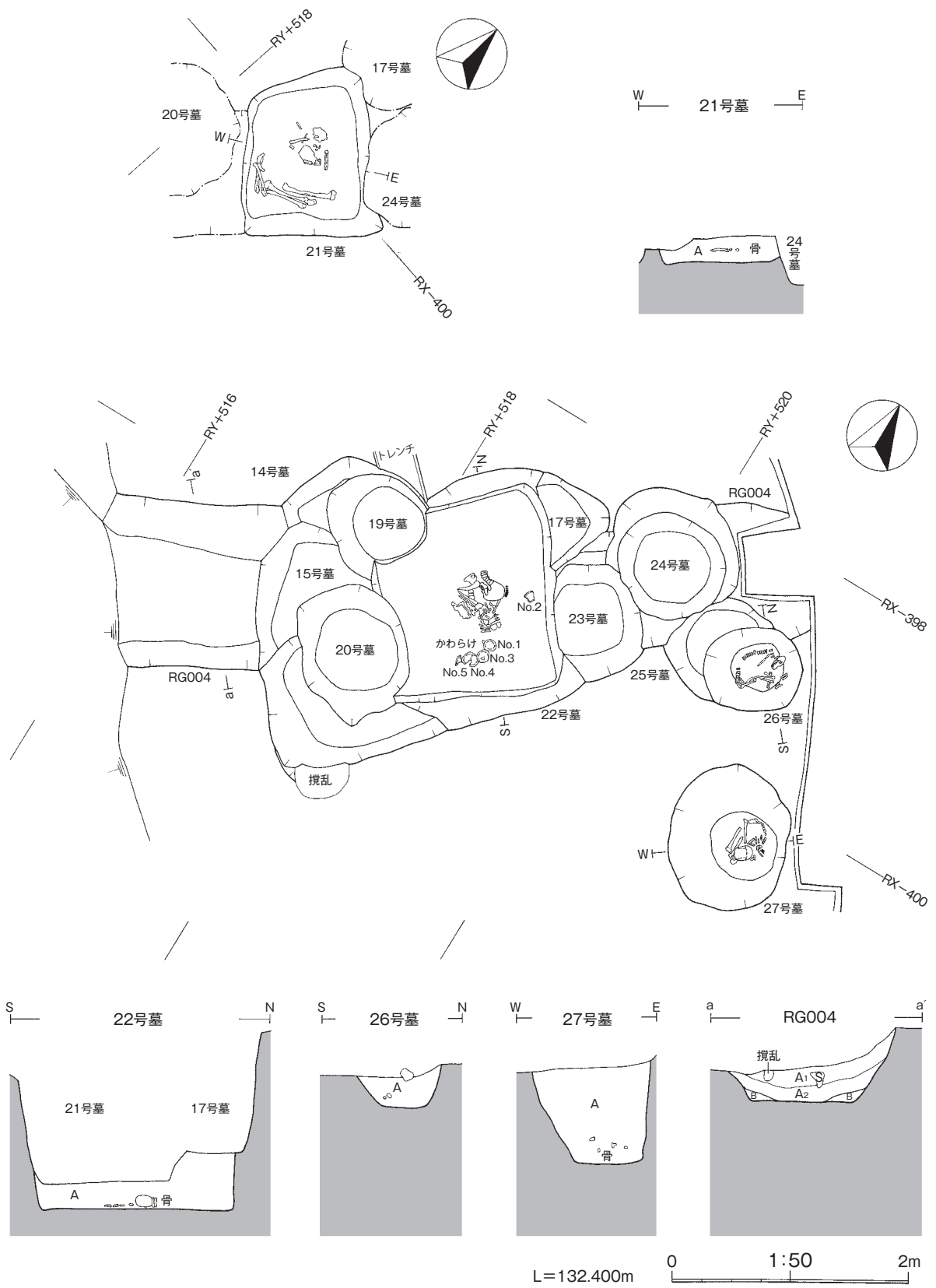
位置 調査区中央 平面形 東西に延び、東端は調査区外へ、西端は削平のため不明。  
 規模 長さは5.9mをはかり、幅は上端1.1～1.5m・下端0.7～0.9mをはかる。  
 重複関係 近世墓に切られる。掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト上面  
 埋土 自然堆積による。2層に大別され、A層は黒色土を主体に粒状の褐色土を含む層である。  
 B層は褐色土を主体とした、壁の崩壊土である。  
 壁の状態 検出面から底面までの深さは0.30mをはかり、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。  
 底面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 埋土中より弥生土器が出土している(第70図)。



第 59 図 土坑墓 (1)



第 60 図 土坑墓 (2)



第 61 図 土坑墓 (3)、RG004 溝跡

#### (4). 土坑墓および包含層出土遺物

土坑墓からは陶磁器、かわらけ、煙管、鏡、簪、硯、砥石、古銭、経石などが出土している。

**陶磁器類 (第 62・63 図)** 1～17 は土坑墓出土の陶磁器類である。1 は肥前系の紅皿である。2 は猪口である。3 は体部に屈曲を持つ相馬系の碗である。4 はロクロ成形のかわらけである。5 は瀬戸美濃の二重網目文が施された染付小杯である。内面と外面にそれぞれ「洛東瑞竜山」、「なんぜんじたんごや」と文字が後から上絵付けされてある。6 は二重網目文が施された肥前磁器碗である。7 は梅花文が施された肥前磁器碗の体部片である。8・9 は肥前の紅皿である。10～14 はロクロ成形のかわらけである。15 は京焼風の肥前碗である。16 は灰釉小壺である。17 は笹文が施された猪口である。

18～25 は I a 層出土の陶磁器類である。18 は肥前染付碗で、梵字文が施される。19 は格子目文が施される染付碗である。地元産の花古焼か山陰焼と考えられる。20 は肥前染付輪花皿で唐草文が施される。21・22 は肥前染付碗で、22 は見込五弁花文が施される。23・24 は京焼風の湯呑碗と茶碗である。25 は鉄袖が施された甕である。

**石製品 (第 63 図)** 26 は硯である。外面に黒色塗料が塗布され、海端部と陸端部に墨が残る。使用による堂部の磨耗は顕著には見られない。重量 212.7 g。27 は砥石である。四面を使用しており、上部に欠損が見られる。28 は多孔質安山岩製の磨石である。1/3 欠損している。29 は多孔質安山岩製の搗臼である。円形の礫の表に碗形で大きい凹みがある。

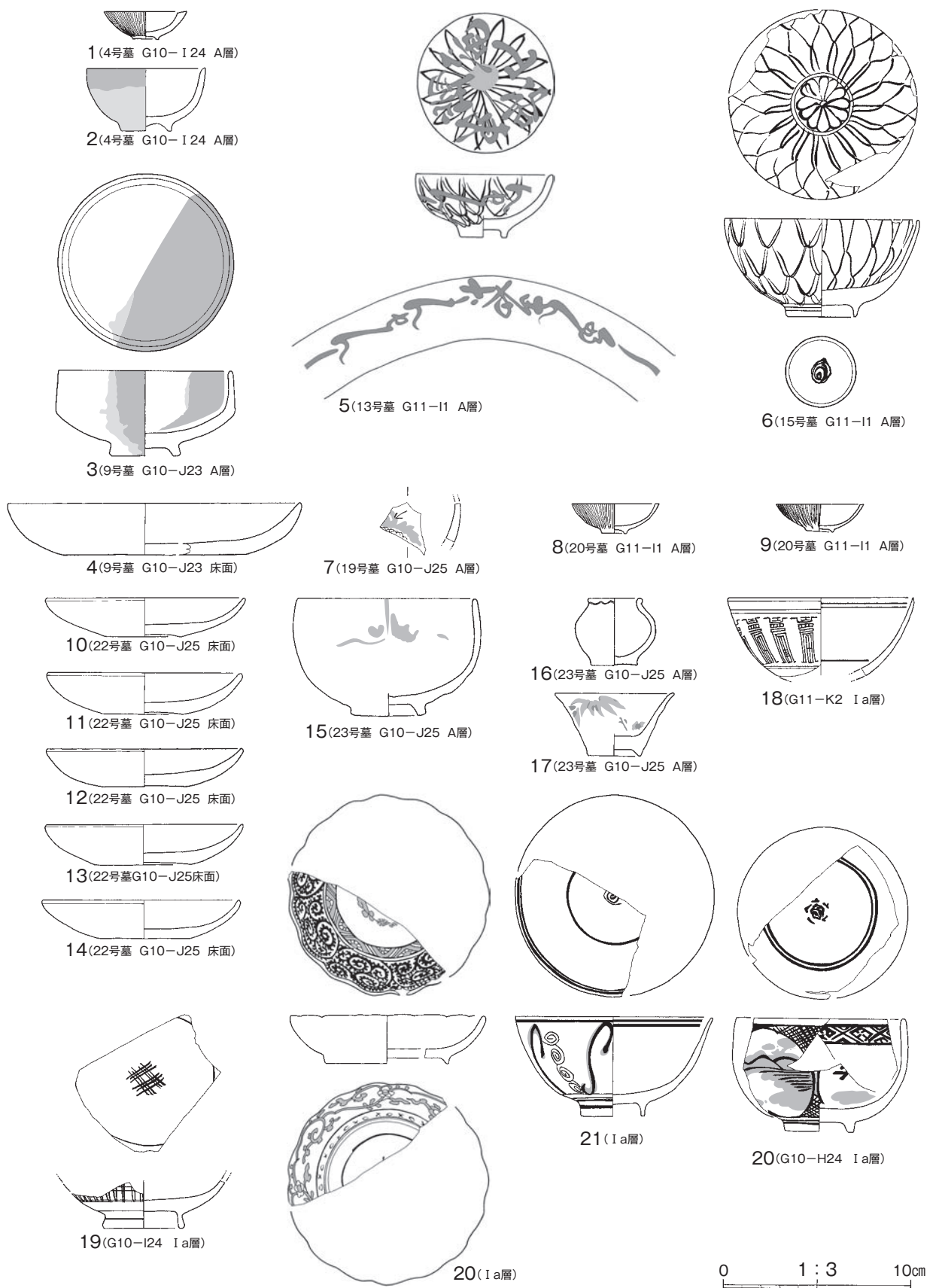
**煙 管 (第 64 図)** 1～11 はすべて銅製の羅宇煙管である。9 以外は全て小口に羅宇が残存している。1 は雁首の首部に、魚子地に「石持地抜き三本蕨」、「丸に三つ引き」の家紋が彫金され、魚子地には漆のような塗料が塗布されている。吸口は長く、蔓柏文様が彫金されている。2 は雁首の火皿が欠損し、首部に膨らみを持ち肩に細かい条痕が施されている。3 は雁首、吸口両方に断面六角形の肩を持ち、火皿の付け根に補強帯、左側縁には火皿窓がある。4 は雁首、吸口に段差が滑らかな肩を持ち、輪刻線が施される。5 は火皿が欠損する。6 は雁首のみで、脂返しから火皿にかけて布が付着している。7 は全体に緑青による腐食が激しい。8 は羅宇が折れずに残存している完形品である。雁首の肩に篆刻で文様が施されている。9・10 は吸口のみで、10 は肩に輪刻線が施され段差は滑らかである。11 は火皿がやや大振りである。

**鏡ほか (第 65 図)** 1 は銅製の柄鏡である。直径 8.3cm、柄長 5.8cm、柄幅 1.4cm をはかる。裏面には唐草地に桔梗紋が施され、「藤原光永」と銘がある。両面の一部に布が付着している。2 は銅製の円形鏡である。直径 3.9cm をはかる。3・4 はガラス製鏡である。両方とも若干の曲面を呈し、凹み面に反射材の名残と思われる塗料が付着している。

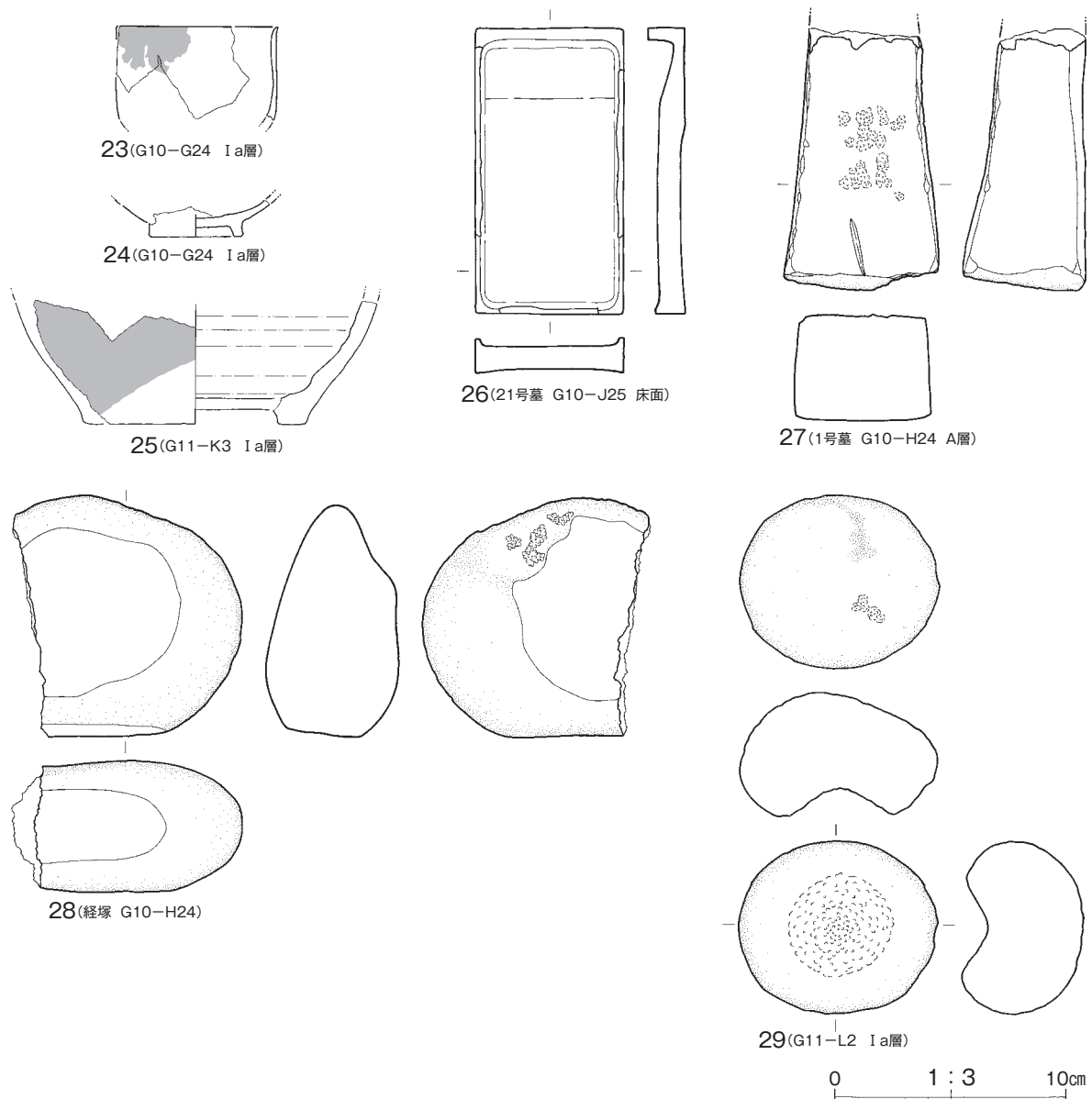
5 は銅製の胴長の延板に二つ丸鉞が付いた銅製の金具である。6 は銅製のピラカンまたはチリカンの一部と考えられる。薄板部分に桜紋が刻印され、二又の銅線から延びる花卉様飾と付け根部分に、青緑色のガラス玉が装着されている。7 は水晶製の数珠玉である。縦と横から穿孔され、中央で直交しているが、横軸の穴は貫通していない。

**古銭 (第 66～68 図)** 出土した古銭のほとんどは寛永通宝である。寛永通宝の銅一文銭は、鑄造年代が文字の形態によって判明しており、1 期古寛永、2 期新寛永(文銭)、3 期新寛永と大きく 3 つに区分される(『近世の出土銭Ⅱ一分類図版編一』 兵庫埋蔵銭調査会)。





第 62 图 土坑墓·遺構外出土遺物 (1)



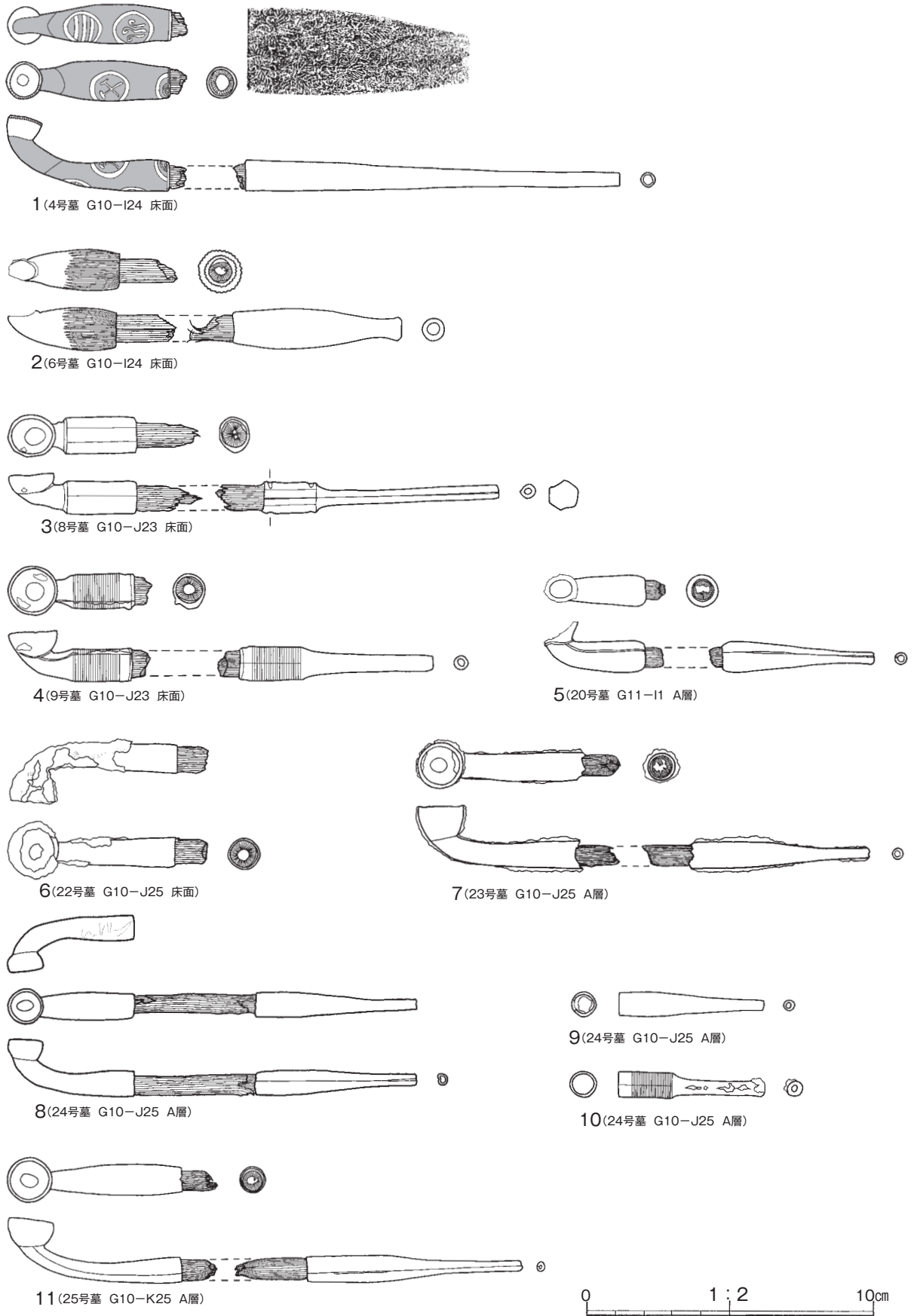
第63図 土坑墓・遺構外出土遺物（2）

1・3・12・14・15・19・24・25・35・50・51・52・63・72は1期の古寛永である。

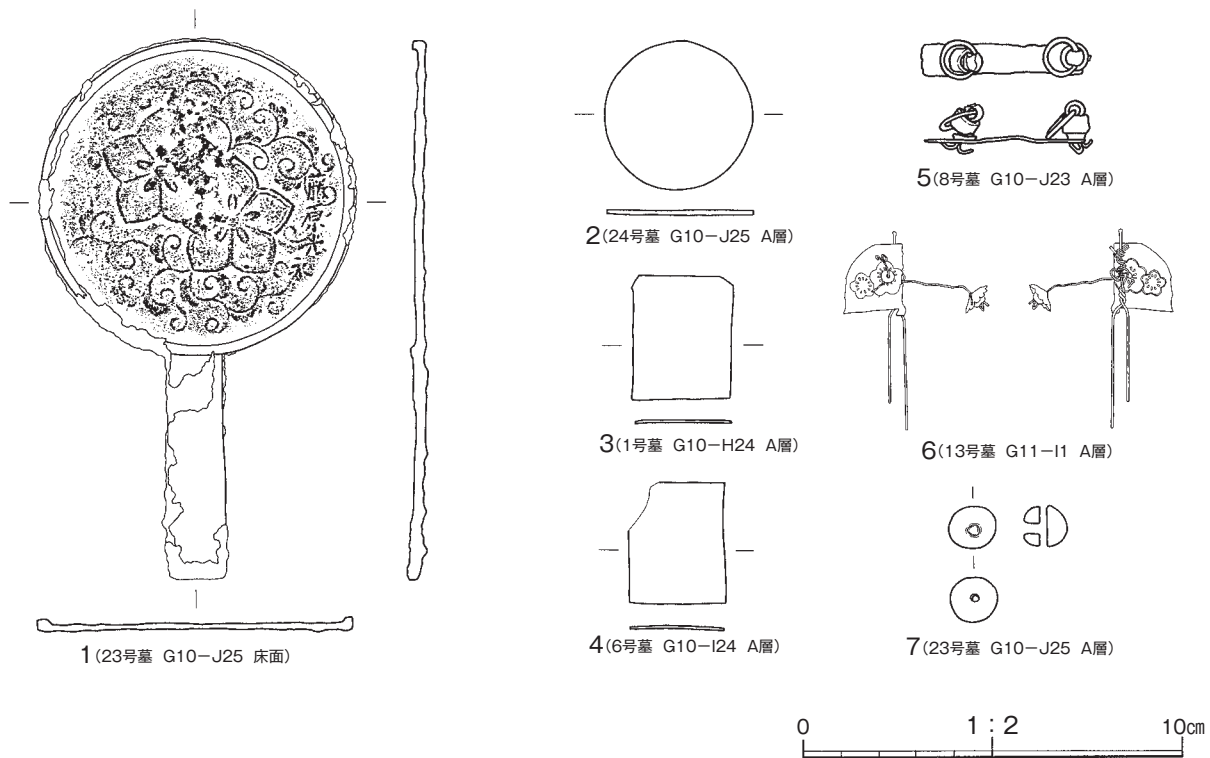
7・21・22・29・31・32・60・62・67・73・75・77は「文銭」と呼ばれ、背面上部に「文」の字を鋳出している2期の新寛永である。上記以外の寛永通宝はすべて3期の新寛永に属する。43・44は背面同士で癒着しており、分離させることが困難であったため、表面のみ掲載した。78・79は3期新寛永であるが背面上部にそれぞれ「小」、「足」の字が鋳出されている。

8号墓出土の20は永樂通宝である。71は経塚盛土層から出土した皇宗通宝であるが、かなり摩滅している。

一字一石経（第69図） 土坑墓および表土（Ia層）からは3,374点の一字一石経が出土している。その内訳は1号墓354点、2号墓58点、4号墓107点、5号墓20点、6号墓314点、8号墓319点、9号墓1,907点、10号墓288点、11号墓2点、Ia層4点である。そのうち判読および墨痕の認められる経石は22点のみであった。



第 64 图 土坑墓出土烟管



第 65 図 土坑墓出土遺物

経石の文字 1は墨痕のみで判読不能。2は「於」、「於」の異体字。3は「入」。4は「何」もしくは「向」か。5は「時」か。6は「過」、「過」の異体字。7・8は墨痕のみで判読不可。9は「尔」、「爾」の異体字。10は「過」、「過」の異体字。11は「入」あるいは「人」か。12は「便」。13は「隣」の異体字である「鄰」か。14は「令」の下部か。15は「服」。16は「中」か。17は「才」か。18は「誦」か。19は「微」か。20は「億」。21は「名」もしくは「谷」か。22は「辞」。

続縄文土器 (第70図 1～18) 1～18は続縄文(後北 C2-D 式)と考えられる土器である。1は微隆起線で区画された帯縄文と、刺突列によって施文された波状口縁を呈する深鉢である。口唇部に刻目が施された微隆起線を巡らし、波頂部より二条の微隆起線を垂下させ体部で微隆起線によって区画された弧状の帯縄文と連結する。体部下半はその弧状帯縄文から垂下する微隆起線に挟まれた、帯縄文と三角形刺突列が交互に施される。2～5は縦横に微隆起線および帯縄文を施す深鉢体部片である。6～16は帯縄文を施す深鉢体部片である。17・18は帯縄文を施す底部片である。

弥生土器 (第70図 19～24) 19・20は付加条縄文と交互刺突を施す甕の口縁部である。21～23は付加条縄文を施す甕体部である。24は無文部である。



1 (2号墓 G10-H24 床面)



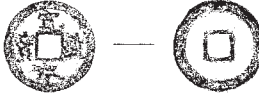
2 (2号墓 G10-H24 床面)



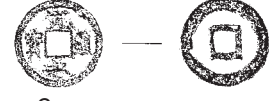
3 (2号墓 G10-H24 床面)



4 (2号墓 G10-H24 床面)



5 (2号墓 G10-H24 床面)



6 (2号墓 G10-H24 床面)



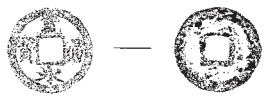
7 (4号墓 G10-I24 床面)



8 (4号墓 G10-I24 床面)



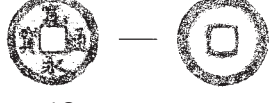
9 (4号墓 G10-I24 床面)



10 (5号墓 G10-I24 床面)



11 (6号墓 G10-I24 床面)



12 (6号墓 G10-I24 床面)



13 (6号墓 G10-I24 床面)



14 (7号墓 G10-I24 床面)



15 (7号墓 G10-I24 床面)



16 (7号墓 G10-I24 床面)



17 (7号墓 G10-I24 床面)



18 (2号墓 G10-I24 床面)



19 (7号墓 G10-I24 床面)



20 (8号墓 G10-J23 A层)



21 (9号墓 G10-J23 床面)



22 (9号墓 G10-J23 床面)



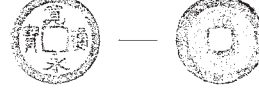
23 (9号墓 G10-J23 床面)



24 (9号墓 G10-J23 床面)



25 (21号墓 G10-J25 床面)



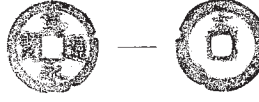
26 (21号墓 G10-J25 床面)



27 (21号墓 G10-J25 床面)



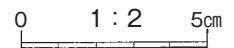
28 (21号墓 G10-J25 床面)



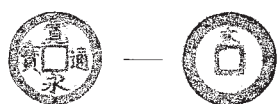
29 (21号墓 G10-J25 床面)



30 (21号墓 G10-J25 床面)



第 66 图 土坑墓出土古钱 (1)



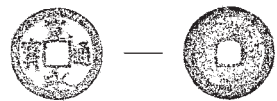
31(22号墓 G10-J25 床面)



32(22号墓 G10-J25 床面)



33(22号墓 G10-J25 床面)



34(22号墓 G10-J25 床面)



35(22号墓 G10-J25 床面)



36(22号墓 G10-J25 床面)



37(22号墓 G10-J25 床面)



38(22号墓 G10-J25 床面)



39(22号墓 G10-J25 床面)



40(22号墓 G10-J25 床面)



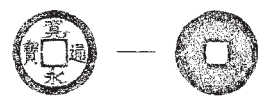
41(22号墓 G10-J25 床面)



42(22号墓 G10-J25 床面)



43·44(22号墓 G10-J25 床面)



45(22号墓 G10-J25 A層)



46(22号墓 G10-J25 床面)



47(22号墓 G10-J25 床面)



48(22号墓 G10-J25 床面)



49(22号墓 G10-J25 床面)



50(22号墓 G10-J25 床面)



51(22号墓 G10-J25 床面)



52(22号墓 G10-J25 床面)



53(22号墓 G10-J25 床面)



54(22号墓 G10-J25 床面)



55(22号墓 G10-J25 床面)



56(22号墓 G10-J25 床面)



57(22号墓 G10-J25 床面)



58(22号墓 G10-J25 床面)



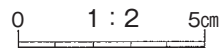
59(22号墓 G10-J25 床面)



60(22号墓 G10-J25 床面)



61(22号墓 G10-J25 床面)



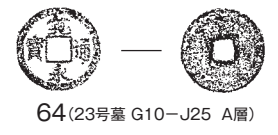
第 67 图 土坑墓出土古钱 (2)



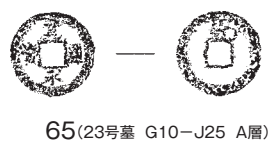
62(22号墓 G10-J25 床面)



63(23号墓 G10-J25 A層)



64(23号墓 G10-J25 A層)



65(23号墓 G10-J25 A層)



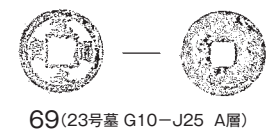
66(23号墓 G10-J25 A層)



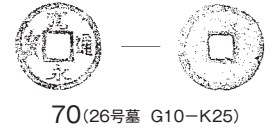
67(23号墓 G10-J25)



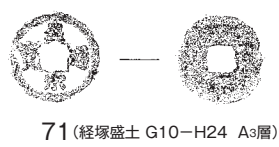
68(23号墓 G10-J25 A層)



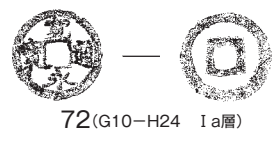
69(23号墓 G10-J25 A層)



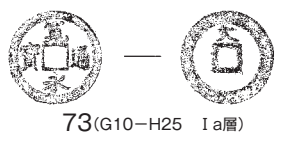
70(26号墓 G10-K25)



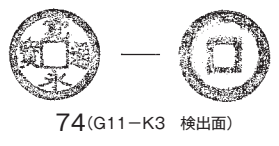
71(経塚盛土 G10-H24 Aa層)



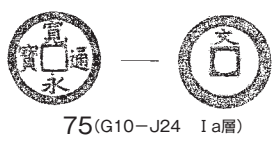
72(G10-H24 Ia層)



73(G10-H25 Ia層)



74(G11-K3 検出面)



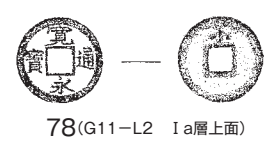
75(G10-J24 Ia層)



76(G11-K1 Ia層)



77(G11-K3 Ia層)



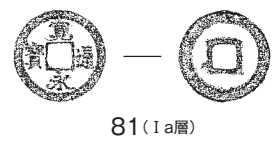
78(G11-L2 Ia層上面)



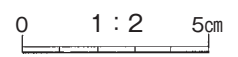
79(G11-L2 Ia層上面)



80(経塚 西斜面部 Ia層)



81(Ia層)



第 68 図 土坑墓・経塚盛土・遺構外出土古銭



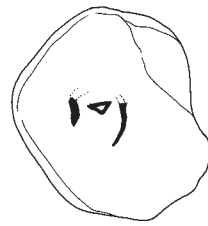
1(1号墓 G10-H24 A層)



2(1号墓 G10-H24 A層)



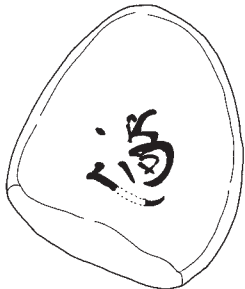
3(2号墓 G10-H24 A層)



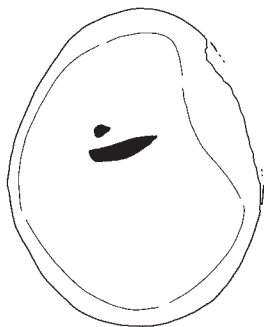
4(1号墓 G10-H23 A層)



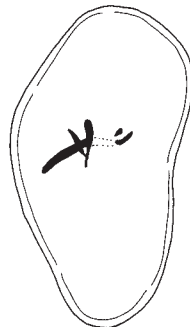
5(8号墓 G10-J23 A層)



6(8号墓 G10-J23 A層)



7(9号墓 G10-J23 A層)



8(9号墓 G10-J23 A層)



9(9号墓 G10-J23 A層)



10(9号墓 G10-J23 A層)



11(9号墓 G10-J23 A層)



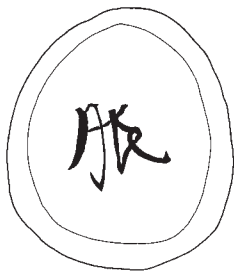
12(9号墓 G10-J23 A層)



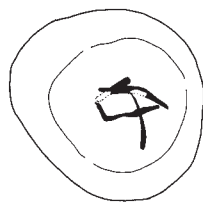
13(9号墓 G10-J23 A層)



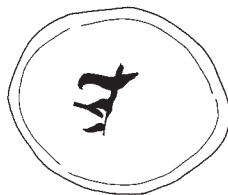
14(9号墓 G10-J23 A層)



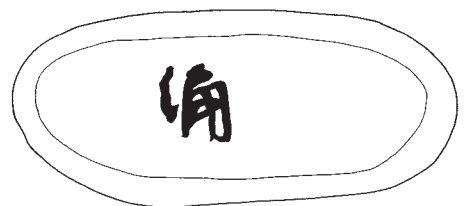
15(10号墓 G10-J23 A層)



16(10号墓 G10-J23 A層)



17(11号墓 G10-J24 A層)



18(11号墓 G10-J23 A層)



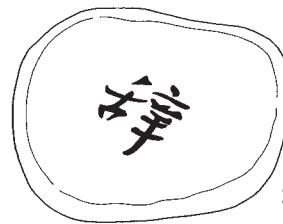
19(G10-G25 Ia層)



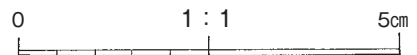
20(G10-I22 Ia層)



21(G10-F25 Ia層)

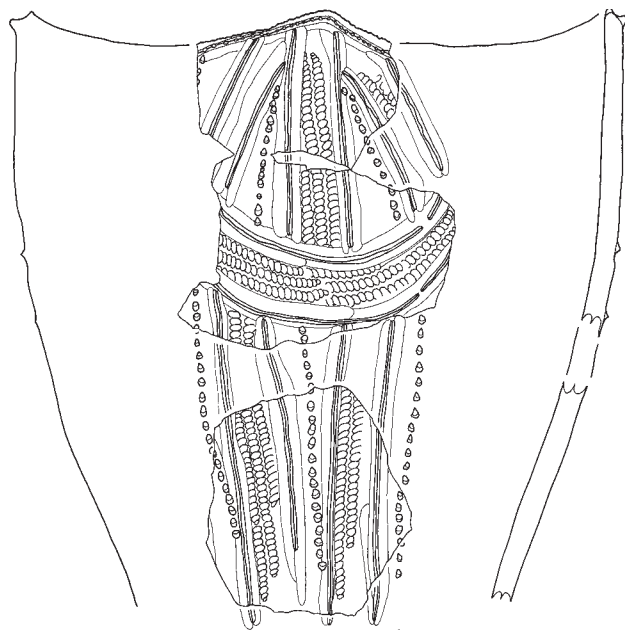


22(G10-I23 Ia層)

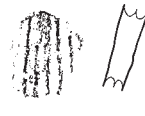
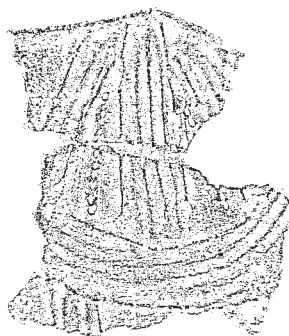


第 69 図 土坑墓・遺構外出土経石

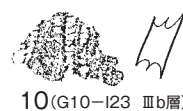
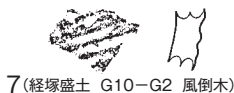




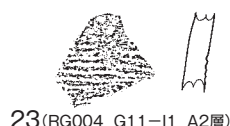
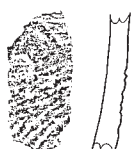
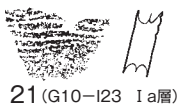
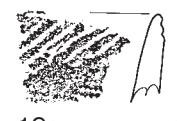
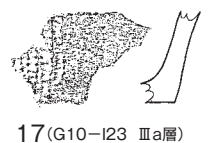
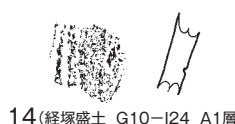
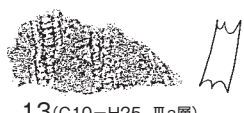
1 (G10-H24 IIIa層)



2 (経塚盛土 G10-I23 A3層)



11 (経塚盛土 G10-I23 A3層)

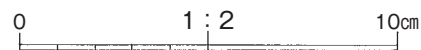


21 (G10-I23 Ia層)

22 (経塚盛土 G10-H25 A3層)

23 (RG004 G11-I1 A2層)

24 (経塚盛土 G10-I25 A1層)



第70図 包含層出土遺物

### Ⅲ. 総括

平成 18・19 年の 2 ヶ年にわたる調査の結果、岩手県内でも事例のない多字一石経を埋納した中世の経塚 1 基、近世の土坑墓 27 基等を確認した。以下、経塚、礫石経、近世墓について考察を行い総括とする。

#### (1). 経塚

**経塚の形態** 宿田南経塚は、墳丘（盛土層）構築後に土坑を穿ち、経石を埋納する形態であり、松原典明氏の分類するところのⅡB類となる（松原 1994）。しかし、墳丘は大部分が削られて原形が方形なのか円形なのかは不明である。また、墳丘南東の溝跡が、経塚に伴う周溝であるならば中世墳墓に共通する形態であり、時期決定の補完要因となり得るが、調査段階で墳丘に伴うものであるかは判別し難かった。

主体部となる土坑の規模は一辺約 3.4 m・深さ約 1.0 mをはかり、他の事例を見ると一辺 1 m前後のものが多く、本経塚はかなり大型の部類になる。しかし、これらの経塚の大半は一字一石経を伴うもので、多字石経が容積の多数を占める本経塚とは単純に比較することはできず、多字と一字で分けて考える必要がある。

土坑中央の段差の埋土は底面直上の埋土と同様、地山黄褐色土を含むしまりのある暗褐色土が堆積している。土坑底面にピットあるいは周溝が掘り込まれている事例はあるが、段差もしくは溝状のものが掘り込まれた例は類例がなく、用途は不明である。

**埋経の手順** 埋経の手順は、床面に経典が書写された経石を敷き詰め、その直上、土坑中央部に梵字を書写した経石を含む小礫をマウンド状に積み上げる。そして、そのマウンドを覆うように、再度、経典が書写された経石を詰め込んでいる。経石を詰め込む際には、東側から順に並べている。また、経石の中には、規則的な剥離痕が残されたものが多数含まれている。経典が書写された経石にも、この剥離痕が認められるものがあり、書写した経文を壊して剥離していることから、予め打ち欠いた礫に書写したのではなく、書写してから打ち欠いたと考えられる。

他の経塚の調査事例で、経石の並べ方や詰め込み方を言及した報告が少ないため、本経塚の事例が一般的なものなのか、特殊なものかは判断できないが、経塚造営については一定のきまりが存在するようであり、これらの手順もなんらかの仏教的儀礼に則り行われた結果と考えるべきであろう。

#### (2) 礫石経

**書写内容** 本経塚で墨痕あるいは文字が確認された礫は 186 点である。その書写内容の内訳は、妙法蓮華経が 29 点、金剛経が 3 点、梵字が 77 点、不明が 77 点である。経文が書写されたものは、全て多字一石経である。梵字は、一字の礫もあるが、大半は複数の梵字が書写されている。

**妙法蓮華経** 妙法蓮華経八卷二十八品のうち、序品第一、方便品第二、譬喻品第三、信解品第四、化城喻

品第七、見寶塔品第十一、提婆達多品第十二、勸持品第十三、安樂行品第十四、從地涌出品第十五、分別功德品第十七、隨喜功德品第十八、不輕菩薩品第二十、如來神力品第二十一、囑累品第二十二、藥王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四、陀羅尼品第二十六、妙莊嚴王本事品第二十七、普賢菩薩勸發品第二十八の二十品が確認できる。

所々、抜けている部分はあるものの、当初は二十八品すべてが書写されたものと考えられる。

**金剛經** 金剛經は、三十二分の区分が記されている。鳩摩羅什訳と考えられる。

**梵字** 梵字は、**𑖀**(バン：大日如来)、**𑖄**(ウン：阿闍如来)、**𑖇**(タラク：宝生如来)、**𑖉**(キリーク：阿弥陀如来)、**𑖊**(アク：不空成就如来)の種子と、これら五仏を組み合わせた金剛界五仏がある。金剛界五仏は西を上とし、中心に**𑖀**、西に**𑖉**、北に**𑖊**、東に**𑖄**、南に**𑖇**を配置し、梵字で描く曼荼羅、所謂「種子曼荼羅」を書写している。

**書写方法** 妙法蓮華經を書写した経石は、ほとんどが扁平な礫であるが、一部に丸みを帯びたものや厚みのあるものも存在する(No.144・156・111・170・77など)。書写方法の基本は、礫の最も平らな面を選び、縦書きで礫の右から左方向へ記していき、表から裏へと連続している。表裏ともに鮮明に経文が残っているものは少なく、大半は片面のみに残存している。これは、経石の出土状況が、墨書の薄い、または残っていない面が上向きであったことから、経塚に染み込んだ雨水の影響と考えられる。

また、品と品の間は、礫を取り替えることなく連続して記している。例えば、No.157は面1の真ん中付近で勸持品が終わり、続けて安樂行品の品題を記して冒頭から書写を続けている。No.135も同様で、囑累品から藥王菩薩本事品へと続けて記している。No.101は、面2の冒頭部分で陀羅尼品から莊嚴王本事品へと続けている。いずれの場合も、品題と本文の間は行を変えることなく続けて書写しているが、品と品の間は改行をして書写を行っている。

表裏の平らな面だけではなく、側面等も利用して書写する特殊な例もある。特殊な書写方法の経石は、No.130・104・157の例が挙げられる。

No.130は、面1(表右側面)→面2(表面)→面3(表左側面)→90度回転させて面4(裏左側面)→面5(裏面)と記している。

No.104、は序品第一が書写されているが、途中から提婆達多品第十二に変わっている。面1(表右側面)序品第一→面2(表面)提婆達多品第十二→面3(表左側面)→90度回転させて面4(裏下面)→面5(裏面)と記している。

No.157は、面1に書写後、180度上下を回転させて面2に記している。

金剛經の書写方法も妙法蓮華經と基本的に同じであるが、No.6は面1から面2へ90度回転させて記している。

梵字が書写された経石は円形で扁平な礫が多く、中には丸みをもったものも多数見られる。ほとんどの礫は片面、あるいは両面に書写されているが、中にはNo.40・110・126のように3面に書写しているものもある。金剛界五仏が書写された経石は、形や大きさ、厚みにいたるまで近似した礫を使用している。

**筆跡** 本経塚で出土した経石には、複数の異なる筆跡が観察でき、これらは大きくA～Eの5タイプに分けることができる。A：細い線で一画一画の間が離れて、略されている部分が多く、筆勢が速い印象を受けるもの。B：細く小さいが一つ一つ丁寧に書いている印象を受けるもの。

C：行書のように字体が崩れており、字間も狭く、一字を見出すのが困難なもの。D：Aと印象が似ているが、一画一画の線が太いもの。E：いずれの筆跡よりも太く大きく、一画一画略さずに書写しているもの。A～Dの筆跡に共通していることは、字が全て右下がりです記調な点である。

数量的にはAが最も多く、No.13・43・104・101・130・135などが挙げられる。Bは、No.10・126である。Cは、No.31・60・144などであり、判読できなかった経石はこのタイプが多かった。Dは、No.55・95・153・157などが挙げられる。Eは、No.6・34・124と金剛経のみに見られる筆跡である。

AとDが同じ人物の筆跡である可能性を考慮すると、妙法蓮華経が3～4人、金剛経で1人の筆者がいたと推定される。

梵字にも、異なる筆跡が複数存在する。種子のみの経石には、線が太く空点や莊嚴点の入りか雑で書き慣れていない印象を受けるものと、流暢に流れるように書き慣れているものが混在している。金剛界五仏の経石は、すべて細字で流れるように達筆で書き慣れている筆跡である。また、金剛界五仏のバンとウーンはすべて空点と莊嚴点が省略されている。筆跡の違いから、種子は4～5人、金剛界五仏は1人の筆者がいたと推定される。しかし、経典と梵字それぞれの筆者が同一人物であるかは、現段階では分析が至らず不明である。

**書写経典の数** 経石文の中には、別々の経石で同じ経文が重複している部分がある。例を挙げると、序品第一が記されたNo.10面1とNo.130面2、No.104面1とNo.142面1が、それぞれ同じ箇所を重複して書写している。また、化城喻品第七のNo.55とNo.74、陀羅尼品第二十六のNo.101とNo.170もそれぞれ重複している箇所がある。No.104と142は筆跡が類似しているが、No.10とNo.130は明らかに筆跡が異なり、筆者はそれぞれ別な人物であると考えられる。

これらのことから、複数の人物が妙法蓮華経八卷二十八品を、それぞれ二部以上書写していたと考えられる。4人の筆者が存在していたとするならば、8部以上の妙法蓮華経が埋経されていたことになる。

### (3) 近 世 墓

土坑墓からは、陶磁器、寛永通宝、煙管など多数の副葬品が出土しており、それらの時期を基に埋葬時期を考えてみる。

**陶磁器類** 陶磁器類は、瀬戸美濃、肥前、相馬など多岐にわたるが、突出して古いものはなく、概ね18～19世紀の範疇に入るものである。器種も紅皿、猪口、小坏、小壺、碗など日常雑器が主体となっており、被葬者が生前に愛用していたものを一緒に埋葬したと考えられる。

その中でも、特筆すべきものは、13号墓から出土した文字が絵付けされた、19世紀初頭の瀬戸美濃の小杯である(第62図5)。内面の文字は「洛東瑞竜山」と記されており、「洛東」は京の都の東側を指し、「瑞竜山」とは、その洛東に建つ臨濟宗南禅寺派大本山の「南禅寺」の山号である。では、外面の「なんぜんじたんごや」は何を意味するのか。元治元年(1864)に刊行された、当時の京の都の名所を紹介する『花洛名勝図会』を見ると、南禅寺の総門前に「丹後屋」という名の湯豆腐店が描かれている。また、寛政11年(1799)に刊行された『都林泉

名勝図会』にも「名物 南禅寺前 湯豆腐店」とあり、店の軒先に「丹後屋」の暖簾が掛かった風景が紹介されている。すなわち、「なんぜんじたんごや」とは、この南禅寺前の湯豆腐店「丹後屋」を指していると推測される。13号墓の被葬者は、生前、京の都に寺社参りした際に「丹後屋」に立ち寄ったか、あるいはどこかで店の宣伝として配られていたこの小杯を手に入れたものと考えられる。ちなみにこの「丹後屋」は、「奥丹」という名で現在も、南禅寺前で営業している。

**寛永通宝** 寛永通宝が出土している墓は、一部に古寛永を含むものもあるが、全てに新寛永が伴っている。また、寛永通宝が出土していない墓もあるが、新旧関係から全て新寛永を副葬した墓よりも新しく掘り込まれたものである。新寛永の初鑄年は元禄10年（1697）である。

**煙管** 煙管は、古泉弘氏が雁首と吸口の形態により、Ⅰ～Ⅵ期に分類しており（古泉2001）、今回の調査で出土した煙管は、雁首の脂返しの湾曲が小さくなるⅤ期に相当し、18世紀末～19世紀以降のものと考えられる。

**鏡** 鏡は、銅製の所謂「和鏡」とガラス製の二種類が出土している。23号墓出土の柄鏡は、背面に桔梗文と「藤原光永」の鏡師銘があり、県内でも岩脇遺跡や河崎の柵疑定地でも同様の鏡が出土している（岩埋文235・474集）。『鏡師名寄』によると、「藤原光永」は江戸時代中期～後期に使用された鏡師の雅号とある（中野1969）。

ガラス製鏡は国産の粗製品と考えられる。国内のガラス製鏡の生産は18世紀末に始まり、19世紀半ばには庶民に重宝されていたとされる。市内の発掘調査でガラス製鏡が確認されたのは、今回が初めてで、当時の庶民の生活を知る上で貴重な資料である。

**一字一石経** 土坑墓および表土から出土した墨痕が認められる経石は22点を数え、判別できるものは、すべて漢字が書写されていた。多字一石経と同様に、判読できた文字を「大正新脩大藏経テキストデータベース」で検索したところ、妙法蓮華経の中に含まれている文字であることが分かった。しかし、土坑墓から出土した経石の総点数は3,400点あまりで、土坑墓単体では1,000点も出土していないのがほとんどである。おそらく、妙法蓮華経八卷二十八品のうちの一部を書写したものである可能性が高い。

**埋経の意味** 近世の経塚造営の目的は専ら、先祖供養・子孫繁栄・五穀豊穡・村内安全などの現世利益的な性格が強くなる。盛岡市内では永祥院経塚（盛岡市教委1985）が調査されているが、法名を記した多字石が多いことから追善供養の目的で造営されたと考えられる。今回、宿田南遺跡で出土した一字一石経は、経典・願文等は明らかでないが、土坑墓にともなうものであることから、被葬者への追善供養として行われた埋経であったと考えられる。

**土坑墓の年代** 出土した遺物、特に煙管やガラス鏡などから土坑墓の年代を考えると、18世紀末～19世紀半ばと、江戸時代でもかなり後半の時期と推定される。

#### （4）遺物包含層

**続縄文土器** 経塚盛土直下で確認された黒色土層からは、続縄文土器の破片が出土している。出土した土器は、口唇部に刻目を加えた微隆起線を巡らし、体部上半は微隆起線に挟まれた帯縄文が縦位あるいは弧状に組み合い、三角形刺突列が施文されるものである。市内では安倍館遺跡や永福寺山

遺跡で同様の土器が出土しており、後北C 2-D式期中段階に位置づけている（盛岡市教委 1997・1999）。また、本遺跡の北方に位置する宿田遺跡では、北大I式期の続縄文土器や古式土師器、黒曜石製拇指状搔器が出土している（盛岡市教委 2002）。

## （5）ま と め

今回の調査で発見された宿田南経塚は、多くの多字一石経と梵字が書写された経石が納められた礫石経塚である。また、岩手県内外において数少ない本格的な礫石経塚の発掘調査であり、多くの貴重な資料を得ることができた。

しかし、残念ながら経塚の半分以上が後世の削平を受けていたことも関係し、経塚造営の願文・願主、あるいは記年銘が記された経碑や礫は出土しなかった。また、造営時期を推定できる陶磁器等の遺物も出土していないため、年代決定は困難と言わざるを得ない。唯一の出土遺物は「皇宗通宝」であるが、流通年代の幅が広く、やはり時期決定の決め手とはなり得ない。ただし、初鑄年が1038年であることから11世紀より以前には遡らないことは確かである。

そこで、経典と梵字の種類・書風など、状況証拠的なもので造営の目的や年代を推測し、本報告のまとめとしたい。

経塚に納められる書写経典として、各時代を通して主体的な位置を占めるものは、妙法蓮華経であることは、先学の事例から周知のことである。しかし、妙法蓮華経は特定宗派に限定されず幅広く用いられる経典であり、逆に言えば、妙法蓮華経だけでは目的や時代を特定するのは難しいと言える。本経塚からは妙法蓮華経以外に、数多くの梵字が書写されたものと、数は少ないが金剛経が書写されたものが出土している。

妙法蓮華経に共通する書風は、右肩下がりで、編・旁といった部首が大部分、略されて書写されている点である。国際仏教学大学院大学教授の落合 俊典氏からのご教示によると、通常、写経を行う場合は手本を見ながら一字一句、略することなく書写されるという。また、この妙法蓮華経の書風は、鎌倉時代中期～後期の書風に相当するとのこと、ご教示を頂いている。

梵字を用いる宗派としては真言宗と、密教も教義に取り入れている天台宗が挙げられる。しかしながら、妙法蓮華経との組み合わせを考えた場合、大日経や金剛頂経を基本的な経典とする真言宗よりも、妙法蓮華経を基本教義としている天台宗、とりわけ台密（天台密教）との関連性が強いと考えられる。

また、金剛経は中国禅宗の六祖恵能大師との関わりから、日本の禅宗においてもよく用いられる経典である。禅宗は、平安時代にはすでに日本に伝えられているが、盛行するのは栄西、道元といった今日の禅宗諸派を開いた禅僧が活躍し始める鎌倉時代以降である。また、同時に金剛経の書写功德も盛んに行われるようになり、幕府成立以降、貴族階級に代わり台頭してきた武士階級が禅宗を支持し始めた時代でもある。

本経塚は、経碑や願文を記した礫などが出土していないため、造営の目的が明らかではない。しかし、梵字が書写された経石の中に、唯一、願意が窺えるものがある。それは金剛界五仏が四方ではなく、縦に書写されたNo. 5の経石である（第51図）。梵字の裏面に「南无大日如来」と記されている。「南无（無）」はサンスクリット語のナマス（namas）を漢訳したもので、帰

依という意味である。すなわち、大日如来に帰依するという願文と捉えることができる。また、梵字の中では、𑖀 (バン：大日如来) を書写したものが最も多い。それらを主体部土坑の中心に埋経していることから、経塚造営の背景に大日如来供養との関わりが想定される。

上記の点をふまえると、本経塚は納められた經典内容から天台宗との関連が推定され、中でも大日如来供養を主とした願意で造営されたと考えられる。また、金剛経が用いられていることと、經典の書風から、造営年代は鎌倉時代中期以降と推定される。

以上、本経塚の造営目的・年代を推定することはできたが、願主や写経と埋経儀礼を執り行った仏教集団については不明なままであり、課題を残すところである。しかし、本経塚から出土した礫石経は、岩手県はもとより全国的にも類例の少ないものであり、今後の経塚研究の布石としたい。

#### 【引用・参考文献】(発掘調査報告書以外)

- 相原康二 2009 「岩手県出土の鏡鑑類について」『紀要X XVIII』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
今泉淑夫編 1999 『日本仏教史辞典』吉川弘文館  
金子佐知子 2000 「前沢町寺ノ上経塚出土のかわらけ経」『岩手考古学』第12号 岩手考古学会  
川勝政太郎 1944 『梵字講話』一條書房  
川崎利夫 1997 「天童市高野坊遺跡出土の墨書礫」『考古学ジャーナル』No.412  
川又隆央 2005 「宮城県の礫石経塚」『宮城考古学』第7号 宮城考古学会  
古泉 弘 2001 「江戸の生活文化 2 喫煙」『図説 江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会[編] 柏書房  
古泉 弘 1985 「江戸の街の出土遺物」『特集 江戸時代を掘る』季刊考古学 第13号  
斉藤忠編 1987 「墳墓と経塚」『日本考古学論集6』吉川弘文館  
坂詰秀一編 2003 『仏教考古学事典』(株)雄山閣  
種智院大学密教学会編 1983 『梵字大鑑』名著普及会  
関根達人 2002 「死者を映した鏡」『人文社会論叢』人文科学編第7号 弘前大学人文学部  
総合仏教大辞典編集委員会 2005 『総合仏教大辞典』法蔵館  
田上太秀ほか 2008 『禅の思想辞典』東京書籍  
中野政樹 1969 『和鏡』日本の美術 10・11 No.42 至文堂  
永井久美男編 1998 『近世の出土銭Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会  
丹羽基二 1971 『家紋大図鑑』秋田書房  
船場昌子 2002 a 「中世における礫石経の諸相」『立正史学』第92号  
船場昌子 2002b 「やぐらの埋葬と供養」『かながわの考古学』研究紀要7 財団法人かながわ考古学財団  
松原典明 1994 「礫石経研究序説」『考古学論究』第3号 立正大学考古学会  
吉田義昭 1960 「盛岡市狐野原一字一石経塚」『奥羽史談』第27号  
立正大学考古学会 1994 「特集・礫石経の世界」『考古学論究』第3号

【引用・参考文献】（発掘調査報告書）

- 青森県教育委員会 2002 『畑内遺跡』第326集
- 尼崎市教育委員会 2005 『大物遺跡第一次調査概要 その5』尼崎市埋蔵文化財調査年報平成7年度（6）
- 飯田市教育委員会 1995 『経塚原遺跡』
- いわき市教育委員会 1998 『上野原経塚』いわき市埋蔵文化財調査報告書第55冊
- 岩手県教育委員会 1980 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VI』岩手県文化財調査報告書第50集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『岩脇遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第235集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 『志羅山遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第352集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 『河崎の柵想定地発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008 『飯岡才川遺跡第7・13次・細谷地遺跡第12次・矢盛遺跡第9次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第508集
- 岩沼市教育委員会 2005 『長徳寺前遺跡』岩沼市文化調査報告書第5集
- 財団法人かながわ考古学財団 2001 『山王堂東谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告117
- 新善光寺跡内やぐら発掘調査団 1988 『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』
- 白鷹町教育委員会 1988 『笠松山遺跡』
- 下諏訪町教育委員会 1990 『殿村・東照寺址遺跡』
- 玉山村教育委員会 1997 『一字一石一礼塔』玉山村文化財調査報告書第16集
- 津市教育委員会 2007 『中山下経塚発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告書5
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1998 『馬場崎経塚調査報告書』
- 名取市教育委員会 1988 『大門山遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第22集
- 新潟県教育委員会 2000 『裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集
- 盛岡市教育委員会 1985 『盛岡市埋蔵文化財年報』—昭和55～58年度—
- 盛岡市教育委員会 1997 『永福寺山遺跡』—昭和40・41年発掘調査報告書—
- 盛岡市教育委員会 1999 『安倍館遺跡』—厨川城の調査—
- 盛岡市教育委員会 2002 『盛岡市内遺跡群』—平成13年度発掘調査概報
- 利府町教育委員会 1978 『菅谷道安寺横穴群』利府町文化財調査報告書第2集



# 写真図版





経塚遠景（西から）



経塚全景（西から）



経塚主体部土坑内部



経塚主体部および盛土完掘状況（北西から）



主体部土坑 礫出土状況 (L=-0.5m)



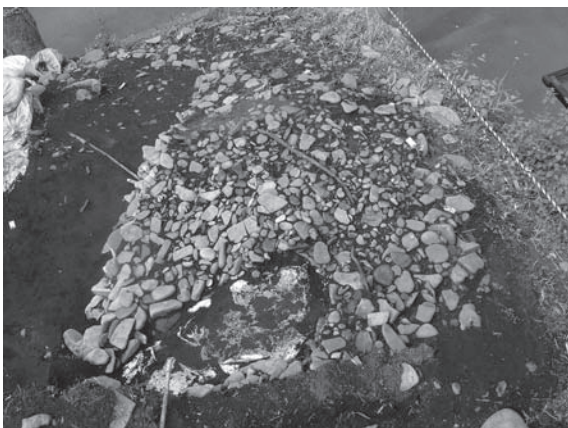
礫詰み方状況 (L=-0.5m)



主体部土坑 礫出土状況 (L=-0.6m)



礫詰み方状況 (L=-0.6m)



主体部土坑 礫出土状況 (L=-0.7m)



礫詰み方状況 (L=-0.7m)

第4図版



主体部土坑 礫出土状況 (L=-0.8m)



礫詰み方状況 (L=-0.8m)



主体部土坑 礫出土状況 (L=-0.9m)



礫詰み方状況 (L=-0.9m)



主体部土坑 礫出土状況 (L=-1.1m)



主体部土坑 完掘状況



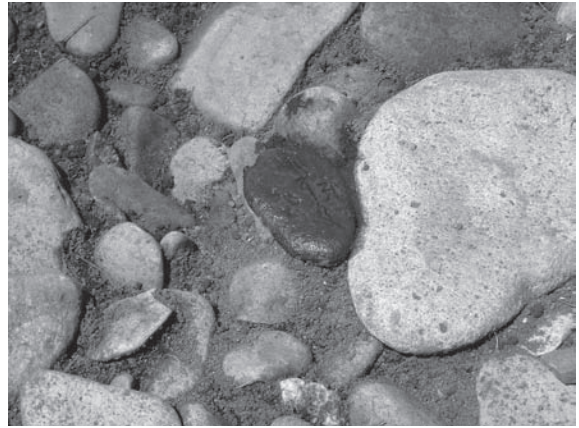
経石10出土状況



経石14出土状況



経石34出土状況



経石93出土状況



経石130出土状況



皇宋通宝出土状況（盛土内部）

第6图版



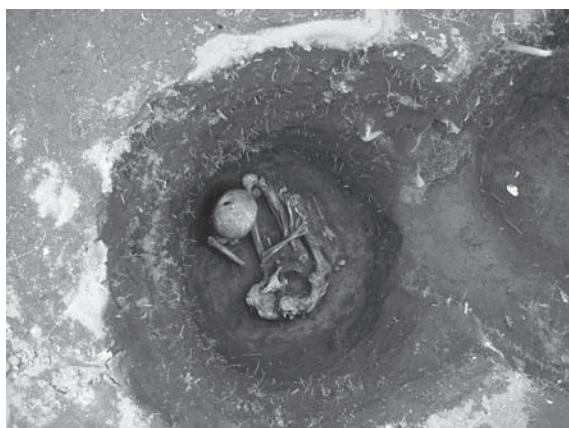
1号墓人骨出土状况



2号墓人骨出土状况



6号墓人骨出土状况



8号墓人骨出土状况

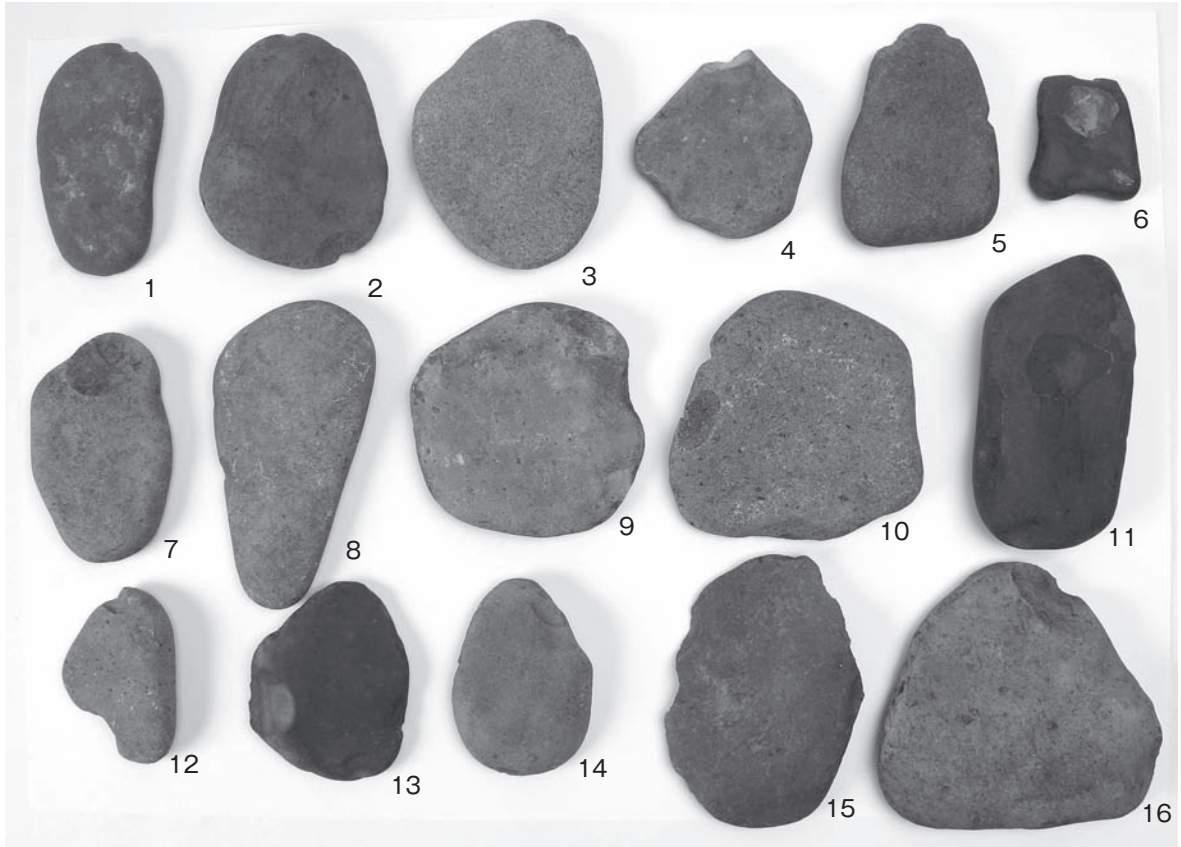


23号墓人骨出土状况

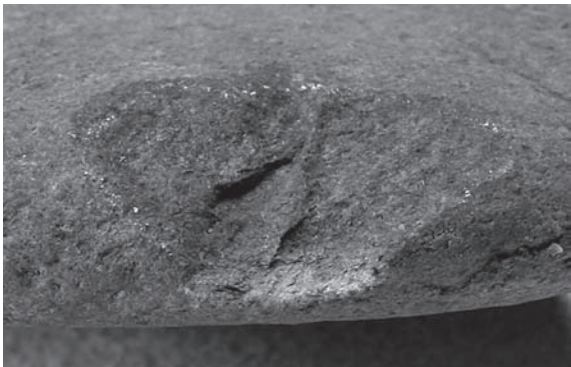


RG004沟迹





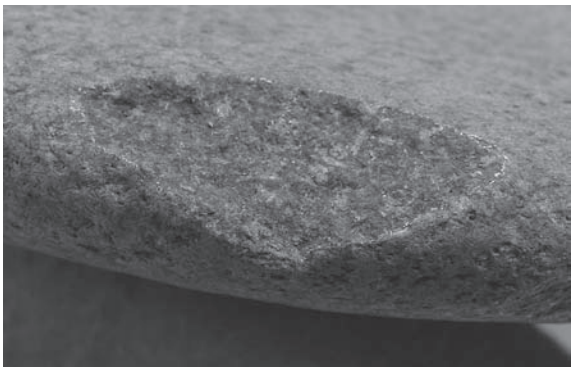
経塚主体部土坑出土 剥離痕のある経石



礫1の剥離痕



礫2の剥離痕



礫10の剥離痕



経塚盛土出土 皇宋通宝

第8図版



土坑墓出土 陶磁器



土坑墓出土 かわらけ



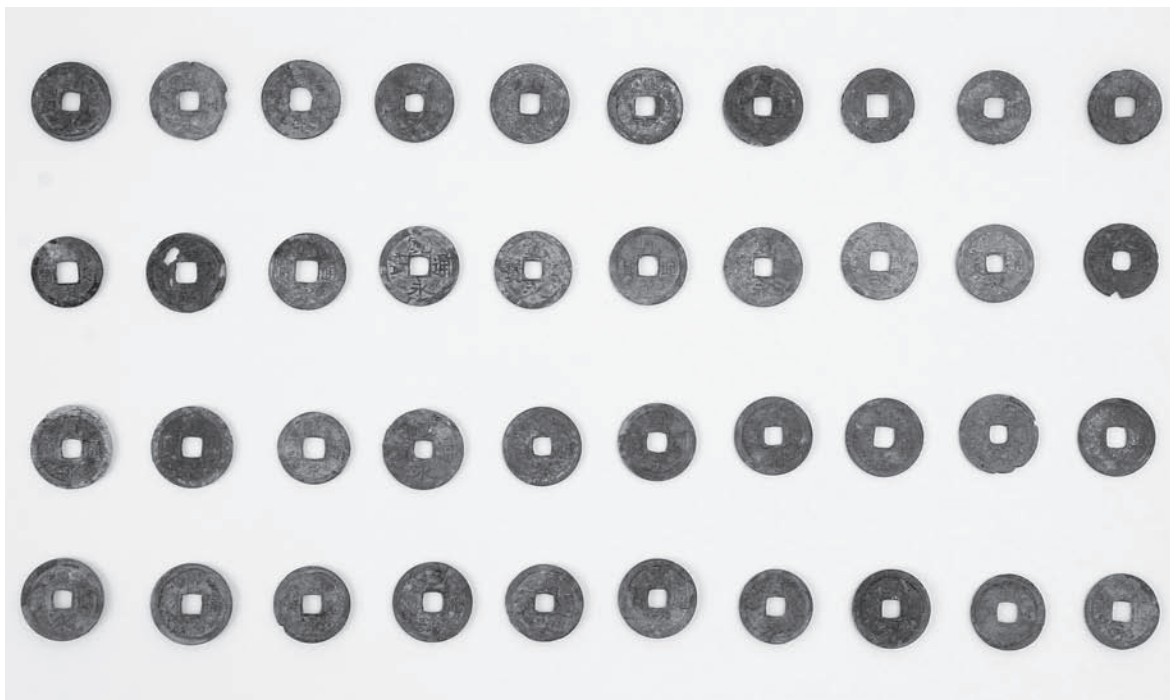
土坑墓出土 煙管



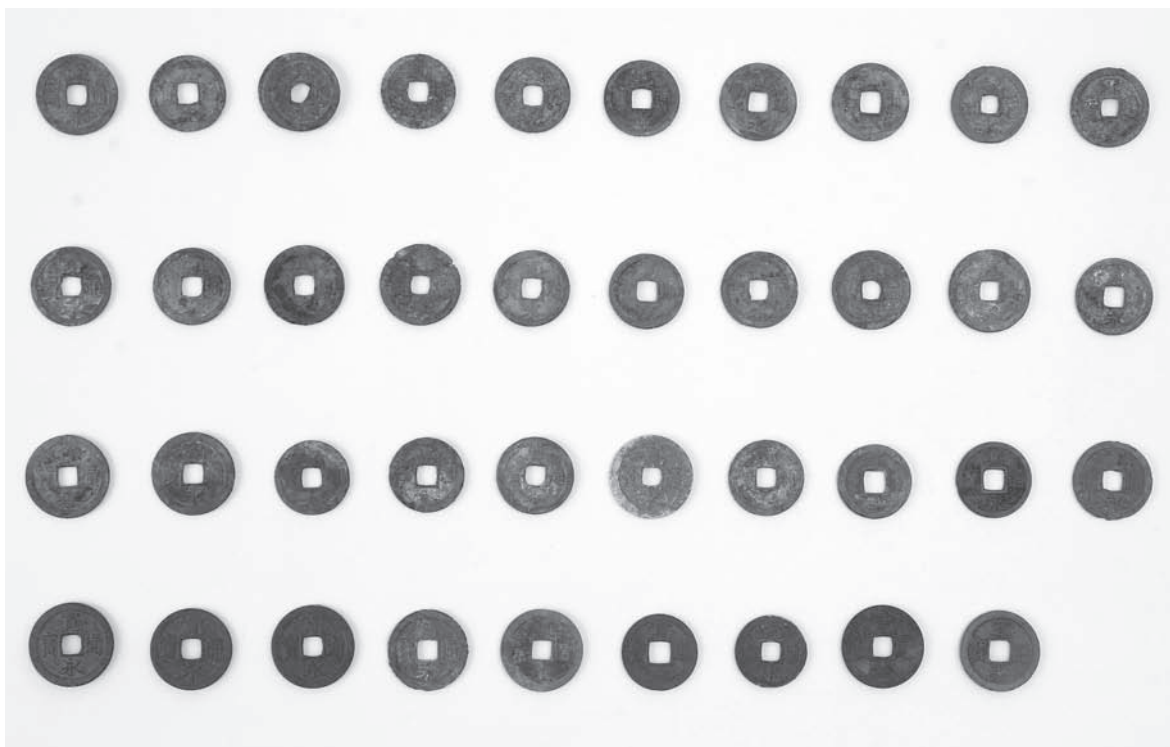
土坑墓出土 鏡ほか



土坑墓出土 硯・砥石

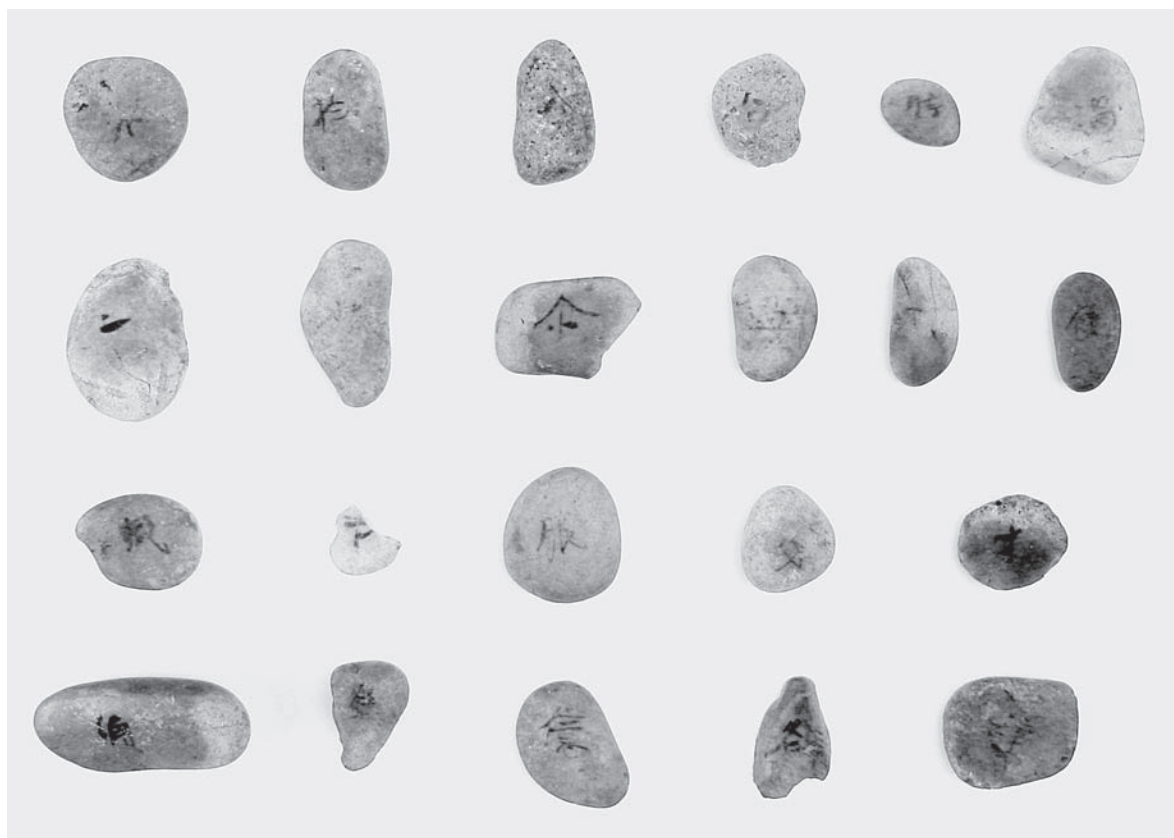


土坑墓出土 古錢



土坑墓・遺構外出土 古錢

第10図版



土坑墓・遺構外出土 經石（一字一石經）



包含層出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	「盛岡市内遺跡群」							
副書名	平成18・19年度発掘調査報告書							
編著者名	佐々木亮二							
編集機関	盛岡市 遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL 019-635-6600							
発行年月日	2010年3月12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゆくたみなみきょうづか 宿田南経塚 (宿田南遺跡)	いわてけんもりおかしきた 岩手県盛岡市北 ゆうがおせまち 夕顔瀬町38			39° 42' 38"	141° 07' 02"	第9次 2006.04.17～ 2006.06.21 2007.04.17～ 2007.08.02	126	個人駐車場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宿田南経塚 (宿田南遺跡第9次)	経塚	中世	経塚 1	経石(多字一石経・一字一石経)、陶磁器、かわらけ、寛永通宝、煙管、手鏡、続縄文土器		県内初見の多字一石経を埋納した経塚と一字一石経が納められた近世土坑墓を確認した。		
		近世	土坑墓 27					
要約	宿田南経塚は、県内初見の多字一石経と梵字を書写した経石を埋納した中世の経塚である。納められた経典は「妙法蓮華経」、「金剛経」、「梵字(種子)」、「梵字(金剛界五仏)」など多岐に渡る。納められた経典内容から天台宗との関連が推定され、中でも大日如来供養を主とした願意で造営されたと考えられる。また、金剛経が用いられていることと、経典の書風から、造営年代は鎌倉時代中期以降と推定される。							

## 盛岡市内遺跡群

### 宿田南経塚

(宿田南遺跡)

—平成18・19年度発掘調査報告書—

2010年3月12日 発行

編 集	盛岡市遺跡の学び館 〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 FAX 019-635-6605
発 行	盛岡市教育委員会 〒020-8532 岩手県盛岡市津志田14地割37番2
印 刷	株式会社 光文社 〒020-0106 岩手県盛岡市東松園三丁目12番地1

